

392
146

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 15 20 1 2 3 4 5

始



392-146



鐵笛倒吹講話

下卷



大正
10 5 12
內交



鐵笛倒吹講話 下卷

目次

第五十一則	保福佛殿の話	一
第五十二則	華嚴却迷の話	一一
第五十三則	國師趕出の話	二一
第五十四則	巖頭齋粥の話	三〇
第五十五則	睦州擔板の話	四五
第五十六則	魯祖面壁の話	五七
第五十七則	臨濟眞人の話	六四
第五十八則	高麗刻像の話	七三

第五十九則 無業情念の話……………八二

第六十則 園頭敲枕の話……………八七

第六十一則 雲門菓子の話……………九六

第六十二則 南泉住庵の話……………一〇二

第六十三則 藥山陞座の話……………一一一

第六十四則 鏡清放棒の話……………一二〇

第六十五則 百丈奇特の話……………一二九

第六十六則 道吾溪々の話……………一三五

第六十七則 乾峰輪回の話……………一四一

第六十八則 雲門三日の話……………一四八

第六十九則 尙書登樓の話……………一五五

第七十則 趙州住處の話……………一六三

第七十一則 雲門家風の話……………一七六

第七十二則 保壽背坐の話……………一八一

第七十三則 雪峯喝出の話……………一八九

第七十四則 瀉山選主の話……………一九六

第七十五則 一僧長坐の話……………二〇九

第七十六則 地藏牡丹の話……………二二七

第七十七則 洞山垂語の話……………二三五

第七十八則 雲居送袴の話……………二三二

第七十九則 德山宗乘の話……………二四〇

第八十則 芭蕉不携の話……………二四九

第八十一則	高亭打僧の話	二五六
第八十二則	巖頭一斧の話	二六四
第八十三則	仰山一割の話	二七四
第八十四則	乾峰一路の話	二八一
第八十五則	玄沙鐵船の話	二八九
第八十六則	仰山冥坐の話	二九七
第八十七則	禪月彈指の話	三〇二
第八十八則	藥山湖水の話	三〇九
第八十九則	雪峯毬子の話	三一七
第九十則	庵主索盆の話	三二三
第九十一則	法眼一滴の話	三三一

第九十二則	曹山四禁の話	三三七
第九十三則	德山師子の話	三四五
第九十四則	雲居獨住の話	三五四
第九十五則	臨濟正眼の話	三六一
第九十六則	巖頭三界の話	三六九
第九十七則	世尊瞻仰の話	三七七
第九十八則	華嚴白槌の話	三八六
第九十九則	大顛春秋の話	三九六
第一百則	滙山方丈の話	四一二

——目次終——

第六十二回	曹山四禁の語	三三
第六十三回	曹山神干の語	三五
第六十四回	雲谷圓封の語	三六
第六十五回	高亮玉別の語	三七
第六十六回	劉龍三聖の語	三八
第六十七回	甘竹神呪の語	三九
第六十八回	華嚴白眞の語	四〇
第六十九回	大願若火の語	四一
第七十回	蓬山神火の語	四二

鐵笛倒吹講話 下卷

日置黙仙述
池上文僊畫



第五十一則 保福佛殿の話

保福展禪師曰有人從佛殿後過暗裏抜見是張三李四隱隱擲抱

從佛殿前過明中控爲什麼不見相逢不相識且道佛法利害在甚俱語不知名

處求利害僧曰爲什麼爲什麼有一分麤境所以不見喚甚爲福乃叱之何不

自代曰若是佛殿便不見好箇佛殿可惜乎傾頽曰不是佛殿還可見否偷心未止福

日不是佛殿見箇什麼修補有
什麼益

【和訓】保福展禪師曰く、人有り佛殿後より過ぐ、暗裏に横く、是れ張三李四なることを見る。隱隱として猶ほ、佛殿前より過ぐ、明中に舌、頭を挫く、什麼としてか見ざる、相逢うて相識らす。俱しはら且く道へ佛法の利害甚の處にか在る、利害を求めて、僧曰く、一分の麤境有るが爲の所以に見えず。甚を喚んで、福乃ち之を叱す、何ぞ一踏に自ら代つて曰く、若し是れ佛殿ならば便ち見えす、塵境と爲す。福乎傾頰せり、曰く、是れ佛殿にあらずんば還つて見る可きや否や、偷心未だ、福曰く、是れ佛殿にあらず箇の什麼をか見ん。修補するも什麼の益有らん。

【本則】「保福展禪師曰く、人あり佛殿後より過ぐ」保福展禪師は青原下五世雪峰義存禪師の法嗣、福州の人で、十五歳にして雪峰の門に入り、多くは師兄長慶慧稜の提撕を蒙つた、梁の貞明三年に漳州刺史王公が保福寺を建て、請するに及んで之に住し、隨徒常に七百を下らなかつたといふ、此の則は從展和尚の示衆に對して僧が問端を提起したものと思はれる、先づ保福の語に、人あり佛殿後より過ぐとあるのは佛殿を假りて法の本體を現はしたのである、本體の活動する上には張三あ



り李四あり、山あり河あり人畜あり草木あり、一切萬物嚴然と其の相を現じて居る、佛殿の後を過ぐる時は此の萬有の相を見るのである、佛殿の後とは假に本體の活動する方面をいふたものである、「暗裏に横骨を抜く」保福和尚は此の場合暗中に明ある大機大用を現ぜられた、後といへば暗い處である、而かも其處を眼光炯々たる衲僧が通つて浮乎して居るもの、横つ腹をぶち抜いて骨まで取り去らうとする、油断もすきもあつたものではない、「是の張三李四を見る」張姓の人や李姓の人が三人も五人も居る、張氏や李氏ばかりではない、猫氏も狗氏も山氏も河氏も千萬無量の人を見る、これ佛殿の後を過ぐるもの、大機用である、「隠々として猶ほ舊日の妍を抱く」暗中に明ある趣をいふ、それ者のはては年寄つても何處かに垢抜けがして居る、「佛殿の前より過ぐ」什麼としてか見ざる」佛殿の前は明處である、佛殿後の暗處に於いて張三李四を見るならば佛殿前の明處に於いては何として一物も見ぬのか、明中に暗あるは何の道理ぞやと學人の參究を促した語である、「明中に舌頭を挫く」明中にあつて山川の景を見ながら却つて一言半句の形容も出來ぬ、宇宙の本體は言語を絶して居る、實に「相逢うて相識らず、俱に語つて名を知らず」である、吾々は常に本體と共に起き、本體と俱に語つて居るけれども、それを知らずに過して終ふのである、即ち佛殿前を過ぎて

見ることを得ざる消息をいふた著語である、「且く道へ佛法の利害甚の處にか在る」然らば佛殿後から向上的に佛法を研究するが利益か、佛殿後から向下的に這箇を辨得するが利益か、全體佛殿の前とは何、佛殿の後とは何であらうかと保福和尚は座下の學人に對して大疑團を與へられた、要するに偏位に於いては張三李四と千差萬別の法が見えるが、正位に於いては一物も見えぬ、抑も偏といひ正といふは畢竟什麼邊の事であるぞといふ問題である、問の形式ではあるが保福の語中已にチャントそれに對する答が示されて居る、問にして其儘答、答にして其儘問である、「利害を求めて什麼かせん」佛法には利とか害とかいふべきことはない、迷とか語とかいふこともない、保福和尚もつまらぬ詮索をしたものぢやと風外老人が一寸抑へた、「僧曰く、一分の麤境あるが爲の所以に見す」毫釐も差あれば天地懸に隔たる、違順僅かに起れば紛然として心を失すと坐禪儀にもある、一分の粗境とは毫釐の差である、些末なる違順是非の念である、法の本體を見得ざるは吾に此の粗境がある爲であるといふ、僧は張三李四を見るを利と思ひ、見ざるを害と思つて居る、所謂二見對待に墮して居るのである、「甚を喚んでか麤境と爲す」僧が麤境といふのは畢竟何のことであらうか、全體其の様なものは何處にも無い筈であるがと、この著語は又僧を抑へたのである、「福乃ち之を吐す」

保福和尚は僧が二見に墮して居るのを見て一喝に之を打破した、「何ぞ一踏に踏倒せざる」吐り付ける位ではまだ手ぬるい、何故一思ひに踏み踏つてやらなかつたと風外老人は更に高壓的に出る、「自ら代つて曰く、若し是れ佛殿ならば便ち見ず」佛殿は見不見に絶したものである、それを前であるとか後であるとか、見であるとか不見であるとかいふ様な相對的のものと考へるのは抑も眞に佛殿を知らぬからである、こゝに所謂佛殿とは本來の面目、宇宙の本體である、見ずとは見不見に涉らぬことをいふ、「好箇の佛殿可惜乎傾頽せり」僧を一箇の佛殿と見ての著語である、可惜乎此の佛殿は見不見の相對邊へ傾いて居るといふが、此の僧ばかりではない、諸人者各自に建立して居る佛殿は傾いて居りはせぬか、脚下照顧が肝要であるぞ、「曰く、是れ佛殿にあらずんば還つて見るべきや否や」此の僧餘程執念深い男と見えてまだ見不見の邊に滞つて居る、保福が佛殿ならば見ずといふたからそれでは佛殿でなければ見えるのかと問ふたのである、此の様に言句の末に拘泥して議論をした日には果しがない、「偷心未だ止まず」まだ迷ひ心が止まぬと見える、實に無眼子の漢には困つたものぢやと風外老人 傍から嘆息して居る、「福曰く、是れ佛殿にあらず、箇の什麼をか見ん」已に佛殿が見不見を離れたものとするれば、其の佛殿さへ無い時は勿論見るも見ぬもないではないかと、

保福和尚は僧が水掛論的の議論を吹き掛けて來たのを巧に外して一切を截断した、所謂入理の深談をせられた、併し「修補するも什麼の益かあらん」斯様に僧の謬見を論破し修補しても畢竟徒勞である、元來佛法上のことは説明や議論に涉るべきものでない、修補は徒勞であるのみならず却つて僧の如き無眼子の漢をして一層妄想を増長せしめるものであると。

玄樓曰保福一箇佛殿輪焉奐焉可謂結構周備是則是要且殿

裏無佛一三任和尚
放二大光明

【和訓】玄樓曰く保福一箇の佛殿、輪たり奐たり、謂つ可し、結構周備せりと、是なることは則ち是、要且つ殿裏に佛無し。和尚の大光明を
放つに一任す。

【評唱】『玄樓曰く、保福一箇の佛殿輪たり奐たり』輪たり奐たりとは古書に「長老文子の室を賀して曰く、美なるかな、輪たり奐たり」とあるを用ひたのである、其の註に「輪は以つて其の周圍を美にし、奐は以つて其の散明を美にす」といひ、又「輪は廣大をいひ奐は衆多をいふ」ともある、保福和尚が建立した佛殿は時間空間を絶した頗る偉大なるもので輪奐の美殆ど比ふるに物なき程で

ある、「謂つべし結構周備せりと」實に結構の限を盡して何一つ缺けた處はない、之を人格的にいへば智情意の三方面圓滿に具足して居るものといふべきであるが併し此の玄樓の眼から見れば「是なることは是なり、要且つ殿裏に佛なし」ぢや、立派なものではあるけれども、無眼子の僧を相手に見だの不見だのというて拖泥帶水したのは親切が過ぎて却て本分に蹉過して居る、所謂好箇の佛殿惜むらくは本尊なしである、「和尚の大明光を放つに一任す」玄樓和尚頗る鋭い批評をせられた、佛智慧の大明光を放つて古聖先徳の頂額を照破せられた處は遠かに狼玄樓の名に背かぬ、マア精光大威張りに威張るも宜しうござるが此の風外はその様なことには驚きませぬぞと潜かに鐵槌子を打ち込んだ趣のある著語である。

頌曰。閑卻面前看背後。是何利害此相干。

若其無利害。恐甚。慙麼爲點檢。

殿中更蔑一尊佛。用爲納僧作死棺。

雖然死棺。用則爲飛船。矣。

【和訓】頌に曰く、面前を閑卻して背後を見る、背後と面前とは、是れ何の利害ぞ此に相干る、若し其れ利害無からしめばな、殿中更に一尊佛を蔑し、幸に丹霞の用て納僧の爲めに死棺と作

す。然も死棺なりと雖も用るときんば飛船と爲る、○還て用る底の納僧有ると無しや○便ち打つ。

【頌】『面前を閑却して背後を見る』保福和尚は佛殿を擔ぎ出して示されたが、面前を閑却して背後を見たり、背後を閑却して面前のみに拘泥して居る、張三李四を見るときも、又什麼としてか見ざるといふのも、畢竟一方に偏した見方である、偏位を閑却して正位を見、正位を閑却して偏位を見るものであつて眞に佛殿の面目に相見し得たものとはいはれぬ、「背後と面前とは是れ同か是れ別か」背後といひ面前といへば別々に存在するもの、様であるけれども、水を離れて波なく波を離れて水なきが如く、面前即背後、背後即面前であつて而かも又同にあらず別にあらず、所謂別々不別である、「是れ何の利害ぞ此に相干る」面前も背後も、佛法の利害には無關係である、いづれの一面に即するも佛法の利害、宇宙の眞理と慕直に相見することは出来ぬ、前後際斷有無超越の當處に到つてこそ始めて明に利害を知ることが出来るのである、「若し利害無からしめば甚に愚つてか慙麼に點檢を爲す」利害に關らぬものとすれば玄樓和尚は何故に種々と點檢せられるぞ、ワザ／＼此の公案を擔ぎ出して評唱したり頌を作つたりする必要はないかと思へた、「殿中更に一尊を蔑し」用るて納僧の爲に死棺と爲す」佛殿の面前背後に就いて兎や角と之乎者也を容れて

居る保福は實に好箇の佛殿を建立しながら本尊を失却するものといふべきである、多年參じ飽いた納僧も、斯様な妄想妄見に執はれる時は、各自具有の佛殿を却つて無用の死棺となし去るに至るであらう、「幸に丹霞の難を免る」併し風外老人は佛殿に本尊が無ければ丹霞天然和尚の如き亂暴な作家が來ても焼き捨てる事が出来なくて結構ちやと擲捨した、又用ひて納僧の爲に云々の句に對しては「然も死棺なりと雖も用ゆる則んば飛船となる」と著語した、死中に活を認むるは納僧家尋常の茶飯である、死棺とはいふても之を活用する時は一瀉千里の快速ある機用を現はす、「還つて用ふる底の納僧あること無しや」サテ其死棺を飛船となし、死蛇をして活躍せしむる底の納僧が即今何處にあるか、遠い處を見渡すには及ばぬ、人々自己の脚下を照顧して見るが可い、「便ち打つ」ビシヤリ禪床を打つて學人を警覺し、上來の言端語端の跡を打ち拂つた、本則も玄樓和尚の評唱も頌も、畢竟示月の指敲門の瓦子であるから、學人諸士は言句に滯らずして直に佛殿の眞面目に相見するところが肝要である。

第五十二則 華嚴却迷の話

華嚴休靜禪師因僧問曰大悟底人卻迷時如何預抓 待痒 靜曰破鏡

不重照落華難上枝萬劫繫 驢橛

【和訓】 華嚴休靜禪師因みに僧問て曰く大悟底の人卻て迷ふ時如何、預め抓つて痒りを待つ 靜曰く破鏡重て照らさず落華枝に上り難し。萬劫の 繫驢橛

【本則】 『華嚴休靜禪師因に僧問うて曰く、大悟底の人却つて迷ふ時如何』華嚴の休靜禪師は支那曹洞宗の始祖洞山良价禪師の法嗣で、始め洛浦元安の座下に參して維那となり、後福州東山の華嚴寺に住し、唐の莊宗皇帝に召されて宗乘を都門に擧揚した人である、大悟底の人却つて迷ふ時如何といふ問は楞嚴會上に於いて富樓那尊者が始めて用ひたものであるといふが、僧は華嚴和尚に對して其の語を假り來つて點檢を請ふた、大悟却迷とは百尺竿頭進一步の正當恁麼時である、向上の頂を極めた上、翻つて向下の拖泥帶水を試みる消息である、「預め抓つて痒を待つ」大悟もしないものが

今から却迷のこと等を尋ねて何とする、それは恰ど痒くもならぬ先から搔いて置く様なもので、畢竟餘計な仕事である、それよりも先づ大悟徹底に努めることが肝要ぢやと風外老人は抑へた、「静曰く、破鏡重ねて照さず落華枝に上り難し」華嚴和尚も僧が未だ大悟をも得ずして大悟といふものに執着して居るのを看破し、先づ大悟に對する執着を打ち拂つて眞箇の大悟を得せしめんとして菓草の垂手をせられたのである、眞に大悟徹底した境界に於いては却迷とか悟後の修行とか向下却來とかいふことを別に論ずる必要はない、大悟其の儘が却迷、向上の當處が向下である、大悟とは破鏡である落華である、重ねて照すことも無く、再び枝に上ることも無い、而かも不重照は破鏡の作用であり、難上枝は落華の働である、華嚴和尚は大悟とも却迷ともいはずして大悟却迷の端的を脱體に示されたのであつて、之を破鏡が大悟の體で不重照が大悟の用である等と理窟を並べるのは畢竟一句合頭の語萬劫の擊驢橛である、たとひ理窟の上では巧に道理に契つて居る様でも其の實本分に蹉過して居る、風外老人が「萬劫の擊驢橛」と著語せられたのも畢竟這般の意味に外ならぬのである、一句合當の語萬劫の擊驢橛とはどんな理窟に合つた語でも、已に文字言句となつて現れた以上は人をして妄想執着せしむるものであつて、驢を繫いで其の自由を束縛する橛の様なものであると



會也否

いふ意味である。

玄樓曰。這僧半晴半明大如箇燈影裏行相似華嚴雖車不橫
推理不曲斷亦祇知一二五不識一十子細點檢將來只是賓
主一般鼻孔總有出頭不得處如山僧正恁麼判斷且道意在
甚處看看返照入江翻石壁歸雲擁樹失山村諸仁者且道是
大悟底大迷底

【和訓】玄樓曰く、この僧半晴半明、大に箇の燈影裏に行くが如くに相似たり、華嚴車
横に推さず理曲て断ぜずと雖も、亦た祇だ二五を知て一十を識らず、子細に點檢し將
ち來れば、只だ是れ賓主一般の鼻孔總に出頭不得の處有り、山僧が正恁麼に判斷するが
如き、且く道へ意甚の處にか在る、看よ看よ返照江に入つて石壁を翻し、歸雲樹を擁い
て山村を失す。諸仁者且らく道へ是れ
大悟底大迷底

【評唱】「玄樓曰く、この僧半晴半明大いに箇の燈影裏に行くが如くに相似たり」問僧が大悟底の人

却つて迷ふ時如何と祖門下の利刀を提けて華嚴の陣頭に迫つた處は甚だ立派であつたが、華嚴のい
い加減な答話を聞いて其の儘引込んだのは頗る器量が悪い、悟つたが如くにして悟つて居らぬ、晴
れたるが如く曇れるが如く、恰も微かな燈火の前を行く人の様である。其の悟り切らぬ有様は中有
に迷つた幽靈にも比すべきである、「華嚴車横さまに推さず、理曲けて断ぜずと雖も」華嚴休靜和尚
が僧に對して答へられた處は理の當然であつて少しも無理はない、横車を推すといふ亂暴な議論で
も無く、理を非に曲けるといふ様な不道理な答話でもない、併しながら「亦祇二五を知つて一十を
識らず」二五を知つて二五十なることを知らぬ、差別を知つて平等を知らぬ、破鏡重ねて照さず落
華枝に上り難きを知つても、未だ破鏡もなく落華もなき脱落の境界を知らぬ、「仔細に點檢し將
來れば只是れ賓主一般の鼻孔總に出頭不得の處あり」斯様に評するもの、更に一段深く考察し檢
べて見ると、賓たる問僧も、主たる華嚴和尚も共に鬼窟裡の活計、草窠裏の轉展であつて出身の活
路を缺いて居る、所謂自由無碍の境界を得て居らぬ、「山僧が正恁麼に判斷するが如き、且く道へ意
甚の處にか在る」サテ玄樓が斯様に兩箇實頭の漢を捕へて總に出頭不得といふたのはどういふ意旨
であらうか、理窟では分らぬ、説明も出來ぬ、これ實に三世の諸佛歴代の祖師も透過し難い關鎖で

ある、今女樓が一番此の關鎖を發轉して、的々の意旨を示さうならば「看よ看よ返照江に入つて石壁を翻し歸雲樹を擁して山村を失す」これぢや、此の一句に參じて眞箇に自然の美觀を味ひ得るものは出頭不得の道理も破鏡不重照の端的も分明に會得することが出来るであらう、この二句は杜子美の詩「楚王宮北正に黄昏、白帝城西過雨の跟、返照江に入りて石壁を翻し、歸雲樹を擁して山村を失す、衰年抱病唯枕を高くす。絶塞愁る時早く門を閉づ、久しく豺虎の亂るに留まる、南方實に未だ招かざるの魂あり」から引いたのである、女樓の意旨は言詮不及である、只僅かに古詩を假つて其の髣髴を偲ばしむるに過ぎぬ、而かも其の古詩は佛法禪道とは全く無關係な、全く没交渉な語であるけれども、古人が佛法の大意を問へるものに對して或は麻三斤を以つて答へ乾屎橛を以つて應じたのに比すればまだ叮嚀過ぎる程である、所謂眉鬚脱落の懼がある、「諸仁者且らく道へ是れ大悟底か大迷底か」蓮藏海和尚は斯様に評唱せられたが畢竟これ大迷の境界といふべきか將た又大悟底の分際とすべきか、これ學人の實地に參究すべき活問題である。

頌曰。明鏡不曾照。開華奚上枝。元來是華嚴舌頭短。大減三人。

大悟卻迷時。三世諸佛不知有。百川自有倒流勢。去劫海水更無一滴遺。

會也否。不會。虛空突出石烏龜。果然和尙舌頭長也。

【和訓】頌に曰く、明鏡曾て照らさず、南岳の手を勞す、開華奚ぞ枝に上らん、元來是れ華嚴舌頭短し、大に人の威、大悟卻て迷ふ時、三世諸佛有ることを知らず、百川自ら倒流の勢有り、去劫海水更に一適の遺る無し、來劫會すや也た否や不會、虛空突出す石烏龜。果然和尙舌頭長し。

【頌】「明鏡曾て照さず」華嚴は破鏡重ねて照さずと申さる、が、破鏡の照さぬのは勿論のこと、明皎々たる鏡と雖も佛向上の立場よりすれば照不照に渉るべきものではない、六祖慧能禪師も菩提本樹にあらす明鏡亦臺にあらす、本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かんと頌せられた、本來無一物であるのに何を照し何に照さるゝのか、畢竟華嚴和尚も我他彼此の差別に執はれてゐると見える、「南岳の手を勞すること勿れ」馬祖道一和尚が衡嶽にあつて常に座禪をして居ると、師匠の南嶽和尚が或日何の爲に座禪をするのかと尋ねた、馬祖が作佛を圖かる、佛にならうと思ひますと答へると、南嶽は傍にあつた瓢を拾つて石の上で磨き始めた、馬祖が何をなさるといふと、南嶽は鏡にしやう

と思ふと答へたといふことがある、明鏡も曾て照さぬものなれば南嶽が瓢を磨するのも畢竟無駄骨折である、南嶽の手を勞するにも及ばぬと頌の意に對應した著語である、「開華奚ぞ枝に上らん」櫻木をうちわり見れば何もなし、花のたねとは何をいふらんといふが、落華が枝に上り難いのみではなく、開華といふものも畢竟何處にあるぞ、櫻木を打ち割つて見るまでもない、春光煦々たる處、爛漫と咲いて居る處のものも元來是れ咲くの散るのといふ論量に涉るべきものではない、眞如の花、本體の花は開落榮枯を絶して居る、迷といふも悟といふも佛法の大海に起伏する一波一瀾で、之を實有と見て執着するが故に大悟却迷の道理も破鏡不量照の端的も會することが出来ぬのである、元來是れ無根の樹、木人歌ひ石女舞ふ、一切萬有の活動は畢竟無作の作、無功用の功用である、繚亂たる花木も又これ無根の樹の活作用である、枝に上る上らぬの問題ではないぞ、これも頌意に照應じた著語である「華嚴舌頭短し」華嚴和尚の答語は未だ充分ではない、所謂意餘ありて語足らずである、これでは僧をして眞箇本面目に見せしめ得たかは頗る覺束ない、「大に人の威光を滅す」あの様な答語をしては華嚴和尚の威光も丸で臺なしちやと風外老人も同意せられた、「大悟却つて迷ふ時」百川自ら倒流の勢あり」大悟却迷の端的を眞箇に會取して所謂向卜却來の活作用を現じ得る底

の境界に至つた時は、所謂前後際斷是非泯滅して上流下流の差別はない、されば倒流といふも已に無用の閑言語である、高祖大師は「大海若し足ることを知らば百川應に倒流すべし」と申されたが、大悟却迷の當處には大海を下とし百川を上とするといふ様な凡見常量は雙に泯滅して居るから足ることを知るといふことも倒流するといふことも皆用不着である、「三世諸佛あることを知らず、狸奴白狐却つて有ることを知る」大悟却迷といふ端的は人々個々圓成底であるが彼に隠れて之に照はれ、甲に明にして乙に昧い、佛法の上には三世諸佛と狸奴白狐と貴賤高下の差別はない、「去劫已前」百川は空劫已前より倒流して居る、今更始まつたことではない、「海水更に一滴の遺る無し」百川が倒流なれば大海に一滴の水も残らぬのは當然である、大悟もなく却迷もなく、大海もなく百川もない、一切萬有の相を拂ひ盡して、所謂萬里雲晴れて長空月清しである、「來劫の後」這般の消息は盡未來際の後に来るも毫も變ずることばない、時間空間を絶して一切萬有盡く斷盡したのが所謂大悟却迷の時節である、「會すや否や」サア此の端的が會得せられたかナ、學問や理窟では百川倒流の道理は分らぬぞ、一滴も残るなしの面目は會得のられぬ、「不會不會」そんなことが解るものか、解つたと思へば却つて本分を失却する、「虚空に突出す石鳥龜」石鳥龜は石で作つた旨龜である、百川

倒流の端的は言端語端を絶して居る、會することも會せしめることも出来るものではないが、強ひて一著子を下して見やうならば、虚空に石鳥龜をつき出したとでもいふべきであらう、登山和尚は黒漆の崑崙夜裏に走るといひ、石頭大師は木人歌ひ石女立つて舞ふといはれた、没蹤跡斷消息の端的は斯でもいふ外はない、イヤかくいふも己に第二第三である、「果然」果せる哉蓮藏海老人何とも彼とも名の付け様のないものを持ち出された、「和尚舌頭長し」華嚴舌頭短しと古佛を批難する程であるから追がに巧い一着を下された、這箇の端的は乾坤一擲の大英斷を以つて身心を放下し一切を喝散して始めて會取することが出来るのである。

第五十三則 國師趕出の話

南陽忠國師因丹霞來訪賊將到也 值忠睡睡虎眼邊有百步威 次乃問侍者耽源

曰、國師在否言中有響○冷眼見ニ多關 曰、在即在祇是不見客使我類思ニ靈照女 霞曰、太

深遠生道老賊 者曰、莫道上座佛眼也覩不見捏ニ扭鼻孔亦不知 霞曰、龍生

龍子鳳生鳳子前箭輕後箭深 國師睡起眼光射入 侍者舉似國師敗軍將 國師乃

打侍者二十棒趕出田單復齊○丹霞丹霞還知痛痒麼 丹霞聞之曰、不謬爲南陽國

師仲達叫於胡蘆谷

【和訓】南陽の忠國師、因みに丹霞來り訪ふ、賊將到、忠の睡るに値ふ次で、睡虎眼邊百歩の威あり、乃ち侍者耽源に問うて曰く、國師在すや否や、言中に響有り○冷眼に多關を見る、曰く、在すことは即在す、

祇だ是れ客に見えず、我をして頼りに靈霞曰く、太だ深遠生老賊者曰く、道ふこと莫れ上座佛眼も也た覷不見、鼻孔を捏扭せらる霞曰く、龍龍子を生じ鳳鳳子を生ず、國師睡より起く眼光人、侍者國師に舉似す敗軍國師乃ち侍者を打つこと二十捧して趕ひ出す田齊を復す○丹霞丹霞を聞いて曰く、南陽の國師たるに謬らず。仲逢胡蘆谷に叫ぶ。

【本則】『南陽忠國師因に丹霞來り訪ふ』南陽慧忠國師は六祖慧能大師の法を嗣ぎ、四十年間南陽白崖山黨子谷に住して修行した人である、唐の玄宗皇帝に請せられて京師の龍興寺に住し、それより千福寺西禪院光宅寺等に歴住し、三代の皇帝に厚き歸依を受け、又王公縉紳達も其の道風に服した、大師は弘法に取られ大闍は秀吉に取られたといふが、禪門では國師號は此の人の獨占の様になつて居る、丹霞には丹霞子淳と丹霞天然とがあるが、こゝは丹霞天然のことである、此の人は若い時に官吏になる志望で、長安へ科擧——今でいへば文官試験——を受けに行く途中、或處で禪僧と宿り合せて、選官何ぞ選佛に如かんやと訓されて六祖の法孫馬祖道一禪師の門に入つて禪に參じた人である後馬祖の指示によつて石頭希遷禪師に參じて其の法を嗣いだ、頗る奇行に富んだ人で、中にも

丹霞燒佛といふ有名な逸話がある、和尚が或時慧林寺に居ると、時恰も嚴寒の候であつたので寒さに堪へ兼ねて遂に本殿から木佛を持ち出して來て焚いて股火をして居た、これを見たものが驚いて咎めると、和尚は火箸で灰を掻き廻しながら「お舍利を得やうと思ふ」と答へた、其の僧が又「木佛を燒いても舍利等がある筈はない」といふと佛の骨の中には舍利があるといふが、舍利もない様なものを有難さうに祠つて置く必要はない、もつと持つて來て燒いて終はうといつたといふ、何處までも風變りな和尚であつた、此の丹霞が當時朝廷の歸依頗る厚く、飛ぶ鳥も落さんばかり威勢の良い南陽慧忠國師を訪問した「賊將到れり」サア油斷のならぬ奸賊が來た、浮乎して居ると生肝まですらはれるぞと風外老人が先づ學人に注意した、「忠の睡るに値ふ」恰ど其の時説法の勢れか何かで慧忠國師が居睡りをして居つた、「睡虎眼邊百歩の威あり」睡つて居ても追がに虎だ、眼の邊には怖しい威力が籠つて居る、浮乎近よると一嚙に殺されさうだと忠國師を揚げた、「乃ち侍者耽源に問うて曰く、國師在すや否や」侍者の耽源に忠國師は御在山かと問ふた、穩かな中にも却々に油斷のならぬ語氣が籠つて居る、睡虎の威にも劣らぬ威風がある、「言中に響あり」と風外老人も參學に注意せられた「冷眼に玄關を見る」じろりと白目で玄關を睨んだ目付は實に物凄い、「曰く、在すこと

は即ち在す、祇是れ客を見ず」耽源も遺がに只者ではない、勢鋭く打ち込んで来る丹霞の太刀先を巧にあしらつて、國師は在宅ではあるが客には逢はれませぬといふ、「我をして頻に靈照女を思はしむ」丹霞が曾て麗居士を訪はんとして其の附近の島で菜を採つて居た一女子に居士の在否を尋ねると、其の女子は籃を取上げて立つた、丹霞が再び問ふと今度は籃を持つてサツサと行つて終つた、女子は即ち靈照女である、風外老人は、今丹霞と耽源侍者との問答を聞くとそのことが思ひ合されるといふて、暗に兩人の作略を讚嘆した、「霞曰く、太だ深遠生」丹霞は侍者の答を聞いて、成程却々奥深い御挨拶ぢやナと讚めながら、而かもヂツと侍者の脚下を睨んで居る、所謂探竿影草である、「這の老賊」浮乎すれば生膽でも取り兼ねない、喰へぬ老爺ぢやと口穢い讚嘆である、「者曰く、道ふこと莫れ上座佛眼も也た覷不見と」どうして〜貴殿位に此の深遠な答話が解るものか、三世の諸佛歴代の祖師が來ても、却々國師に拜調は免しはせぬと高飛車に出た、「鼻孔を捏扭せらるゝも亦知らず」丹霞の爲に鼻をねち切られるの知らずに耽源侍者却々鼻息が荒いワイと擲擲した、「霞曰く、龍龍子を生じ鳳鳳子を生ず」我程此の師にして此の弟子あり、國師の門下には遺がに立派な龍象が居るワイと丹霞が口を極めて侍者を讚めた、併し此の讚め振が油斷がならぬ、浮乎調子に乗ると辛

い目に遇ふぞ、されば風外老人も「前箭は輕く後箭は深し」だん〜と奥の手が出るぞと警告せられた、「國師睡より起く」餘り玄關が騒しいので國師が目覺した、或は狸寝入であつたかも知れぬ、「眼光人を射る」ねぼけ面ではない、ムツクリ起でも人の腹の底を見ぬく程の眼力を具して居る、「侍者國師に舉似す」舉似は舉示と同じである、玄關に於ける問答の様子を侍者耽源が國師に告げた、「敗軍の將」丹霞の爲に前箭後箭を射當てられた敗軍の將であるから最早兵を語る資格はないと抑へた、「國師乃ち侍者を打つこと二十棒して趕ひ出す」國師は侍者の話を聞くやイキナリ二十棒を喫はして侍者を逐ひ出して終つた、「田單齊を復す」齊が燕の爲に亡されんとした時、田單は即墨を固守し奇計を回らして遂に燕を破つて齊を復した、國師が侍者を打つたのは却つて侍者の爲に丹霞に讐を報じたのである、「丹霞丹霞還つて痛痒を知るや」侍者は丹霞の犠牲になつた譯であるから、痛痒は正に丹霞が感すべき處であつた、「丹霞之を聞いて曰く、南陽は國師たるに譲らず」遺がに丹霞は鋭敏な感覺を持つて居つたと見えて忽ち國師の意旨を悟つて、成程南陽和尙は國師たるに恥ぢぬ大器量を具へてござる、侍者の喫した二十棒の痛みがしみ〜と我が骨に徹するワイといふた、國師と丹霞とは未だ相見せずして己に證契即通して居る、所謂肝膽相照の間柄であるから侍者を通して

互に棒を與へ棒を受けて居るのである、それは兎も角、南陽は何が故に二十棒を付與したのであらうか、耽源や丹霞が玄關先で芝居めいた問答をして居るのを齒痒く思つたのか、或は又二人の言端語端の迹を盡く打ち拂ふつもりであつたか、國師の眞意旨を會せんとならば須く此の一則全體の的意に參得すべきである、「仲達胡蘆谷に叫ぶ」三國の頃、蜀に孔明あり魏に仲達があつて互に神算鬼策を闘はした、南陽と丹霞は之に比すべき禪門の豪傑達である。

玄樓曰、侍者著賊也不識、國師打而趕出、棒頭有眼、明賢日

月、丹霞道不謬爲南陽國師、見賊身既露、賊知

【和訓】玄樓曰く、侍者賊を著くことも也た識らず、國師打て趕ひ出す、棒頭に眼あり、明かなること日月に賢れり、丹霞道く南陽國師たるに謬らずと、見よ賊身既に露る。賊賊を知る。

【評唱】『玄樓曰く、侍者賊を著くことも也た識らず』丹霞は太平の奸賊である、耽源侍者に國師の在否を問ふた刹那に於いてスツカリ其の家財を掠め取つて終つたが、取られた當人一向それを知

らずに在すことは在すだの佛眼も覷不見だのと餘計な文句を並べて居る、「國師打つて趕ひ出す、棒頭に眼あり」忠國師は徹惻の慈悲を以つて痛棒二十を喫はして耽源を趕ひ出して終はれた、其の痛棒は盲滅法に下したのではない、棒頭にチャンと眼があつて龍蛇を分ち縞素を辨じて居る、「明日月に賢れり」其の眼光は爛々として學人の腹の底まで見透す程であつて明かなることは日月よりも勝つて居る「丹霞道く、南陽の國師たるに謬らずと、見よ賊身既に露る」丹霞は又南陽を評して國師たるに恥ぢずといふたが、これは又煮ても焼いても食へぬ強かもので、穩かな言葉の中にも何となく凄味がある言葉である、「賊賊を知る」蛇の道はべひとやら、玄樓和尚には丹霞の隠して居る尻尾がよく見える。

頌曰、棒頭上有出身路、遮莫言中陷虎機、綴五饒三何

足悅、棋逢敵手始堪圍

【和訓】頌に曰く、棒頭上に出身の路あり、和尙の脚跟を截断せん、遮莫言中陷虎の機、放下する、綴五饒三何ぞ悦ぶに足らん、棋は敵手に逢て始めて圍むに堪へたり。

【頌】『棒頭に出身の路あり』國師が侍者を接した手許に於いて國師も丹霞も侍者も共に出身の活路を得て自由無碍の作用が現じ得られるのである、イヤ丹霞や耽源ばかりではない、天下人悉く此の痛棒下に於いて出身の活路を得べきである。『和尚の脚跟を截断せん』國師の二十棒が何だ、あの様なものを有難がつて居る様では玄樓和尚も少々ヤキが廻つたと見える、拙僧が一番脚跟下の送執を断ち切つて進ぜやうかと風外老人が例の活機輪を轉ぜられる、『遮莫、言中陷虎の機』丹霞の言中には虎を穿る、窟が布いてある、浮かりすると大唐の國師でも天下の衲僧でも忽ち自由の分はない、併し乍ら明眼の衲僧たる我が國師はそんなことには頓着はせぬ、陷虎の機でも鼠落しても勝手に掛けるが可い、放過すること莫れ』サア此の句が目の着けどころである、諸人者見のがしてはならぬぞと風外老人の爲人である、『綴五饒三何ぞ悦ぶに足らん』綴五饒三は圍碁の上のことで、綴五は五目置くこと、饒三は三目とること、三目や五目の取り遣りをして悦んで居るのは初心のことで、名人上手となれば全局面に涉つて勝敗を争ふ、併し風外老人は『勝敗は只一石と在り』と著語せられたがそれも又一應の見解である、一石と雖も全局の勝敗に拘るものであるから輕々に放過すべきではない、『棋は敵手に逢つて始めて圍むに堪へたり』棋も綴五饒三を悦んで居る様な下手なものとして

は面白くない、相當に手應のある敵手と打つてこそ面白味があるものである、國師も侍者耽源を敵手では一向痛棒の下し甲斐もなかつたであらうが、眞の敵手は丹霞といふ一隻眼を具した伶俐の漢であつたから思ひ切つて二十棒が下されたのであらう、本因坊と猿蓑とは到底問題にならぬ、山僧比に到つて斧柯の爛る、を覺えず昔或人が山中で仙人の棋を見て居る中に斧の柯が朽ちて終つて、家へ歸つたら數十年経つて居つたといふ話があるが、今忠國師と丹霞との圍碁を見て居ると拙僧も時の経つのも忘れて終ふと風外老人も讚嘆せられた。此の頌は句が轉倒して用ひてあるから一寸意味が解り悪いが、要するに斯いふ意味である、丹霞は陷虎の機を設けて國師を穿れやうとしたが、その様なものは惧る、には足らぬ、國師の棒頭には出身の路があつて自由自在に陷虎の機を打ち破つて終ふ、併し乍ら丹霞も有力の大人であるから國師に取つては好箇の敵手である、綴五饒三を悦んで居る様な無眼子の漢ではない、さればこそ一場の商量が首尾圓成したのである。

第五十四則 巖頭齋粥の話

巖頭齋禪師住菴時、欽山來相訪、問曰、師兄在此二時齋粥如

何有口無不食頭曰、每日受張四郎宅供養、極是難消眞箇飯袋子〇可^レ供^レ養^レ這道人^一始得^レ山

曰、師兄受他供養、他時異日去他家作男作女何說^レ他日^レ即^レ今^レ是什麼^レ頭面頭以

手捏拳安頭上大疑^レ殺人^レ山曰、恁麼則向頂顚上生去喚^レ鐘^レ作^レ鐘^レ頭便喝^レ雷^レ

山曰、何如生取文邃去好青原自家酒喫了^レ猶言未^レ沾^レ唇頭又喝曰、我見汝三

二十年鼓兩片皮直到如今猶作者箇去就便喝出君子之交^レ〇求^レ友^レ須^レ勝^レ己時

張四郎同山歸宅、山垂淚曰、三十年同行有佛法不向文邃

道更說^レ什麼^レ〇何^レ曾與^レ他同行來至半夜又去敲門曰、師兄師兄有佛法不向文

邃道且乞慈悲親言自^レ親口^レ出^レ〇更聞爲^レ什麼^レ頭遂開門爲說細大法門且道岩頭說^レ這什麼^レ法^レ方

得安樂再回澧州住也苦哉

【和訓】巖頭齋禪師住菴の時、欽山來りて相訪ふ、問うて曰く、師兄此に在りて二時の

齋粥如何と云ふとなし、頭曰く、毎日張四郎が宅の供養を受く、極めて是れ消し難し、眞

の飯袋子〇道の道人を、山曰く、師兄他の供養を受く、他時異日他家に去て男と作り女と作ら

ん、何の他日とか説かん即ち頭手を以つて拳を擡げて頭上に安ず大に人を疑殺す山曰く恁麼ならば則

ち頂顚上に向つて生じ去らん鐘を喚んで響と作す頭即ち喝す迅雷耳を掩ひ難し山曰く、何ぞ文邃を生取

し去るの好きに如かん青原自家の酒、喫了て猶ほ言ふ未だ唇を沾ほさず頭又た喝して曰く、我れ汝を見る三二十年、

兩片皮を鼓し直に如今に到つて猶ほ者箇の去就を作すと云ふて便ち喝し出す君子之交〇友を求るは須ら

く己に勝時、張四郎山と同うして宅に歸る、山涙を垂れて曰く、三十年同行して佛法あれ

ども文邃に向つて道はず更に什麼をか説かん〇曾て他を同行し來る半夜に至りて又た去て門を敲いて曰く、師兄

師兄佛法有れども文遂に向つて道はず、且つ乞ふ慈悲せよ、親言は親口より出づ。更頭遂に門を開いて爲に細大の法門を説く。且く道へ岩頭這の、方に安樂を得て再び澧州に回つて住す。苦なる哉。

【本則】「巖頭禪師住庵の時、欽山來りて相訪ふ」巖頭全義和尚は徳山宣鑑の法嗣である、始め臨濟の歸寂や仰山に参じたが、機縁が契はなかつたので去つて徳山に嗣法した、晩年洞庭湖畔の臥龍山に庵居して四來の雲衲を接化し、唐の光啓年中に賊兵の爲に斬殺せられた人である、欽山は名を文遂といつて洞山良价禪師の法嗣である、徳山門下の雪峰も巖頭と交つて盛に大道を商量した、出世年代は詳かでないが兎に角巖頭等と同時代の人であることはいふまでもない、此の時代は有名な會昌沙汰が行はれて、當時の僧尼は或は船頭となり或は農夫となつて憐憫たる苦勞をしたものである、巖頭和尚が庵居せられたのも畢竟此の難を避ける爲であつたものと思はれる、「問うて曰く、師兄此に在つて二時の齋粥如何」欽山が巖頭を師兄と呼んだのは通常の敬語である、二人は法系の上では兄弟ではない、禪僧は朝と晝に食事をするのが規定であるから二時の齋粥といふたのであるが欽山は食事のこと等を問題にしたのではなく、所謂借事問で、齋粥に事よせて巖頭の見處を試問し

たのである、「口有つて食はずといふことなし」口があれば食ふには定つて居る、鼻あれば嗅ぐには定つて居る、今更改めて問ふまでもないことぢやと抑へた、「頭曰く、毎日張四郎宅の供養を受く、極めて是れ消し難し」二時の粥飯は毎日張四郎といふもの、家で供養してくれるが、何かで償はうと思ふけれども僧侶の身では兎角意に任せぬワイといふ極めて穩かな應對である、「眞箇の飯袋子」毎日他の供養を受けて毎日佛道を實踐して居る、一步も道に違背せぬ所の巖頭和尚は實に眞箇の道人といふべきである、「この道人を供養して始めて得べし」斯様な道人を供養してこそ始めて眞に供養の功があるといふものぢやと風外老人は語を重ねて徳山を讃揚せられた、「山曰く、師兄他の供養を受く、他時異日他家に去つて男と作り女と作らん」其の様に張四郎の供養を受けると何時か其の家にいつて奴婢となつて償却せねばなりませんといふ、「何の他日とか説かん、即今是れ什麼の顔面ぞ」他日どころではない、現に今もう下女面下男面になつて居るではないか、因果は觀面ぢやと風外老人が横槍を入れる、「頭手を以つて拳を捏けて頭上に安す」下女下男ではない、俺はもう牛馬になつたぞと角の生へた眞似をする、これ實に出身の機用である、恩怨や因果に捉はれた欽山に對しては好箇頂門の一針であるけれども、欽山まだそれを會得が出来ぬらしい、「大いに人を疑殺す」

何だか變な眞似をして巖頭は人を迷はせる、活眼を開いて其の手許を見定めめるが好い、「山曰く、慙麼ならば則ち頂頸上に向つて生じ去らん」牛の角ならばもつと上の方の頭の頂上に生へる、それでは少々低過ぎますといふ、欽山はもう巖頭の手先に迷はされて、角だの頭だのといふ一物を珍重して居る、「鐘を喚んで獲と作す」馬を喚んで鹿となし、煩惱を喚んで菩提となす、兎角一物に滯るものは事物の眞相を見るの力が無い、「頭便ち喝す」巖頭は欽山の迷執を打破する爲に大喝一聲した、「迅雷耳を掩ひ難し」實に耳をおさへる餘裕もない敏捷な機略である、「山曰く、何ぞ文遂を生取し去るの好きに如かん」大喝一聲とは驚いた、同參ならば同參らしくもつと穩かに提撕して呉れたが好い、「青原白家の酒喫し了つて猶ほ言ふ未だ唇を沾さず」と、灘伊丹の銘酒を鰯腹飲みながら一滴も飲まぬ様なことを言つて居る、欽山は巖頭の爲に懇篤丁寧に提撕せられて居るではないか、其の上文遂を生取せよ等とは餘りに愆が深過ぎる、「頭又喝して曰く、我汝を見るに三二十年兩片皮を鼓し、直に如今に到つて猶ほ者箇の去就を作すというて便ち喝し出す」片兩皮を鼓すは上下の唇を動かして語を發するをいふ、巖頭は、二三十年來種々と説明して居るのに、今に到つてもまだ其の様な眞似するかと怒鳴り散して逐ひ出して終つた、婆心止み難く、慈愛の暗涙に咽びながらの辛辣な作略

孝子
不
大
上



である、「君子の交」、交は須らく淡泊でなければならぬ、淡泊の中に眞情の溢る、のが所謂君子の交である、「友を求むるは須く己に勝るべし」朱に交れば赤くなる、人は交る友によつて善くもなれば悪しくもなるとは世間普通の教訓であるが、佛法上に於いても良友の提撕といふことが大い力のあるものである、「時に張四郎山と同居して宅に歸る、山涙を垂れて曰く、三十年同行して佛法あれども文遂に向つて道はず」欽山は巖頭に大喝せられて、折柄來合せて居つた張四郎と共に山を下りながら道々涙を流して嘆息した、巖頭和尚とは三十年來の同參であるが巖頭和尚は佛法的々の意を會して居ながら拙僧には一向示してくれぬと、如何にも落膽した様子である、「更に什麼をか説かん」其の様に愚痴をこぼしても別に説くべき何物もないではないか、少しでも言句に涉れば己に第二第三である、「何ぞ曾て他と同行し來る」其の様に嘆くならば何故これまで同行して來たのか、今まで離れ得ぬ處を見ると何か甘いことがあつたに相違ないと風外老人意味悪く脚下を睨む、「半夜に至つて又去つて門を敲いて曰く、師兄師兄、佛法あれども文遂に向つて道はず、且つ乞ふ慈悲せよ」其の晩更けてから欽山は再び巖頭の門を敲いて、師兄は佛法の的意、宇宙の眞理を悟つて居ながら拙僧には教へて下さらぬ、今晚こそ是非示して貰ひたいと懇願した、「親言は親口より出づ」渾身の

熱誠を籠めた語である、溢る、如き熱誠がなくては此の様な力の籠つた語は出ぬ、「更に聞いて什麼か爲ん」併し吾等は本來佛性を具有して居る、今更他人から法の道理を聞いた處で我に於いて一毫も増す處はない、「頭門を開いて爲に細大の法門を説く」巖頭は欽山の熱誠に動かされて細大洩らさず佛法の道理を苦口叮嚀に説き示した、「且らく道へ巖頭這の什麼の法をか説く」法は説くべきものでもなく示すべきものでもない、親參親究して始めて證契即通すべきものである、全體巖頭は何を説かれたであらうか、細大の法門といつた丈では何の事かサツパリ分らぬ、説いたならば説いた大體でも書きさうなものであるのに、細大の法門と文書したのは、畢竟言詮不及意路不到であるが爲である、「方に安樂を得て再び澧州に回つて住す」文遂和尚の住した欽山は澧州にある、文遂和尚は己に巖頭の細大洩さぬ説法を聞いて満足して澧州の欽山に回つた、上來の古則を表面から見れば欽山が未だ佛法の的意を會得せぬ、所謂無眼子の漢に過ぎぬ様に思はれるけれども、己に欽山に住して若干の衆僧を領する程であるから、全くの素凡夫とはいはれぬ、巖頭に商量を挑んだのも亦巖頭に細大の法門を聞いたのも、畢竟佛祖正傳の法を表からも裏からも仔細に點檢せん爲である、一旦大悟徹底すればそれで佛道修行の必要はないといふものではない、大悟却迷、一生不離叢林とい

ふことは佛道修行の上にも最も大切なことである、二六時中常に佛道を離れず修行を怠らぬ心掛が肝要であつて、畢竟欽山と巖頭との此の一段の法戦も實參實究の一斷片である、安樂を得て澧州に回つて住したといつても、澧州で手足を延して樂々と寢をべつて居つた譯ではない、苦なる哉苦なる哉」と風外老人もいふて居る通り、澧州に回つてからも又更に一段の修行に苦心を重ねられたのである。

玄樓曰、今古叢林徧歴客、於中有學道士、又有學語類、蓋學語類多、學道士少、欽山尙未脫學語流類、所以巖頭曰、我見汝三二十年鼓兩片皮直到如今猶作者箇去就、雖然與麼如欽山者知非改過卒以得至得道安樂田地、如今時人求其似欽山者尙難得、況於真箇學道士哉、佛法興衰可知、此事且致、如他捏拳安頭上畢竟是何道理、閉卻咽喉唇吻離計

較卜度試請速道速道。某疑這話久矣

【和訓】玄樓曰く、今古叢林徧歴の客、中に於いて學道の士有り又た學語の類有り、蓋し學語の類は多く學道の士は少し、欽山尙ほ未だ學語流の類を脱せず、所以に巖頭曰く、我れ汝を見る三二十年、兩片皮を鼓して直に如今に到つて猶ほ者箇の去就を作す、然も與麼なりと雖も欽山の如きは非を知り過を改めて卒に以て得道安樂の田地に至ることを得たり、今時の人の如き其れ欽山に似たる者を求めるに尙ほ得難し、況や真箇學道の士に於いてをや、佛法の興衰知んぬ可し、此事は且らく致く、他の拳を捏げて頭上に安ずるが如き畢竟是れ何の道理ぞ、咽喉唇吻を閉卻し計較卜度を離れて試に請ふ速に道へ速に道へ。某、這の話を疑ふと久し。

【評唱】『今古叢林徧參の客、古來佛道修行のものは四方の叢林を徧ねく行脚して師家に參じ法門を商量する、其の數は頗る多いが、中に於いて學道の士あり又學語の類あり』真に佛道を學ぶもの

もあり、又狂狗の塊を逐ふが如き依文解義の輩もある、眞に佛道を學ぶとは實地に佛祖正傳の大道を履踐する行解相應の人をいひ、學語の類とは文字言句の末に拘泥する輩をいふのである、「蓋し學語の類は多く學道の士は少し」いづれも叢林徧參の客であるが所謂傳言送語の漢は多いが親參親究のものは少い、「欽山尙ほ未だ學語の流類を脱せず」欽山は巖頭に向つて二時の粥齋はどうするだの他家に去つて男となり女となるだのと理窟に滯つたり因果に束縛せられたりする、これ所謂學語の仲間である、されば「所以に巖頭曰く、我汝を見る三二十年、兩片皮を鼓し、直に今に到つて尙ほ者箇の去就を作すと」巖頭和尚が斯様に欽山を貶斥せられたのである、「然かも與麼なりと雖も欽山の如きは非を知り過を改めて卒に以つて得道安樂の田地に至ることを得たり」併し乍ら久修練行、證契即通の時期に達して居つた欽山和尚であつたればこそ、巖頭和尚の一喝を蒙つて忽ち從來文字言句の末に拘泥して直下に承當することを知らなかつたことの非を悟つて、恰も桶底を脱したるが如くなることを得たのである、「今時の人の如き、其の欽山に似たる者を求むるに尙ほ得難し」近來は佛道修行もホンの形式ばかりになつて熱心に古聖先徳の行履を學ぶものはない、欽山は始め學語の流類であつたが尙ほそれに満足せず、眞實佛祖の大道を證得し體認せんといふ大願心を發して、

住山の後も尙ほ遙々巖頭を訪ふたのである、現今に於いては斯様な熱心な忠實な學語の人さへも却々得難い、「況んや眞箇學道の士に於てをや」依文解義でもなく、傳言送語でもなく、眞實佛々祖々正傳の端的を實參實究しやうといふもの、所謂眞箇學道の士に至つては實に曉天の星よりも稀である、「佛法の興衰知んぬべし」佛法古に盛にして今に衰ふる所以、又測知するに難くはない、玄樓和尚在世の頃は佛教僧侶は擧つて惰眠を貪り、衆生教化もなければ實參實究といふこともなかつた、只形式上の雲水行脚が行はれて、諸方叢林と稱する處には五十三の頭顱が集つて居つたが、いづれも皆眞に生死の一大事なることを痛感して大解脱を得んとするのではなく、半ば名利の念に驅られて東西に雲遊萍寄して居るに過ぎなかつた、さればこそ玄樓和尚は此の評唱を假りて一大痛棒を當時の學人に加へられたのである、玄樓和尚の時代にはまだ形式だけでも存して居つたけれども、現代に於いてはそれさへ全く見ることは出来なくなつて終つた、形式の衰へることは忍ぶとしても、佛法が全く時代と没交渉になつて終つたのは實に痛嘆すべきことである、「此の事は且く致く、他の拳を捏けて頭上に安するが如き、畢竟是れ何の道理ぞ」それは兎も角として、巖頭が兩の拳を頭の上に置いて、畜生になつた様子をしたのは何の道理であるか、一則の公案に於ける巖頭と欽山との

作處、仔細に之を點檢する時はいづれも思量分別を絶した所の無心無爲の行履であるが、殊に拳を頭上に安じた作略に到つては凡見常慮を以つて窺ひ知ることが出来ぬ。咽喉唇吻を閉却し、計較度を離れて試に請ふ速に道へ速に道へ。言語を假らず思量に涉らずして頭上と拳を安じた的意を道破する底の分があるか、チラリとでも第二念に涉れば忽ち本分を失却するぞ、見んと要すれば白雲萬里、サア一切を放下して箇の端的を示せと玄樓和尚は座下の學人、天下後世の參學に對して親參親究を促された。某這の話を疑ふこと久し、玄樓和尚は造作もないことの様に申さる、が拙僧風外は大いに此の話を就いて疑着して居る、元來公案は透過不透過の問題に涉るべきものではなく、疑團は永久に疑團である、咽喉唇吻を閉却しても、道はんと擬すれば已に本分に蹉過する、疑着のま、で某甲は得道安樂の田地に悠々自適して居ると高邁な見識を以て、玄樓の要請を拒絶した。

頌曰、拳頭特地碎疑情

將謂拳頭只是拳頭

大似雄雞報五更

假鷄聲音復

三十三

年來胡亂夢

好夢恐是見鷄聲

高聲喚得一時驚

可惜乎○恍惚遊槐安國

【和訓】

頌に曰く、拳頭特地に疑情を碎く、

將に謂へり拳頭は、大に雄雞の五更を報ずるに

似たり、假鷄の聲音復た吾を瞞せんと欲す

三十年來胡亂の夢、好夢恐くは是れ

驚覺せられん

高聲に喚び得て一時に驚かす。

可惜乎○恍惚として槐安國に遊ぶ。

【頌】『拳頭特地に疑情を碎く』持地は殊更にといふ程の意味、巖頭が拳を頭の上へかざして他家の牛羊となつた眞似をして欽山の抱いて居る疑團を見ん事碎破した、これ欽山が因果の道理や生死の業根に束縛せられて居るのを憐れんでの爲人である、將に謂へり拳頭は只是れ拳頭と、握拳は人の頭を擲るばかりのものかと思つたら疑情を碎く等といふ働があるのですか、それは驚きましたナと擲した、大に雄雞五更を報ずるに似たり。一夜を甲夜乙夜丙夜丁夜戊夜の五更に分つ、五更は戊夜即ち曉である、大智禪師佛成道の偈に一聲鷄唱ふ五更の曉、枕上誰人か夢未だ醒めざるとあるが、巖頭の拳頭はよく欽山の疑情を碎くのみならず、天下人をして迷妄の夢より醒めしむること恰も雄雞の曉を報ずるが如くである、假鷄の聲音復吾を瞞せんと欲す。併し巖頭の作略は鷄の聲色を使つて人を瞞さうとするのぢや、昔の函谷關の門番とは違つて、此の風外はそんなことには瞞されぬぞといふ、『三十年來胡亂の夢』欽山は巖頭のいふ通り三二十年徒らに兩片皮を鼓して居つた、これ所謂胡亂の夢である、胡亂は曖昧の義、好夢恐くは驚覺せられん。好事も無きには如かずといふ、

面白い夢も好い夢も、夢は何處までも夢であつて事實ではない、夢の中の牡丹餅では一向腹はふくれぬ、「高聲に喚び得て一時に驚かす」巖頭が一聲の大喝は欽山が三十年胡亂の夢を驚覺したが、無量劫來生死の夢を貪つて居る一切衆生は此の大喝を聞いても尚ほ覺醒することが出来ぬ、「可惜乎」巖頭の一喝欽山の夢を醒ましたが、惜むらくは眞の的を外れて居る、さればこそ天下人は皆「恍惚」として魏安國に遊ぶ」のである、併しながら世尊が己に一見明星の當處に於いて大地有情を覺醒してござるから今更巖頭の警覺は實は全く用不着である。

第五十五則 睦州擔板の話

睦州蹤禪師、因喚僧曰、大德、無風起波○唯要認得聲僧回首問不州曰、擔版漢

因風吹火○誰是擔版漢雪竇曰、睦州只具一隻眼見義爲焉何故此僧喚已回首、因什

麼成擔板理不曲斷晦堂心曰、雪竇亦祇具一隻眼見兔放鷹此僧一喚便

回爲什麼不成擔板車不推

【和訓】睦州の蹤禪師、因みに僧を喚んで曰く、大徳たいたく風無きに波を起す○唯だただ僧首を回らす
 間に髪をしういは州曰く、擔版漢たんぱんかん風に因て火を吹く、雪竇曰く、睦州只だ一隻眼を具す、義を見何が故に
 容れず
 此の僧喚べは已に首を回らす、什麼に因つてか擔板と成す理曲て、晦堂の心曰く、雪竇も
 亦た祇だ一隻眼を具す兎を見て、此僧一喚すれば便ち回らす、什麼としてか擔板と成さ
 る。車横に推さず。

【本則】『睦州の蹤禪師、因に僧を喚んで曰く、大徳。睦州蹤禪師とは睦州龍興寺の道蹤禪師のこととて、法を黄檗希運禪師に嗣ぎ、頗る機鋒辛辣な人として知られて居る、龍興寺に住すること久しからずして飄然として寺を辭し、草鞋を作つて道路に捨て、旅人に使したといふ、學人を接するに悪辣な作略を用ひたが、内慈悲心の溢る、如くであつたことは、其の行藏によつても知らる、處である。曾て雲門文偃が睦州和尚を訪ふた時、睦州は自ら門内に在つて之と應對した、雲門が扉を押し開いて中に入らうとすると、其の襟首を引擒へてザア道へ道へと迫つたが、雲門が躊躇するを見るにイキナリ門外へ押し出して扉を鎖した、雲門は片足を扉に挟まれて折られて終つたが、其の時痛いツと叫んだ瞬間に忽然として大悟したといふ、これは睦州の機略の峻嶮なる一例として古來叢林に喧傳せられる佳話である。和尚は姓を陳といふたので陳尊宿といひ又草鞋を施した因縁で陳蒲鞋とも稱せられる、此の公案は睦州が僧を促へて簡單に拂着せられたのを雪竇や晦堂が批評せられたのであつて、簡單な中にも睦州和尚の悪辣な作略が窺はれる、睦州が或日僧を大徳と呼び留めた、大徳といふ位であるから相應に腹の出来た久參の衲僧であつたと思はれる、「風無きに波を起す」睦州和尚餘計なことを始めて天下人を惑はしては困ると風外老人が苦情を持ち込んだ、而して



又「唯聲を認得せんことを要す」睦州の聲をよく聞き分けねばならぬ、只大徳といふ表面の聲ばかりでなく、言中に含まる、響を聞き分けることが肝要ぢやぞと警告した、「僧首を回らす」呼べは應じ、打てば響く、追がに大徳といはれる程の人物であるから、風外老人の所謂間に髪を容れぬ大機大用を具して居た、併し之は與へて解釋したのであつて、之を奪つていふ時は、睦州の聲に惑はされて浮乎首を回らしたのは主人公が安泰でない證據である、されば睦州は「擔板漢」と抑へた、呼べば應ずるのも結構であるがまだ名に促はれ聲に束縛せられて居る、柳棟横に擔つて人を顧みず千峰萬峰に向つて入り去るといふ様に無罣礙無拘束の一面を缺いて居るから、所謂一方向きの擔板漢と罵つたのである、「風に因つて火を吹く」僧の手ぬかりを見付け、擲擲するは恰ど風向に従つて火を煽り立てる様なもので、一層其の迷を増長するに過ぎぬ、「誰か是れ擔板漢」板かつきは却つて睦州御自身ではないか、僧が首を回すのを見るときもう聲に囚はれて居ると思ふのは輕卒も甚しい、「雪竇曰く、睦州口一隻眼を具す」雪竇は碧巖錄の篇者で有名な丈才家である、此の公案に評を下したのを玄樓和尚が参考として茲に載せられた、雪竇は睦州も一眼を具して居る丈でまだ眞に佛祖正傳の兩眼を具したものはいはねぬといふ、併し一隻眼といふ處に大いに意味がある、此の一隻眼

實は法界を照破して餘す處がないのであるから、雪竇の評は陽に睦州を抑へて陰に彼を賞揚して居るのである、「義を見て爲す」僧の通過するのを見ては直ちに一擲を與へる、これ師家たるもの、義務である、又古人の公案に對しては之に一家の見を述べる、これ同道唱和底のもの、責任である、睦州も雪竇も共に義を見て爲す處の勇者であると、風外老人は兩人へ掛けて著語せられた、「何が故に此の僧喚べは已に首を回らす、什麼に因つてか擔板と成す」睦州の作處に對する是非の評は且らく置き、僧が首を回らした意旨、睦州が擔板と罵つた端的畢竟如何と學人各自に實參實究して始めて得べしである、要するに門より入るものは家珍にあらず、他人の批評や作略によつて的意を知らんとするは木に靠つて魚を求むるものである、雪竇は睦州只一隻眼を具すとだけ評して置いて公案を其の儘參學のもの、前へ放け出して其の親參親究に任せられたのである、「理曲けて斷ぜず」兎や角と言句を挾むのは畢竟理窟をコヂ付けるに過ぎぬ、追がに雪竇はそんな野暮なことはせぬ人ぢやと讚めた、「晦堂の心曰く、雪竇も亦祇一隻眼を具す」晦堂祖心禪師は黃龍慧南禪師の法嗣で、曾て石霜慶諸禪師の下にあつて傳燈錄を閲し、多福一叢竹の語を見て開悟し、黃龍の印可を受けた、此の人が雪竇の評に對して又一重の評を加へた、雪竇は睦州が一隻眼を具すと申されたが、かく申さ

る、雪竇も又一隻眼を具するのみである、即ち睦州が左の獨眼龍ならば雪竇は右の獨眼龍であつて物事の一面の理を知つて他の半面を知らぬ點に於いては同様である。一兔を見て鷹を放つし鷹狩の時は兎を見付けると間に髪を容れず鷹を放つて之を捕らせる、今晦堂和尚が雪竇を評した機川は恰どその如く、極めて敏捷である、「此の僧一喚すれば便ち回る、什麼と爲てか擔板と成さゝる」雪竇和尚は睦州が擔板漢といふたのに不賛成な様子であるが、一喚して回るのは立派に擔板漢ではないかそれをどうして擔板でないかと申さるゝぞと咎めて、雪竇が一面を擧揚したのに對して他の一面を拈出した、前者が擔板を是としたものとすれば後者は不擔板を是としたのである、畢竟するに古人は學人の爲め或は表を見せ或は裏を見せ、或は左或は右と種々路なきに路を着けて挖泥帶水せられたのである、「車横に推さず」僧が呼ばれて首を回したらそれを擔板漢と抑へるのは尋常の作略である、決して無理のない接得振である、拙僧も晦堂和尚には賛成でござると風外老人同意を表せられた。

玄樓曰、睦州等閑抛一片板、雪竇晦堂豎擔橫擔、大似箇狂

狗逐塊、雖然與麼出一隻手、助他化門二尊宿始得、已是狂

尾、阿呵呵、

阿呵呵

【和訓】玄樓曰く、睦州等閑に一片の板を抛向すれば、雪竇晦堂豎に擔ひ横に擔ふ、大に箇の狂狗の塊を逐ふに似たり、然も與麼なりと雖も一隻手を出して他の化門を助くる事は二尊宿にして始めて得べし、已に是れ狂狗塊を逐ふ、什麼に因つてか化門の助と成る、道ふことを見ずや三人龜を證して鼈と作すと、三箇四箇の擔板恰も烏龜子の頭尾

【評唱】『睦州等閑に一片の板を抛向すれば。』玄樓和尚は先づ睦州和尚が何の深い意味もなく氣まぐれに擔板を一枚なけ出したといふ、併し睦州の擔板漢の一言は却々どうして氣まぐれどころではない、爲人接衆の爲の眞劍勝負であるが、玄樓がかくいふたのは文章の倭である、「雪竇晦堂豎に擔ひ横に擔ふ」雪竇や晦堂は金魚が魃に群る様に睦州の抛向した板の周圍へよつて、或は豎に擔つて

見たり或は横に擔つて見たり、種々とそれを拈弄した、其の有様を傍から見ると『大いに箇の狂狗の塊を逐ふに似たり』愚かな狗ころが塊をなけてやると食物だと思つてそれを追驅ける様で實に馬鹿々々しいものである、睦州の擔板漢の一語は畢竟兒童の啼き聲を止めん爲に與へた黄葉に過ぎぬのに、それを錢だと思つて喜んで居るのは實に笑止千萬である、『然も與麼なりと雖も一隻手を出して他の化門を助くるは二尊宿にして始めて得べし』併し乍ら又一方から見ればその様に貶したものでない。要するに雪竇晦堂の兩人は共に隻手を出して睦州の衆生教化學人提撕の手助けをしたのである、『已に是れ狂狗塊を逐ふ、什麼に因つてか化門の助となる』前にいふ通り雪竇や晦堂の作處が狂狗の塊を逐ふ様なものであるとしたならば、どうしてそれが教化の手助けとなるのか、月を示すの指に拘泥し、門を敲くの瓦子に執着して居つては却つて學人を迷却するばかりである、併し乍ら『道ふことを見ずや三人龜を證して鼈と作す』初めに睦州が擔板漢といふたので、雪竇も晦堂も調子を合せて擔板漢ちや擔板漢ちやといつて一切を擔板漢にして終ふた、三人市に虎を出すといふことがある、町の中央へ虎が出る等といふことはあり得べからざることであるが、三人が三人までその噂をすると遂にそれが眞實となつて傳はる様に、三人の禪客が口を揃へて擔板漢といふた

ので、盡乾坤悉く擔板漢となつて終つた、擔板漢の一語に一切萬法を包括し盡して一物も餘さぬのである、『三箇四箇の擔板漢、恰も烏龜子の頭尾なきに似たり』そこらなりに大勢擔板漢があるが、いづれも無眼子の漢ばかりで恰ど頭も尻尾もない盲龜の様なものである、睦州の的意も、雪竇晦堂の作略も何のことかサツパリ解らぬに相違ない、『阿呵呵、阿呵呵』頭尾のない盲龜とは我ながら面白く罵つた、可笑しい可笑しいと風外老人が例の如く座下を警戒せられたのである。

頌曰、這擔板漢八面玲瓏非罵非讚活殺時雪竇晦堂兩鏡相照濫尙判斷各出一隻手畢

竟爲他似施屈有酬恩喚便回頭是何物、我亦無知子細點檢知故侵大賊

亦要時人會此心用閑工夫一爲什麼

【和訓】頌に曰く、這の擔板漢、八面玲瓏罵るに非ず讚するに非ず、殺活時に臨む雪竇晦堂、兩鏡相濫りに判斷を尙ぶ、各一隻手畢竟他の爲に屈を施すに似たり、恩を酬るに分有り喚べば便ち頭を回らす是れ何物ぞ、我も亦た知し子細に點檢すれば知つて故に侵す、草賊亦た時の人の此の心

を會せんことを要す。閑工夫を用て
什麼か爲ん

【頌】『この擔板漢』先づ最初に問題の三字を置いた、これが此の則の骨子ぢや、此の三字が盡法界に充塞した處の大疑團であつて、之を透過せんが爲に歴代の祖師は種々と苦修練行せられたのである、「八面玲瓏」擔板漢といふたからとて一方丈より見えぬと思つてはならぬぞ、祖門下の眞箇の擔板漢は八面玲瓏十方通暢毫末も碍ゆるものなき智慧眼を具して居る、「罵るにあらす讚するにあらす」擔板漢といつても睦州は僧を罵つたのでもなければ又讚めたのでもない、卒直に突嗟の場合の感じを口に發したまで、ある、機に臨んで或は褒じ或は貶するけれども決してそれが爲に我が心に憎愛の妄執が残るのではない、所謂百花叢裏に行いて一葉身を沾さずである、「殺活時に臨む」毀譽も褒貶も其の時其の場の宜しきに從ふ、これ實に師家分上のもの、活作略である、風外和尚は此の頌に對しては凡て調子を合せる様な穩かな著語を下された、必しも此の頌ばかりが特に氣に入つたといふ譯でもなからう、所謂殺活時に臨むである、「雪竇晦堂」いづれも作家の漢である、佛法的々の意を會して箇々壁立萬仞の意氣を具へて居る、「兩鏡相照す」兩人は實に一雙の明鏡である、相互に妄想煩惱の曇がないから相對して中に影像はない、「濫に判斷を尙ふ」雪竇と晦堂とは擔板となすとか

なさぬとか、思量分別を挾さんで得意になつて居る、「各一隻手を出す」それも各一隻手を出して化儀を助けるのであるから至極結構サと風外老人何處までも相槌一點張である、「畢竟他の爲に屈を施すに似たり」いづれも睦州の化儀を助けるつもりであらうが、却つて可惜無瑕の擔板漢に瑕を付けて終つた、畢竟恥ざらしに過ぎぬ、「恩に酬ゆるに分あり」併し風外から見ればそれも古聖先德に對する報恩行である、先德の遺された公案に參して自己の所解を述べるのは悪いことではない、「喚べば便ら頭を回す是れ何物ぞ」雪竇がどうの晦堂がどうのといふことは、且らく置き、天下何人も呼べば應ずる底の分がある、睦州座下の僧ばかりではない、此の喚べば應ずる底のものは畢竟何者であらうか、佛か衆生か、大徳か擔板漢か、龜か鼈か、鐘なれば法堂鐘響けば齋堂と機宜に從つて坐作進退するは衲僧尋常の茶飯であり、高く屹ゆるは山の茶飯、低きに就くは水の茶飯である、而かもこれ任運無作の行履であつて何者があつて然らしむるか我も亦た知ること無しである、「仔細に點檢すれば知つて故らに侵す」僧が喚ばれて頭を回らしたのも、雪竇や晦堂が濫に判斷したのも、いづれも妄想分別から起る所の妄動であつて、所謂擔板漢の所作たるを免れぬけれども、而かもこれ自己本具の佛性の活動に外ならぬ、即ち知つて故らに侵して居るのである、「草賊大敗」斯様に高

飛車ひしゃに出られては凡見凡情ぼんけんぼんじやうで計度分別けいたくぶんべつする處の草賊さうそくは頭を擡あたまけることも出来ない、「亦時おのときの人の此の心こころを會あせんことを要えす」要するに擔板漢たんぱんかんといふも擔板たんぱんにあらずといふも、讚さんするも罵ののしるも皆知みなしつて故ことらに侵をかすのであるといふことを知らねばならぬ、これが爲人接衆じんじんじやうをなすもの、責任せきにんであり、之これを知るのが參學さんがくの大主眼だいしゆがんである、「閑工夫かんくふを用ひて什麼なんが爲なん」併しかしながら知るといふも知らせるといふも畢竟無用の閑工夫ひつじやうむぎふである、已すでに知つて故ことらに侵をかすものであるから會あするも會あせしめるもない、本來ほんらい本性ほんじやう天然てんぜん自性じじやう身みである、人々分上じんくぶんじやうゆたかに具そなはつて居ゐるから、這箇しやこの閑工夫かんくふは全く用不着もちふざやくであると、最後の著語ちやくごで一寸抑ちよつとへた。

第五十六則 魯祖面壁の話

魯祖雲禪師、尋常見僧來、便面壁不先行到、南泉聞乃曰、我尋常向二師僧道佛未出世時會取、尙不得一箇半箇、他恁麼驢年去

末後
太過

【和訓】魯祖ろその雲禪師うんぜんじ、尋常僧よつねそうの來るを見て便すなはち面壁めんぺきす、先行到な先行到南泉聞なんせんきいて乃すなはち曰いはく、殊ことに尋常師僧よつねしそうに向むかつて佛未ぶつみだ出世しじゆせせざる時に會取あしゆせよと道みちふすら尙なほ一箇半箇こはんこを得えず、他た恁麼いんもならば驢年ろねんにし去さらん。末後た末後太

【本則】『魯祖雲禪師』魯祖は寶雲といひ、南嶽下第二世、馬祖道一禪師の法嗣であつて、地州魯祖山に住した、『尋常僧の來るを見て便すなはち面壁めんぺきす』尋常は平常、平生等と同じである、魯祖和尙は常に僧が來るのを見ると、早速壁の方を向むいて坐禪ざぜんをして終しまつて決して相手にならぬ、維摩ゐまの默もく、世尊せそんの拈華ねんけと同巧委曲じゆうくわいきくの爲人である、「先行到せんかういたらず」先さきの雁がんが後あとになるとでもいふか、靜中却じやくちゆくつて頗おほる濃ぬい

間であつて、魯祖の面壁は却つて富樓那の辨に過ぎて居る、「南泉聞いて乃ち曰く、我れ尋常師僧に向つて佛未だ出世せざる時に會取せよといふすら尚ほ一箇半箇を得ず」南泉は地州南泉山の普願禪師で、これも馬祖の法嗣であるから魯祖とは法眷の間柄である、南泉は魯祖が學人を見ればイヤナリ面壁して終ふと聞いて、之に對して批評を下した、師僧はご、では隨身の僧、所謂學人のことをいふのである、俺は常に學人に對して佛出世以前、即ち煩惱とも菩提とも、生死とも涅槃ともいはぬ所、思量分別を絶した常處に於いて、箇の一大事を會得せよ、坐禪だの行持だの念佛だの修懺だのといふ様なことを一切悉く放捨し去つて、空手にして始めて本來の面目を識得することが出来るのであると説いても一人半人の這の事を了得したものを得ることが出来ぬ、それに何ぞや一言半句もいはず、打坐三昧によつて學人を接得しやう等とは以つての外である、「他恁麼ならば驢年にし去らん」そんなことでは十二支以外の驢の年が來ても悟ることは出来ぬ、驢の年等は永久來る筈がないから、驢年にし去るとは即ち絶對にあり得べからざることをいふ、魯祖の接得は餘り向上過ぎて學人が近づくことが出来ぬといふ意味であるが、語の奥には暗に魯祖の作略を賛成して居る趣がある、所謂句抑下の意卓上である、「末後ただ過ぐ」今度は後の雁が先になつた、佛出世已前だ

玄樓曰、要知魯祖麼、人間路至三三峰盡、觀面要識南泉麼、天

下秋隨一葉來當面 蹉過

【和訓】玄樓曰く、魯祖を知らんと要すや、人間の路は三峯に至て盡く、觀面に南泉を識らんと要すや、天下の秋は一葉に隨て來る、當面に蹉過す

【評唱】「魯祖を知らんと要すや、人間の路は三峰に至つて盡く」人間の道は三峰に至つて盡くといふのは仙家の語であるといふ、魯祖の境界は畢竟如何なる處であらうかどうか面壁の端的が會得したものであるとは誰しも望む處であらう、それを説明して見やうならば人間の道は三峰に至つて盡くちや、煩惱だとか菩提だとかいふ佛法上の話は畢竟面壁打坐の當處に盡きて終ふ、面壁の當處は没蹤跡斷消息、思量も及ばず分別も契はぬ、此處が所謂人間の道の盡きる三峰の奥である、「觀面に相呈す」その三峰といふも遠い處ではない、それ其處に目の前にチャンと現成して居る、當面に

蹉過してはならぬぞといふ警戒の意味を籠めた著語である、「南泉を識らんと要すや、天下の秋は一葉に随つて来る」南泉が驢年にし去る云々といふたのは所謂末後太過ぎたる大機大用であるが、今其の端的を知らんとならば、見よ、一葉落ちて天下の秋を知る、清風颯々として梢を吹く處梧桐婆娑と地に落ちる、これ實に没蹤跡斷消息の境地である、玄機は斯様に古語を引いて二人の境界を形容せられたが、畢竟するに魯祖は向上の機用を示し、南泉は向下の作略を用ひたのである、一は三峰の奥深く隠れた佛向上の事を説き、一は窓前數尺の地上に現れた現前底を示したのである「常面に蹉過す」相遭つて相知らず、所謂對面千里の距がある、日々夜々南泉の的意に相見しながら我等は遂にそれを知らずに居る、これ實に參學のものとしては慚愧千萬なことであると、これも前の觀面に相呈すといふ語と照應した著語である。

頌曰由來靈境雖非遠論遠近八面都無路口通七通八達偶見傍人

指南處將錯石橋苔滑困猷公可放

【和訓】頌に曰く、由來靈境遠きに非ずと雖も、遠近を論じて八面都て路口の通する無し

七通八達○向はんと偶傍人指南の處を見れば將錯石橋苔滑かにして猷公を困せしむ。身心を
挺すれば則ち背くとを得べし

【頌】「由來、靈境遠きに非ずと雖も」「八面都て路口の通するなし」魯祖面壁の端的は思量分別を絶した靈境であるが、仔細に點檢する時は人々脚跟下が即ちそれである、決して遠い處にあるのではない、併しながら此の靈境に證入せんとする時は忽ち進むに道がない、所謂見んと要すれば白雲萬里である、四方八面萬仞の懸崖で攀ぢることも登ることも出来ぬ、佛眼も覷れども見えす、魔も覷ふに路がない、煩惱即菩提、生死即涅槃であつて、菩提も涅槃も遠きにあるのではなく、魯祖面壁の處に即ち佛法が現前して居るのであるけれども、畢竟如何と分別に涉れば、忽ちにして本分の相を失却して終ふのである、由來云々の著語「遠近を論じて什麼か爲ん」靈境は遠近を絶して居る遠きにあらず等といへば直ちに近いかと妄想するのが凡夫の常であるから斯様な對待に涉る語は禁物ちや「七通八達」十方通暢八面玲瓏たる佛向上の端的は何處からでも入ることが出来る、入らんと欲すれば自在無碍である、而かも「向はんと擬すれば則ち背く」で、些かでも第二念に涉つて思量分別を以つて向はんと擬すれば忽ち對面千里である、「偶傍人指南の處を見れば」「石橋苔滑にし

て猷公を困せしむ」此の頌は上の二句に於いて魯祖を頌し、下の二句を以つて南泉を頌したのであつて、第三句に傍人といふは即ち南泉を指したのである、南泉和尚が我尋常師僧に向つて云々といつて魯祖を靈境へ道案内をしてくれる、其の指南の様子を見ると頗る親切丁寧であるけれども、サテ其の道を進んで見ると石橋苦滑で渡るに困難である、石橋云々といふことは神州感通録に出て居る故事である、帛道猷といふ僧が天台の石橋を昔から涉つた人が無いと聞いて大に奮慨し、錫を提けて石橋に行つたが、苦滑かに橋危くして頗る渡るに困難であつた、加ふるに橋の向ふには大石が塞つて居つて進むことが出来ぬので、道猷は其の附近に庵を結んで數年間參禪をして居つた、然るに或日道に塞つて居つた大石が開いて忽然として洞門が通じ、中に神僧が居つて通猷を迎へて親しく相語ること舊和の如くであつた、既にして道猷が石洞を辭して出ると又大石が塞つて元の如くであつたとある、要するに此の故事を假りて南泉が學人を指南すること頗る懇切であつたけれども而かも尚ほ佛法的々の大意に證得することは頗る困難である、魯祖も南泉も、共に萬仞の懸崖で寄り付くことも出来ぬ、箇の一大事を了得せんとならば須く放心捨命身心脱落して始めて得べきである、偶見云々の著語「將錯就錯」南泉の指南は盲の道案内で險吞千萬ちやと抑へた、石橋云云

の著語「身心を放下して始めて渡ることを得べし」修行も證索も、煩惱も菩提も、一切悉く放下し去り、其の又放下底をも放下し去つて始めて石橋を渡ることが出来る、靈境に透入することが出来るのであると、公案全體に涉つて參學の態度を示された。

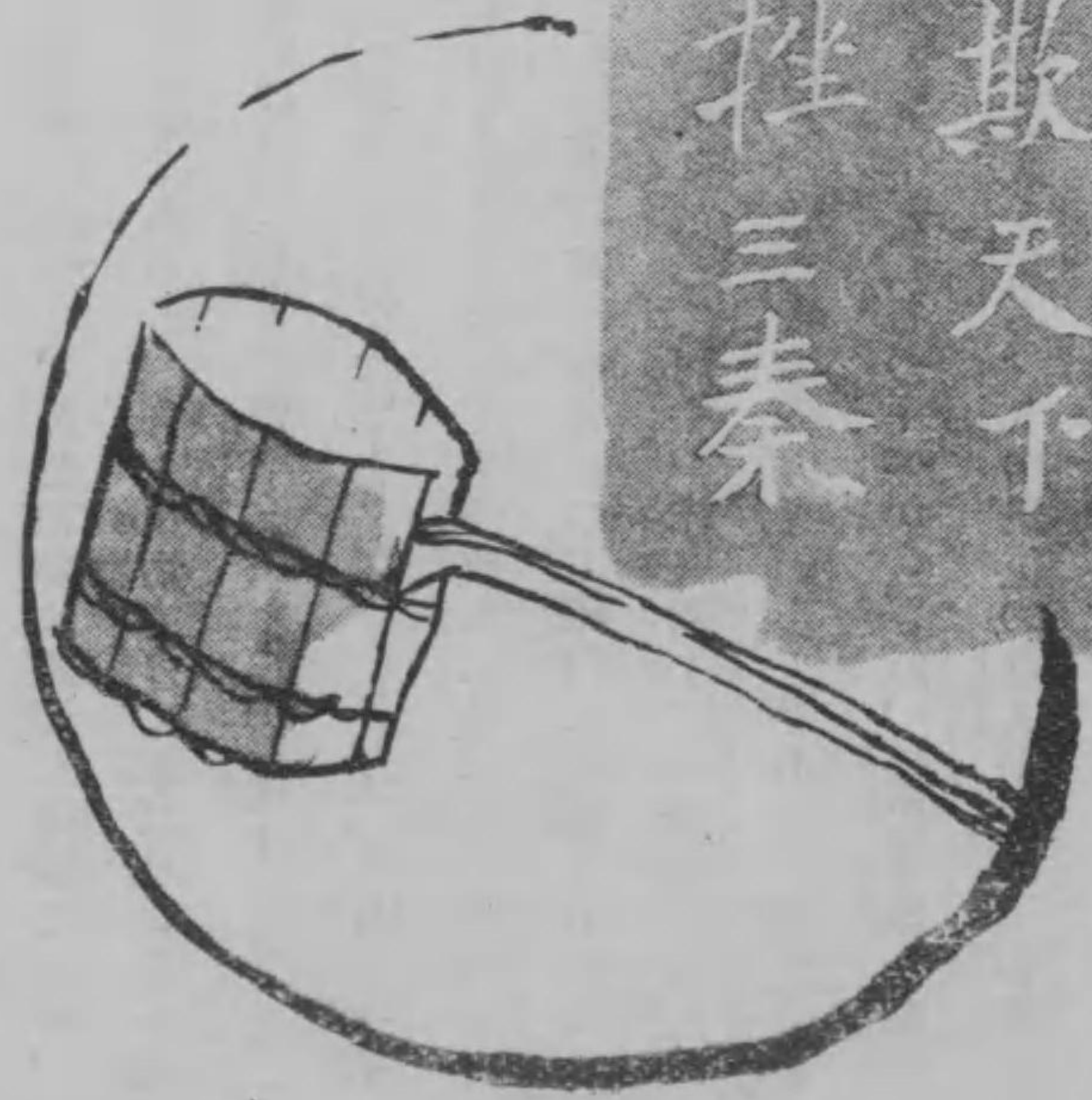
第五十七則 臨濟真人的話

臨濟玄禪師示衆曰、赤肉團上有一無位真人、常在汝等諸人
 面門出入、未證據者看看○不_二是正兵_一時有僧出問如何は無位真
 人狂狗追塊玄下繩牀扭住曰道道忽然出奇兵僧無語種_二粟_一爲_二麻_一玄打一掌拓開曰無
 位真人是什麼乾屎橛元來箇乾屎橛

【和訓】 臨濟の玄禪師衆に示して曰く、赤肉團上、一無位の真人有り、常に汝等諸人の面門に在て出入す、未證據の者は盾よ盾よ、別人を瞞するとは即ち得たり○是れ正兵にあらず時に僧有り出て、問ふ、如何なるか是れ無位の真人狂狗塊玄繩牀を下りて扭住して曰く、道へ道へ、忽然奇僧無語種_二粟_一爲_二麻_一と爲す玄打つこと一掌し拓開して曰く、無位の真人是れ什麼の乾屎橛元來箇乾屎橛

【本則】 『臨濟玄禪師衆に示して曰く』臨濟義玄禪師は黃檗希運禪師の法嗣で、南嶽第四世、臨濟宗

明修棧道欺天下
 暗度陳倉挫三秦



の始祖である、機峰頗る俊烈で、盛んに棒喝の毒手を弄して學人を接化した、曾て其の修行時に一度黄檗を去つて大愚の下に參じた時、大愚は臨濟に向つて、黄檗和尚は親切な師家である、汝をして吾山門に來つて參ぜしめたのは頗る結構なことであるが、併し親切過ぎて未だ足らざる處がある、或は抑へ或は揚げて黄檗を讃嘆した、臨濟は其の言下に豁然として大悟發明する處があつて、直ちに黄檗に歸つて其の事を物語ると、黄檗は大愚といふ坊主は下らぬことをいふ、見付け次第三十棒を喰はしてやらうといふ、臨濟は大愚を見付けてからでなくても今直ちに喰はしてやりませうと云つてイキナリ黄檗の横面を擲り飛ばした、これ臨濟打爺の拳といつて禪門に喧傳せられることである、臨濟の惡辣なことは概ね斯の如くである、「衆に示して曰く、赤肉團上一無位の眞人あり、汝等諸人の面門に在つて出入す」赤肉團は五蘊色身、即ち我等の肉身のことである、無位の眞人とは正中偏とも偏中正とも、迷とも悟とも、佛とも衆生とも名づくべからざる、位階等級を超越した境界に住する人をいふ、肉身の上とは其の無位の眞人が居る、其の無位の眞人が常に一切衆生の面門に向つて出入して居るといふ、併し無位ならば内もなく外もなく、東もなく西もない筈である、従つて去來出入に渉るべきものではないのに、それが出入するとか去來するとかいふのは甚だ矛盾し

た話であるが、かく第二念に涉つては一切處疑問ならざるはなく、臨濟の意旨を會得することは出來ぬ、公案を見るには凡て第二念に涉らず、文字言句に拘泥せぬ様にせねばならぬ、「未證據の者は看よ看よ」無位の眞人と相見せぬものは須く回光返照せよ、人々本具のものであるから他の力を假らずして自ら脚下を照顧すれば直下に承當することが出来る、されば臨濟は看よくと實參實究を懲懲せられたのである、「別人を瞞することは即ち得たり」無位の眞人だの面門に出入すだのと閑言句を並べて當時の無眼子達を烟に巻くことは出來ても、此の風外を誤魔化すことは出來ませぬぞ「是れ正兵にあらず」此の場合に於ける臨濟の學人接待は正常な兵法ではないと二つとも抑下の著語である、「時に僧あり出で、問ふ、如何なるか是れ無位の眞人」其の時坐下の一人が出で、臨濟に問ふた、無位の眞人とは全體どの様なものでありますか、三十二相八十種好と圓滿に具足した佛か、若くは無量壽無碍光の菩薩とでも思つたのであらう、此の僧マンマと臨濟が下した釣針に引か、つた「狂狗塊を追ふ」人塊を投すれば狂狗は塊を追ひ獅子は投けた人を追ふとある、無位の眞人といふも假に投じた塊であつて、塊其の物には何の意味もないのに彼が是かと妄想するのが凡夫の淺暮さである、「玄繩床を下つて扭住して曰く、道へ道へ」果せる哉、臨濟和尚は持ち前の毒手を振

つた、僧が無位の真人といふ一物に執着して居ると見るや、イキナリ禪牀から立つて行つて僧の首ねつこを引捕へて、サア今一度道つて見ろ、無位だの真人だのと囁語をほざくと只では濟まさぬぞと手荒く抑へ付けた、「忽然奇兵を出す」臨濟の戦術は大いに通常とは異つて居る、神出鬼没の妙用があるとな褒める、「僧無語」此の僧矢張無力であつたと見えて擒住せられて一言半句も應對することが出来ぬ、出身轉身の作略を知らぬ鈍物であつた、「粟を種えて麻となす」此の僧無位の真人を具へながらそれを知らずに居る、自ら粟なることを知らぬのである、「其打つこと一掌し拓開して曰く、無位の真人是れ什麼の乾屎橛ぞ」臨濟和尚は僧の横面をビシヤリと擲つてつき放し、無位の真人だと思つたら何だ乾いた糞籠であつた。と罵つた、無位の真人と聞いて頗る立派なもので、もあるかと思つて居る僧の迷執を打ち拂ふ爲にかく裏からいふたのである、無位の真人といふは遠い處にあるのでもなく、貴重なものでもない、乾屎橛も無爲の真人、肥桶も無爲の真人である、一切處悉く無爲の真人が充滿して居る、諸人の面門ばかりでもなく、山川の面門にも草木の面門にも走獸の面門にも飛禽の面門にも至る處に出入して居るから、天下人いづれも未證據なる筈はない、何人も皆證據了して居る、只看よ看よと聞いてどれ何處にと眼を停むれば即ち蹉過して終ふ、「元來箇の乾

屎橛」臨濟和尚は今更氣が付いた様に申さる、が元來これ乾屎橛で、無位だの真人だのといふのは臨濟和尚自身の妄想であると風外老人の批評である。

玄樓曰、既是無位真人、爲什麼倚赤肉團上而住、既是無位真人爲什麼獨由面門而出入、自語矛盾元來如此、竟打一掌拓開曰、無位真人是什麼乾屎橛、果然作賊人舌頭不正

笑呵

【和訓】玄樓曰く、既に是れ無位の真人、什麼としてか赤肉團上に倚つて住す、既に是れ無位の真人、什麼としてか獨り面門に由て出入す、自語矛盾元來此の如し、竟に打つこそ一掌し拓開して曰く、無位の真人是れ什麼の乾屎橛ぞと、果然賊と作る人舌頭正しからず

【評唱】『既に是れ無位の真人、什麼としてか赤肉團上に倚つて住す』玄樓和尚は一々臨濟の語尻を

捕へて詰問せられる、これ參學のものとして仔細に公案の表裏を究めしめんが爲である、既に無位の眞人といふ以上は赤肉團といふもの、上に位するといふことが矛盾ではないか、所住が無いから無位といふのである、赤肉團の上に住するものを無位といふは理窟に合はぬではないかといふ、これ分別思量に涉つた語であるから、向上邊よりいふ時は無用の閑具子であるけれども、玄樓は暫らく爲人の手段として假に依用せられたのである、『既○に○是○れ○無○位○の○眞○人○、○什○麼○と○し○て○か○獨○り○而○門○に○由○つ○て○出○入○す○』又無位の眞人ならば何處から出入しても可い筈である、位置方角を超越して居るべき筈であるのに面門に由つて出入するとは何故ぞと、これも學人をして公案に對して綿密な工夫をなさしめん爲の用意である、『自○語○矛○盾○元○來○此○の○如○し○』臨濟は自分に言つたことを自分で壞してゐる、臨濟和尚ばかりではなく古來佛祖方はいづれも學人接得の爲には自語矛盾を敢て厭はず眉鬚脱落も意に介せぬ、これ實に徹骨徹髓の慈悲あるが爲である、『竟○に○打○つ○こ○と○一○掌○、○開○拓○し○て○曰○く○、○無○位○の○眞○人○是○れ○什○麼○の○乾○屎○橛○ぞ○』臨濟は最後に僧を一掌して突つ放して無位の眞人かと思つたら乾屎橛であつたと知られた、果して學人の妄想妄念の寶藏をすつかり奪ひ取つて終ふといふ佛祖門下の百拈賊は腹にもない開放臺を云ふものである、舌頭が歪んで居るから言ふことが模索が出来ぬ、模索不

着の作略にして始めて學人の執拗な迷惑を打ち拂ふことが出来るのである、『閻浮樹下笑呵呵』閻浮樹は南閻浮州の空を覆ひ盡すといふ大樹である、其の樹下に坐して居る主人公が此の評唱を聞いたら嘸かし阿々大笑を禁ずることが出来ぬであらう、閻浮樹下の主人公とは眞如である法性である、眞如法性から見れば玄樓の惘口ぶつた評唱も定めし破綻百出であらう。

頌曰、赤肉團邊運籌略、一掌拓開若雷瞋、明修棧道欺

天下暗度陳倉挫三秦、不誤開國臣

【和訓】頌に曰く、赤肉團邊籌略を運らす、達薩一掌に拓開して雷の若くに瞋る、明に棧道を修し、天下を欺きを厭はず、暗に陳倉を度りて三秦を挫く。○鬼神も測ることなし

【頌】『赤肉團邊籌略を運す』臨濟和尚は徹惘の慈心止み難く、どうかして學人の迷執を打破し、本來の面目に相見させてやりたいものであると思つて、赤肉團上に就いて種々と籌を運らされた、或は無位の眞人といひ或は面門に出入すといふ、いづれも學人を誘き出す作略であつて、學人が此の語路に轉ぜられて來たら其の時こそ一刀兩斷に妄執の根を斷つてやらうと待ち構へて居るのであ

る、「達薩阿勞」達薩は太殺とも書いて甚たといふ義、阿勞は御苦勞の意である、臨濟和尚甚だ御苦勞千萬な、その様に骨を折つても元來箇の乾屎橛は到底無位の真人に相見が出来さうもないといふ意味を含んだ著語である、「一掌に拓開して雷の如くに暝る」僧の釣針に引か、つたのを見て最後には奥の手を出して一掌して拓開せられた、其の勢は疾風迅雷、耳を掩ふ違もない程である、前箭は軽く、後箭は深く、或は柔に或は剛にあらゆる、神籌奇策を用ひて遂に目的を達せられたのである、「傍若無人」自由無碍の活作略は實に傍人なきが如き有様である、「明に棧道を修めて天下を欺き」暗に陳倉を度りて三秦を挫くこれは漢の高祖の故事である、三秦は項羽が秦の遺族を封じた處、臨濟和尚が種々と計を回らして學人を接待せられるのは、漢の高祖が天下を統一する爲にあらゆる苦肉の策を廻らす様なものである、表面には棧道を修繕するのであるといひふらして、暗に陳倉を過ぎて三秦に攻め入り、遂に之を平定し、覇業を爲した、我が禪門に於ける活作略も恰ど之と似て居る、「謀は偽を厭はず」正直一方では衆生濟度は出来ぬ、時には權方便の説を以つて誘引するといふことも必要である、「開國の臣たるに誤らず」劉邦の如きは實に開國の英雄と稱すべきである「鬼神も謀ること無し」臨濟和尚の權謀術數の巧なること鬼神も及ばざる程であると重ね重ね讃揚し

第五十八則 高麗刻像の話

昔高麗國來錢塘刻觀音聖像

已是聖像爲其得刻聖

及昇上船竟不能動、

因請入明州開元寺供養、萬劫罪根何後有設問者曰無利不現身

爲什麼不去高麗國、甚處是高麗更去爲什麼

【和訓】

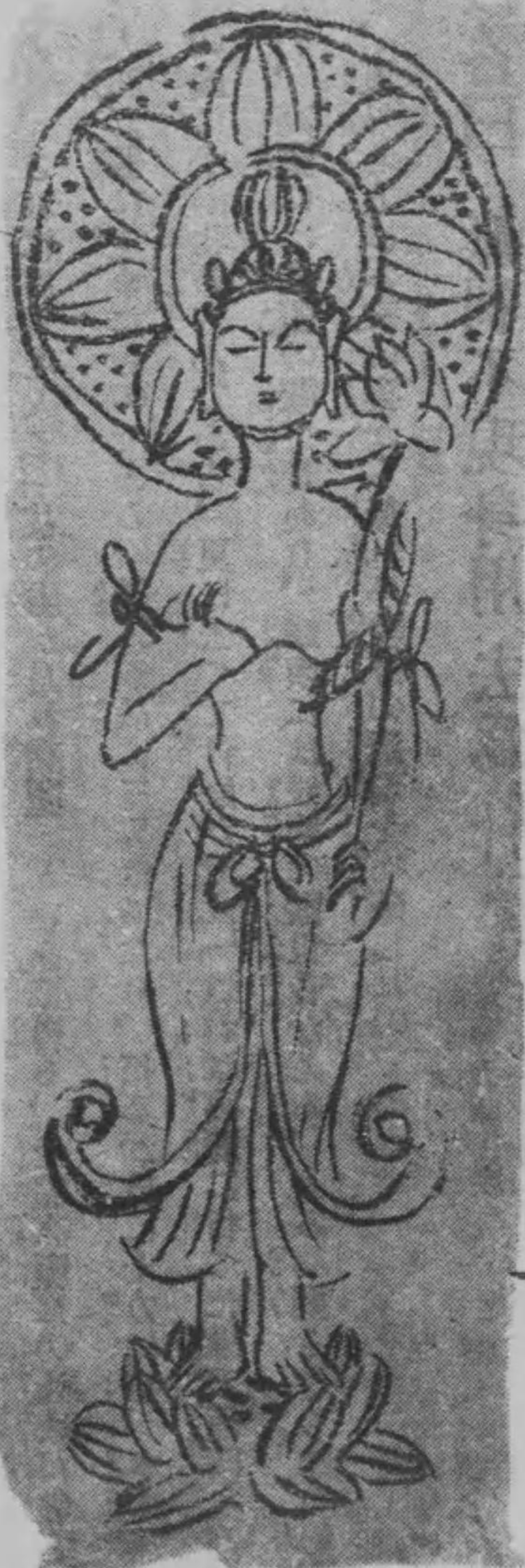
昔高麗國より錢塘に來りて觀音の聖像を刻むものあり、已に聖像、甚として、昇いで船に上すに及んで竟に動かすこと能はず、果因て明州の開元寺に請じ入れて供養す、

萬劫の罪根何ぞ、後に問を設くる者あり、曰く、無利不現身、什麼としてか高麗國に去らざる。甚の處か是れ高麗更に去て什麼かせん。

【本則】「昔高麗國より錢塘に來りて觀音の聖像を刻む」此の公案は觀音靈驗記とでもいふ様な物語である、錢塘は支那杭州府の城南にある、高麗はいふまでもなく朝鮮の北部のことである、「已に是

れ聖像、甚として刻鑿することを得たる。人畜ですら眞物を刻むことは出来ぬ、只形を模する丈である、然るに佛菩薩の聖像をどうして刻むことが出来るかと答めた、「昇いて船に上すに及んで竟に動かすこと能はず」聖像が出来上つたのでそれを高麗へ運ぶ爲に船へ乗せやうとしたがどうしたのか動かぬ、「果然」果せる哉、聖像に靈があつて其處を去ることを厭ふものと思はれる、「因つて明州の開元寺に請じ入れて供養す」開元寺は我が國の國分寺の如く、唐の玄宗皇帝の時全國各州に一箇寺づゝ、建立したもので、明州の開元寺も其の一つである、觀音像を近くの開元寺へ擔ぎ込んで供養した處が今度は輕くなつて造作なく運ばれたといふ、風外老人は此處の提唱に觀音菩薩此の時腹が減つて居たものと見えると擲論してござる、「萬劫の罪根」佛を供養する等とは飛でもないことをしたものでちや、それこそ千劫萬劫の後までも惡業の種を残すものであると抑へ、「何ぞ早く焼却せざる」其の様な厄介なものを有難さうに擔ぎ廻らないで何故焼き拂つて終はぬのかと、佛菩薩も全く眼中に置かぬ見識を示した、「後に問を設くるものあり」これからが公案の眼目である、此の一場の靈驗記に就いて後世禪僧が問を設けた、此の問には答がないが、問其の儘が答であつて公案の首尾は充分圓成して居る、「曰く、無利不現身、什麼と爲てか高麗國を去らざる」觀音經に利として身を

初心逢薩埵開元寺



萬里空還異國船

現ぜずといふことなしとあつて、觀世音菩薩は三十三身を現じて到る處の衆生に應化し如何なる國土と雖も身を現ぜざる處はないといふが、それならば何故高麗國に行くのを嫌ふのかといふ問である、全體佛身は法界に充滿して居るから去るも去らぬもない、動くも動かぬもない、元來無利不現身である、されば風外老人も「甚の處か是れ高麗」というて居る、全體高麗だの錢塘だのといふ方は人間が假に定めたものである、迷ふが故に三界は城なり、悟るが故に十方は空、本來無東西、何れの處にか南北あらんである、更に去つて什麼かせん」されば高麗に行つた處で何になるものでもない、高麗には高麗の觀世音あり、錢塘には錢塘の觀世音がある、去る必要もなく來る必要もないと、風外老人は本文の裏から無利不現身の道理を喝破したのである。

玄樓答曰、無利不現身去爲什麼 〇忽然飛去時作麼生、

【和訓】玄樓答へて曰く、無利不現身去ることを用ひて什麼か爲ん。〇去去來來親自在、

【評唱】「玄樓答へて曰く、無利不現身去ることを用ひて什麼かせん」公案が問文で終つて答がないから玄樓和尚は評唱の代に答話を示された、其の答話も問の語を殆ど其の儘用ひたのであつて、所

謂賊馬に跨つて賊を逐ふといふ作略である、利として身を現ぜずといふことなしといふから、觀音は到る處に現前し偏法界に充滿して居る。されば觀音が高麗國に行くのは畢竟頭上頭を案するものである、サテ玄樓はかく答へられたが、吾等は更に之を自身の上に就いて考へて見ねばならぬ、所謂回光返照して見る時は、觀音は必しも補陀山のみに居るのではない、人々これ一座の補陀山で吾々お互に觀音の靈場であるから、觀音を遠きに求めずして各自本具の觀音を現前して廣大無邊の慈悲行を實踐すべきである、「忽然として飛び去る時作麼生」觀音が忽然として大活動を開始した時は何とするか「去々來々觀自在」去來自在應化無碍の端的を仔細に點檢して見よと風外老人は玄樓の足らざるを補つた。

頌曰、利利塵塵無處避 〇 相求卻似地中天 〇 忽逢薩

埵開元寺 〇 萬里空還異國船 〇 滿船是清風

【和訓】頌に曰く、利利塵塵避くる處なし 〇 眼睛を瞎卻し 〇 相求むるは卻て地中の天に似たり、
始て消息を得たり 〇 忽ち薩埵に逢ふ開元寺上に頭を安す 〇 萬里空しく還る異國の船 〇 海晏河清 〇 滿船是れ清風

【頌】「刹々塵々避くるに處なし」刹々塵々は無數量の義なりとある、一切處一切時、悉くこれ觀音の道場である、一刹一塵として觀音の身を現せざる處はない、突兀たる山の頂、深々たる海の底、觀音の慈眼之を照さざる處はない、されば吾等は從晝至夜、運足轉歩の上に於いて暫くも觀音に離るゝことはなく、五月蟬いと思つても避くることは出来ぬ、「眼睛を豁開して如何と看よ」刹として現せざることなき觀音の活動は如何、大慈悲心を發現して如何に衆生濟度をなして居るかを仔細に看察するが可い、併しながら觀音の活動といふも之を遠きに求めてはならぬ、人々自己の坐作進退の上を返照せよといふことである、「相求むるは却つて地中の天に似たり」刹々塵々觀音が徧滿してござると聞いて、どれ何處に觀音が居るかと求める時は所謂白雲萬里の距を生じて其の面影を見ることも出来ぬ、恰も地を掘つて天を求める様なもので、勞すれば勞する程益々觀音に遠かるのみである、元來人々一座の補陀山であるから、觀音を外に求めるのは牛に騎つて牛を尋ねる様なもので、回光返照せぬ限は何時になつても相逢ふことは出来ぬ、「始めて消息を得たり」此の頌に到つて始めて玄樓和尚は眞の消息を示された、地中の天に似たりとは好箇の註釋であると賛成せられた、「忽ち菩薩に逢ふ開元寺」觀音薩埵は明州の開元寺に留まつた、此處に於いて吾等は觀音の相に見する

ことが出来たのである、全體開元寺とは、豁然大悟の當處であつて、香嚴に取つては擊竹の當處が開元寺であり、靈雲に取つては桃花を見た端のが開元寺である、抑も吾等の開元寺は何處であらうか、喫茶喫飯阿屎放尿の處、如何々々と點檢して見ねばならぬ、「千年の怪物」千古の疑團である、西洋にはスヒンクスといふ怪物があるといふが、開元寺の觀音薩埵も一箇のスヒンクスである、此の怪物思量分別を以つては到底其の本性を識得することは出来ぬ、「頭上に頭を安ず」人々各自に薩埵を安置しながら又開元寺に薩埵に逢ふといふのは頭上に頭を安ずるといふものである、餘計なことをする必要はないか、抑へた、「萬里空しく還る異國の船」人々自己の開元寺に於いて薩埵に相見することが出来るのであるけれども、サテ其の開元寺は何處ぞ、薩埵のお像は如何と探し求める時は忽ちそれを失却して終つて、空しく萬里の波濤に漂はさるゝ、高麗の船と同じ運命となるのである、然し乍ら本分底よりいふ時は到り得歸り來つて別事なしであるから、空しく還るのも又得たりである、高祖道元禪師は宋から歸朝して大法を傳へられたが、自は空手にして還郷すと申された、薩埵に相見しても其の蹤跡が残らぬ、萬里空しく歸る處に大いに觀音薩埵を勸請して還る分があることを知るべきである、「海晏河清」無事平穩な船旅ぢや、修行の波も證果の風も、生死の難

所も菩提の暗礁もない、「滿船是れ清風」颯々たる清風を乗せて空しく還る處に無一物中無盡藏の寶を積んで居る。

第五十九則 無業情念の話

無業國師曰、若一毫頭凡聖情念未盡嫌道不免入下驢胎馬腹裏去用免爲二 什麼一

【和訓】無業國師曰く、若し一毫頭ばかりも凡聖の情念未だ盡きずんば、這の什麼驢胎馬腹裏に入り去ることを免れず。免ひるることを用ひて什麼かせん。

【本則】「無業國師曰く、若し一毫頭ばかりも凡聖の情念未だ盡きずんば」無業國師とは如何なる人であるか傳が不明である。此の示衆は本録に「若臨終時」とあるのを略したのであるといふ、毫釐も差あれば天地懸かに隔り、違順わづかに起れば紛然として心を失すとある通り、是とか非とか、凡とか聖とか露程でも妄念妄想があれば種々雑多の煩惱それより生じて際限がない、佛の一字も心田の汚、惱に悟迹あれば悟も亦却つて萬劫の繫驢橛となる、凡聖の情念を悉く放下し去り、其の放下底をも放下して始めて自在大解脱が得られるのである、「這の什麼をか嫌ふ」至道無難唯嫌揀

擇と三祖大師は申されたが、無業國師は何として凡聖の情念を嫌はれるぞ、一毫頭の凡聖の情念でもあれば云々といふのは已に情念の有る所と無い所との揀擇を立て、居るではないか、「驢胎馬腹裏に入り去ることを免れず」若し纒かでも情念があれば其の因によつて或は驢の腹に陥り馬の腹に宿つて、畜生道に墮在する生死輪廻の絆は永劫に斷つことが出来ぬ、巖頭和尚も毫釐の繫念は三塗の業因、警爾も情生すれば萬劫の羈鎖といはれた、併し乍ら情念とは如何なるものであらう、驢胎馬腹とは何物ぞ、吾等は元來生死去來を超越して居る、此處に死し彼處に生ずる底のものが何處にあるか、須らく其の驢胎馬腹に入る底のものを篤と研究して見るべきである、無業國師の垂示も畢竟するに學人をして情念を生ずる底のもの、驢胎馬腹に入る底のものを點檢せしめんとする赤心の流露である、免る、ことを用ひて什麼をか爲さん」生死輪廻頗る結構ではないか、「生死の中に佛あれば生死なし、只生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく涅槃として願ふべきものなし云々」と道元禪師も示されてある、生死決して免る、必要はない、大いに生死の中に頭出頭没すべきであると風外老人は大いに半面の眞理を擧揚せられた。

玄樓曰、蓮藏海不然、若要凡聖情念徹底盡、直須投入箇驢

胎馬腹裏始得

不知甚時出驢胎馬腹、好與南泉同參

【和訓】玄樓曰く、蓮藏海は然らず、若し凡聖の情念徹底盡きんことを要せば、直に須く箇の驢胎馬腹裏に投入して始めて得べし。知らず甚の時に驢胎馬腹を出づ○好し南泉と同參。

【評唱】『蓮藏海は然らず、若し凡聖の情念徹底盡きんことを要せば』玄樓和尚は無業國師が情念を捨て、生死透脱が出来る様にいふたのを抑へて、生死の外に涅槃なき道理を示された、「直に須く箇の驢胎馬腹に投入して始めて得べし」これ或僧が洞山和尚に、寒暑到來す、如何が廻避せんと問ふた時に、洞山和尚が寒には鬪黎を寒殺し熱には鬪黎を熱殺すといはれたと同じ筆法で、煩惱生死の中に没頭して始めて眞に煩惱生死を解脱することが出来ると示されたのである。水を泳がんとするものは水に溺る、ことを懼れず、自ら水に身を任せて捨身になつて始めてよく泳ぐことが出来る、所謂喪身失命を顧みず百尺竿頭に一歩を進むるの大勇猛心あつて始めて一切の情念を斷じて生死透脱が出来るのである。「知らず甚の時か驢胎馬腹を出づ」そんなことで何時驢胎馬腹を脱することが出来るか、却つて益生死輪廻の因を増長するばかりではないかとこれは風外老人が句抑下の意卓

上である、内心玄樓に賛成しながら口では大いに之を貶して居るのである、「好し南泉と同參」南泉和尚は第五十六則で、魯祖の面壁に對して、佛未出世の時に會取せよ云々と、第二第三に落ちた批評をして得々として居つたが、無業國師の示衆に對する玄樓和尚の評唱も丁度之と同じで、豪さに並べた文句が却つて第二第三に落ちて居ると抑下した。

頌曰、聖念凡情驢馬縁這時節最難得 古人涙自痛腸傳空慈殺人 可憐撥

草參玄客有麼有麼○老僧未見一人 十箇九皆住多是不能住 二邊情念一看如何○靈龜曳尾

【和訓】 頌に曰く、聖念凡情驢馬の縁この時節最難得 古人の涙痛腸より傳ふ空しく人を慈殺す 可憐可憐 撥

憐れむべし撥草參玄の客、有りや有りや○老僧未だ一人を見ず 十箇の九は皆二邊に住す。多くは是れ道の二邊に住するも能はず道の情念を盡して如何と看よ。○靈龜尾を曳く。

【頌】 『聖念凡情驢馬の縁』貪瞋痴の凡情は生死輪廻の因であるのみならず、佛法とか禪道とか、修行とか證果とかいふ様な聖念も又驢胎馬腹に投入する因となる、併し聖念凡情も厭ふべきもので

なく驢胎馬腹も又結構である、之を自家藥籠中のものとなせば、平常の家具となつて重寶に役立ち、この中に全身心を擲つて投入すれば吾等の住處となつて安樂に運歩轉歩することが出来る、「この時節最も得難し」只聖念凡情を自家藥籠中のものとし、驢胎馬腹を安住處とすることが甚だ困難である、所謂百尺竿頭に進一步するといふことは大勇猛心あるに非んば出來難い藝當である、「古人の涙は痛腸より傳ふ」かやうに徹惻の慈悲を以つて學人の爲に親切な垂示をせられるのは、道に自ら苦修練行した覺があるからである、「會て客と作るに慣れて復た客を憐れむ」といふが、實地に苦勞をしたものでないと思やうがないものぢや、「空しく人を慈殺す」玄樓和尚こゝでは何だか憐つばいことばかり申されるナ、古人の涙だの痛腸より出つたのと、要らぬ閑言句を並べて學人を悲ませるよりも、大いに激勵して佛道修行に奮發をさせる様にしては如何、「親言親口」併し乍ら和尚の語は頗る親切なものぢや、斯様な親切な言語は和尚の如き親切な師家の口からでなくては出ぬ、「憐むべし撥草參玄の客」煩惱妄想の草を撥いて玄々微妙の法門に參するものは天下其の數が多い、佛道修行をなすと稱する輩は稻麻竹葦も菅ならぬ程であるが、サテ眞に凡情聖念を盡して佛祖正傳の法を會得し得るものは頗る稀である、實に曉天の星にも比すべきである、「有り麼有り麼」玄樓和尚は斯

様に見くびつたことを申さる、が、どうぢや、即今風外門下に我こそけ眞箇撥草參女の目的を達し得たと自任し得るものがあるかな、老僧未だ一人を見ず、老僧の目にはまだ一人も見付からぬが甚だ心細いことぢや、十箇の九は皆二邊に住す、十中八九は有無迷悟の二見對待の邊量に住着して居る、之が菩提である之が煩惱である、之は是である之は非であると取捨選擇をしたり、八不だの中道だの唯心だの唯物だのと理窟の中へ頭を突込んで出身の活路を失却して居るものが多い、斯の如きは實に佛祖の大道に違背すること甚しいものである、多くは是れ這の二邊に住すること能はず、這の情念を盡して如何と看よ、處が此の二邊にて徹底住すれば結構であるがその出来るものも少い、一切の情念を斷じて徹底二邊に住する時は其の二邊も遂に泯滅して都廬一平等の大法界に歸して終ふ、靈龜尾を曳く、海龜は卵を砂に隠すが尾の跡を砂の上につけるから漁士はそれによつて卵を見付ける、玄樓和尚巧に跡を味ましたつもりでも言端語端の上に思量分別の跟が現れて居ると抑へた。

第六十則 園頭敲枕の話

南泉典座、辨兩分食、詣園管待園頭、還知園、食時展鉢次、須觀二彼來處

忽有念佛鳥鳴、如來正法輪、園頭乃敲枕頭一下、有權有實、鳥又鳴、三日不逢、勿作舊時

又敲一下、無權無實、無殺無活、鳴既住、還問、園頭曰、會麼、報恩何太過、座曰、不會、幸值

園頭又敲一下、如蓮花、不著水

【和訓】南泉の典座、兩分の食を辨して園に詣りて園頭を管待す、還つて園頭、食時展鉢の次、須らく彼の來處を觀すべし、忽ち念佛鳥有りて鳴く、如來の正法輪、園頭乃ち枕頭を敲くこと一下す、權有り實有り、鳥又鳴く、三日逢はざれば舊時、又た敲くこと一下す、權無く實無く、鳴くこと既に住む、還て問、園頭曰く、會すや、報恩何ぞ太過、座曰く、不會、幸に値ふ、園頭又た敲くこと一下す、蓮花の水に著せざるが如し

【本則】南泉の典座、兩分の食を辨じて園に詣りて園頭を管待す、南泉山で食事を司る典座の役を

奉じて居つた某といふ僧が、二人分の食物を拵へて庭園へ行つて園頭に御馳走をした、園頭は叢林に於ける庭園や田畑のことを司る役で、庭師の様なこともすれば百姓の仕事もする、此の典座は園頭と格別仲が好かつたものと見えて庭へ御馳走を運んで、二人で大いに愉快に會食をやらうといふつもりらしい、叢林のことであるからいづれさしたる御馳走はなかつたであらうが、只徒らに喰ふが目的ではない、古人は食事の間も箇の事の參究を忽諸にせず、送食の手許に於いて大に切磋琢磨するつもりであつたのである、「遠つて園頭を知るや」此の典座は全體園頭を知つて居るのかな、素より通常の顔見知りではあらうが、眞箇肝膽相照の間柄であつたかどうかは問題ぢや、「食時展鉢の次で」サテ二人が食事を始めやうとして鉢盂を展きに掛つた時、「忽ち念佛ありて鳴く」念佛鳥は紀州の高野山や越前の水平寺の如き深山に棲む鳥で、其の聲が佛法僧といふやうに聞えるといふので佛法僧ともいふ、それが一聲鳴いた、食事云々の著語「須く來處を觀すべし」食事の時には五觀の偈を唱へる、即ち一つには功の多少を量り彼の來處を計る、二つには己が徳行の至缺を計つて供に應ず云々といふのである、展鉢の時は須らく食の來處等を觀じて感謝の念を持すべきである、展鉢の時のみではない、吾等は行住坐臥の上に於いて常に來處を觀すべきである、「如來の正法輪」



胡為典座深が夢
 老力枕頭放不教

鈴聲も廣長、舌山色も清淨身なりとすれば、念佛鳥の聲も如來が正法輪を轉じ給ふものである、「園頭乃ち枕頭を敲くこと一下す」園頭は念佛鳥の聲を聞くと手近にあつた枕をコツ／＼と敲いた、どういふ意旨で敲いたのか、典座をして其の聲に就いて所解を示さしめんが爲であるとか、響の聲に應ずるが如く、法界の現象は互に相應するものであるといふ趣を典座に示す爲であるとかいふ様に、強いて理窟を付ければ付けられぬではないが、その様な計較分別を容れるのは却つて園頭の意旨に背く、只興に乗じて思はず敲いたものと見れば可い、「權あり實あり殺あり活あり」或は權教を示し或は實教を示し、或は殺人刀を用ひ或は活人劍を用ひる、これ作家の漢の機用である、「鳥又鳴く」園頭の打つ音を聞いてそれに應ずるつもりであるかどうかは解らぬが念佛鳥が又鳴いた、實に箭鋒相拄へ敲唱相應する那人と那人の出會の如くである、「三日逢はずんば舊時の看を作すこと勿れ」病雀尙ほ恩を報ず、人類争か恩を知らざらんやと正法眼藏にも見えて居る、走獸飛禽と雖も佛法も人道を知つて居る、修行もあれば證果もある道理である、されば三日逢はずんば念佛鳥が大悟徹底することゝ無とも限らぬ、否、一切衆生悉有佛性であるから必ず成佛得脱するのである、「又敲くこと一下」園頭は又枕を敲いた、俗に二度いふと口が風を引くといふが、任運無作の作略も斯様に繰

り返されては有難味が無い、風外老人も「權無く實なく殺なく活なし」園頭は敲一下といふ一手より知らぬ能無し猿である、權實殺活等の自在の作略は全く無いと抑へた、「鳴くこと既に住む」園頭の第二聲を聞いて念佛鳥はバタリと鳴き止んだ、別にそれで公案が圓成したからといふでもなく、又園頭の意旨を悟つたからでもなからう、只興に乗すれば鳴き興到らざれば鳴かぬまでのことである、「還つて聞くや」鳴き止んでからの聲を聞き得る底の分があるか、靜中の動を會するやと問ふたのである、「園頭曰く、會すや」サア今の一場の敲唱應對の道理が解つたか、只徒らに枕を打つたのではない、又徒らに鳥が囀つたのではない、大いに深甚微妙の法門を開演したのであるが典座和尚會得が出来ましたかナと一撈した、「報恩何ぞただ過ぎたる」中食の御禮に佛法的々の大意を示すとは又頗る叮嚀な應酬であるワイと讚める、「座曰く不會」これまでは何の氣なしに鳥の鳴聲と枕頭を敲く音とを交代に聞いて居つたが、サテ斯様に何の道理ぞと問はれると何とも返答が出来ぬ、彼であらうか此であらうかと思量分別に涉るから却つて一層解らなくなつて終ふのである、「幸に不會に値ふ」其の不會が結構や、會するといへば已に一物珍重の弊に墮する、元來會すべき何事もないのであるから不會にして始めて得たりである、「園頭又敲くこと一下す」此の一敲は盡天地に響き渡

る處の聲である、迷悟も凡聖も是非も得失も、一切の二見對待を雙に打破し去つて佛々祖々正傳の
 大法を宣揚したのである、鳥が鳴いた時の一敲と典座が不會といつた時の一敲とこれ同か是れ別か、
 それは此の公案に參するよの、實地に參究すべき眼目である、此の敲一下に對して風外老人は「蓮
 華の水に著せざるが如し」と著語せられたがこれは頗る適切である、蓮は淤泥より出でて淤泥に染
 ます、水に在つて水に濡れぬ、園頭の敲一下は會不會に關する敲一下であつて而かも會不會に關ら
 ず、鳥聲に相應じて鳥聲に關らぬ、實に没跡跡斷消息なるものである。

玄樓曰、鳴底鳴、敲底敲、只是恁麼、典座因什麼不會、雖然與
 麼只箇不會寸釘入木既拔却了

【和訓】玄樓曰く、鳴く底は鳴き、敲く底は敲く、只だ是れ恁麼、典座什麼に因てか會
 せざる、然も與麼なりと雖も只だ箇の不會寸釘木に入る。既に拔却し

【評唱】「鳴く底は鳴き、敲く底は敲く」鳥は鳴くのが本分、園頭は任運に敲く、其處に何等之乎者
 也の容るべきはない、山川草木雨竹風松、それぐ皆其の法位に住して任運無作に其の爲す底を爲

して居る、「只是れ恁麼」只それ丈のことである、別段深い道理も變つた理窟もない、「典座什麼に因
 てか會せざる」この様な解り切つたことを典座が不會といふたのは問はれた刹那に於いて第二念に
 涉つたからである、鐘鳴れば法堂、鉦響けば齋堂の道理は思量分別では會することが出来ぬ、何の
 道理を以つて柳は縁に萌え花は紅に咲くのか、何の道理を以つて呼べば應じ敲けば響くのか、かく
 問端を提起する時は只不會と答ふる外はない、「只箇の不會、寸釘木に入る」されば典座の不會は與
 へていふ時は實に動かすべからざる好箇の答話である、不會の一語蓋天蓋地である、既に拔却し了
 れり」玄樓の評唱で一切の疑團は氷解して終つた、不會の蓋天蓋地なることを知らしめたのは實に
 玄樓の働であると讚嘆する意味の著語である。

頌曰、昔日黃梁猶未熟見老、覺來了了悟浮生遇八刻、胡爲典座夢中說夢

深成夢盛衰五十年、盡力枕頭敲不驚勞而無功

【和訓】頌に曰く、昔日黃梁猶ほ未だ熟せず、老仙に瞞ぜらる、覺め來りて了了として浮生
 を悟るに夢を説く、胡爲れぞ典座深く夢を成す、盛衰五十年〇何れの力を盡して枕頭敲けども

驚かす。勞して功なし○唯恐らくは汝が動著せんを。

【頌】『昔日黃梁猶ほ未だ熟せず』昔支那の盧生といふ人は黃梁を煮ながらうた、寢をして、五十年間種々の盛衰に遇つたことを夢に見たが、醒めて見た時はまだ其の黃梁が熟して居なかつた、ホンの須臾の間に長月日のことを夢見たのである、「老仙に瞞せらるゝこと莫れ」盧生は雲房先生といふ仙人に夢を見せられたといふことであるが、請人者も玄樓先生の筆先に誤魔化されてはならぬぞと警戒する、「覺め來りて了了として浮世を悟る」重房先生が盧生に五十年浮生の夢を見せたといふが、盧生は夢醒めて明に浮世の儘きことを悟つた、世の中は兎角變遷常なくして頼み難いことを悟つたのである、此の頌は前二句では本則に無關係な故事を引いて本則を頌する前提とした「遅八刻」悟り様が遅い、何故夢の醒めぬ中に悟らなかつたのかと咎めて暗に學人の參究を激勵したのである、「夢中に夢を説く」玄樓和尚は斯様に文才を弄して面白く頌せられるが、これも畢竟夢中に夢を説く様な取とめもないことである、「胡爲ぞ典座深く夢を成す」典座は送食をしても別に園頭と法門を商量しやうでもなく、鳥の聲を聞いても一向それに對して佛法上の道理を考へて見やうでも無い、茫然として白晝夢を貪つて居る、「盛衰五十年」茫然たる間に五十年六十年の一生は過ぎて終ふ、或は

盛んなる時もあらう或は衰へる時もあらうけれども醉生夢死の輩は生死の一大事因縁をも明めやうとはせぬ、「何れの時は是れ夢にあらざる」迷といふも夢、悟といふも夢、佛界も魔界も、本分底より見來る時は畢竟皆夢である、「力を盡して枕頭敲けども驚かす」園頭が力を盡して典座の迷夢を破らうとしても一向手應へがない、典座ばかりではない、天下人いづれも園頭の敲一下の當處に於いて大悟徹底せねばならぬぞと一般の參學へ掛けて警めた趣がある、「勞して功無し」無眼子を相手にはいかに骨を折つても何の效もない、「唯恐くは汝が動著せんことを」園頭は典座を警覺するつもりで切りに枕を敲く様であるが却々御當人が夢を貪つて居るのではないかな、寢惚けて枕を敲いて居るのでは餘り有難くもないと園頭に向つていひ乍ら玄樓和尚が頌を以つて學人を警めたのを揶揄したのである、玄樓和尚御自身も脚下は確かにごさるがナといふ程の意味がある。

第六十一則 雲門菓子の話

雲門偃禪師、因鞠常侍問、靈樹菓子熟也未蚊子上日、甚麼年中得信道生相席打令

【和訓】雲門偃禪師、因みに鞠常侍問ふ、靈樹の菓子熟すや也未た未しや、蚊子鐵牛に上る曰く、其廢の年中か生しきと道ふことを信ずることを得たる。席を相にして令を打す。

【本則】「雲門偃禪師」雲門文偃禪師は青原下六世雪峰義存禪師の法嗣で、支那禪門七宗の一派雲門宗の始祖である、韶州雲門山に住したから通常雲門和尚と稱せられる、曾の韶州の靈樹敏禪師の法席にあつて第一座に任ぜられて居つたが、靈樹敏禪師遷化の時、香合の中に「人天眼目は堂中の首座」と遺書してあつたので國王が雲門を請じて靈樹に住せしめた、雲門山に住せられたのは其の後のことで、此の公案は靈樹に住せられた時のことと思はれる、「鞠常侍問ふ、靈樹の菓子熟すや也た未しや」常侍といふ官を奉じて居つた鞠某といふ人が靈樹山の菓實はもう熟しましたかと問ふた、

石卒嘗
鞠常侍
乾坤渾
遇齒牙
騫



菓實に事よせて雲門の境界を探らんとする所謂借事問である。玄樓が此の公案を本書の中へ載められたのは、鞠常侍が雲門に菓子くわしの熟じやくしたか否かを問ふた當處たうじよに於いて、參學さんがくのものをして自家屋裏じかぢやうりの菓子くわしの熟否を照顧しやくこせしめん爲である、「蚊子鐵牛ぶんすてつぎうに上る」雲門は當代たうだいの大宗師たうしうし家である、それに對して鞠常侍きよくぢやうじなどが境界を探らうとするのは恰も蚊が鐵製の牛を刺さうとする様なもので到底齒も立つ譯わけのものでない、「曰く、甚麼しんなんの年中か生なましきと道みちふことを信しんずることを得たる」果然雲門は人天の眼目がんもくといはれた程の人であつたから頗る高邁かうまいな見識を以つて眞向まっこうから鞠常侍の妄想を打破せられた、尊公そんこうは靈樹れいじゆの菓子くわしが熟したかどうかと聞くが全體生しい時は何時であるか、靈樹の菓子くわしの熟しない時といふのがあるのかと反問した、靈樹の菓子くわしとは佛性ぶつじやうである眞如しんじよである、眞如佛性は無始無終にして時間空間を超越して居る、なつた時は空劫くうけつ已前いぜん、落ちる時は盡未來際じんみらいさいであるから、三皇五帝の昔でも諸册しよさく二神にじんの時代でも、生しと道ふことを信する時はないといふ、實に雲門の此の答話たふわは全く聖念凡情を絶して居る、「席せきを相あひして令れいを打うす」天子てんしが寰中くわんぢゆうにあつて四方に號令がうれいするの概がある、到底常侍輩たうていぢやうたひの窺うかがひ知る處ではない。

玄樓曰、靈樹菓子灼然尙未熟在

我愛其未熟底

【和訓】

玄樓曰く、靈樹の菓子灼然として尙ほ未だ熟せざる在り。我れは其の未熟底を愛す。

【評唱】

「玄樓曰く、靈樹の菓子灼然として尙ほ未だ熟せざるあり」鞠常侍の問に對して雲門和尙は何だか煮へ切らぬ返答をしてござるが、玄樓の目から見るとどうやらまだ靈樹の菓子は熟して居らぬ様であるわい、靈樹の菓子くわし已すでに熟して居るならば常侍の問端を起し來つた言下に於いて三十棒を與へて門外に叩き出すべきであつた、常侍が靈樹の菓子云々というて來たのは、雲門を引掛けて巧に良に入れやうとしたものであつて、此の際雲門は葛藤を截斷すべき大機大用の斧を振つて出身の活路を開くべきであつた、然るに常侍の語についで、生しきと道ふことを云々といつてマゴ／＼して居つたのは、實に常侍の良に引か、たといふものである、「我は其の未熟底を愛す」併し其の未熟底が結構ではないか、向上底より問ひ來るものに對しては向上底を以つて答へ、向下底より問ひ來るものに對しては向下底を以つて應ずる、これが作家の漢の無罣礙なる作用である、何も無下にそれを貶すには當らぬと風外老人は反對に雲門を肯はれた、畢竟各自の家風によつて拈弄したので

ある。

頌曰、無根靈樹結靈菓^三、不熟不生似鐵堅^二、一口卒嘗鞠

常侍^{鐵蟻動}、乾坤渾遇^三齒牙塞^{還知味麼}、唯^{恐齒未全關}

【和訓】頌に曰く、無根の靈樹靈菓を結ぶ、一二 熟せず生しからず鐵の堅きに似たり、

滿盤に一口卒かに嘗む鞠常侍を動かし乾坤渾て齒牙の塞るに遇ふ。還て味を知るや唯だ恐ら

【頌】「無根の靈樹靈菓を結ぶ」鞠常侍が擔ぎ出した靈樹は元來の無根である、熟未熟、生死涅槃、

修行證果といふ様な根は一本もない、斯の如き無根の靈樹であるから其の實も只の實ではない、

所謂靈菓である、「一二三」サテ其の靈菓は數量を絶したものであるが而かも一二三四五六の數量を

離れたものではない、數量に墮せずして數量を離れぬ處が無根の靈樹たる所以である、「熟せず生し

からず鐵の堅きに似たり」靈菓であるから熟不熟にも拘らず、凡見を以つて之を咬嚼せんとすれば

鐵の堅きが如くであつて到底齒も立たぬ、右とか無とか四句とか百非とかいふ様な佛法禪道の道具

を以つて之を動かして見やうとしてもビクともするものではない、所謂蚊子の鐵牛を咬むが如くで

ある、「滿盤に托出す」その様な菓實が盆に一杯出された時は何とする、イヤ盆に一杯どころではな
い、盡法界悉く靈菓が充滿して居る、眼にふる、處耳に聞ゆる處一切處皆齒も立たぬ疑團だらけ
である、「一口卒かに嘗む鞠常侍」鞠上座は、赤ん兒が手當り次第何でも口へ持つて行く様に、靈菓
を一口嘗みやうとしたがどつこい鐵の堅きに似たりぢや、却々咬むことは出来ぬ、風外老人も「螻
蟻鐵柱を動かす」それは恰ど蟻や蟲けらが鐵の柱を動かさうとする様なものであると同意せられた、
『乾坤渾て齒牙の齶るに遇ふ』東西南北上下四維どこを噛んでも齒が闕けて終ふ、一切處無根の靈樹
に實つた靈菓ばかりであるからである、噛む所の鞠常侍自身も元來これ一顆の靈菓であるから、靈
菓靈菓を噛む時乾坤渾て齒牙の塞がるに遇ふのである、「還つて味を知るや」サア靈菓の味が分つた
かな、喰へども其の味を知らずでは困る、諸人者須らく靈菓の味を知ることゝ努むべきであるぞと
參究を促した、「唯恐くは齒未だ全く闕けざること」齒牙が全くかけて終ふ境界に達するならば甚
だ結構であるが惜むらくは其の端的に到るものが稀である、稀どころか殆ど皆無である。

第六十二則 南泉住庵の話

南泉願禪師住菴時、一僧到賊泉曰、某甲上山作務、請齋時作飯
 自喫了卻送太煞緩地一分來、其僧辨齋自喫了卻將家事一時打破
 仍就牀而臥曹賊欲傷泉伺久不來遂歸見僧臥賊身泉亦去一邊
 臥寶劍次僧便起去董卓依鏡泉住後曰、我往前住菴時箇劄利道者來
 直至不如今不見不及

【和訓】南泉の願禪師住庵の時、一僧到る賊泉曰く、某甲山に上りて作務せん、請ふ齋
 時飯を作して自ら喫了りて卻つて一分を送り來れ、太煞だ其の僧齋を辨じて自ら喫し
 了りて卻つて家事を將て一時に打破して仍つて牀に就いて臥す、曹賊爲て夢に揚修泉久しう
 して來らざるを伺つて遂に歸り、僧の臥すを見る賊身漸泉亦た一邊に去つて臥す寶劍董卓

と欲と僧便僧ち起起き去去る董卓鏡に依て泉住泉して後後に曰曰く、我我れ往往前前住住菴菴の時時、箇箇の劄劄利利の道道者者來來
 りて直直に如如今今に至至つて見見ずも及ばず

【本則】『南泉の願禪師住庵の時一僧到る』南泉普願禪師のことは前に屢々述べた通り馬祖道一禪師
 の法嗣で、唐の貞元年中地陽の南泉山に住して大に宗風を擧揚せられた人である、此の公案は南泉
 がまた地陽の大寺院に住せず、一小庵を結んで居られた頃のことであつた、或日普願和尚の庵へ一
 人の僧が訪れた、『賊賊』普願和尚秘藏の佛法を奪ひ取らうといふ一筋繩では行かぬ大泥棒と見えて
 和尚却々油断をせず、早速こちらから一撈せられた、『泉曰く、某甲山に上りて作務せん、請ふ齋時
 飯を作して自ら喫了りて却つて一分を送り來れ』南泉の挨拶は佛法の臭味も禪道の臭味も全く離
 れた平生底の談話であるけれども只輕々と聞流さず、よくよく言中の響を聴取すべきである、山僧
 はこれから山に行つて作務をして來るからお午になつたら尊公自身で飯を炊いて喰べてから衲の處
 へ持つて來てくれといふ、禪僧の香氣な生活状態が此の一語にも明かに、現れて居る、大煞だ緩
 々地』至極悠々たるものぢや、問答だの商量だのと、禪僧が寄れば直に猫のサカる様な聲を出し
 合ふのは、あれは後世の鬻坊主共の猿芝居である、其僧齋を辨じて自ら喫了りて却つて家事を將

つて一時に打破して仍ち牀に就いて臥す。僧は南泉の留守に飯をたいて二人前獨で喰べて終つておまけに鍋も釜も残らず打ちこわして牀の上へゴロリと寝て居た、風外老人が賊賊と警戒した通り此の僧却々始末に行かぬ亂暴者であつた、南泉が穩かに談話をしながら脚下をチロリと睨んで行つたのを知つて南泉の荒膽をひしぐつもりで斯様な惡辣なことを行つたのである。佛見といふ釜も、法見といふ鍋も、乃至は菩提といふ膳も涅槃といふ茶碗も、一切悉く打こわして終つて向上の床へ上つて樂々と臥て居たのである、「曹賊偽つて夢に揚修を斬らんとす」此の僧の作處却々陰嶮で油斷がならぬ、門人の癖に逆に宗師家の脚下を點檢せんとして居る、禪門の反逆者ともいふべきである。と暗に讚嘆した。「泉久しうして來らざるを伺つて遂に歸つて僧の臥せるを見る」南泉は山で作務をして居つたが、午飯時になつて腹も空いて來たので、今に來るか今に來るか僧が辨當を持つて來るのを待つたが何時になつても影も見えぬ、遂に待ちあぐんで歸つて來ると上述の始末である。「賊身漸く露はる、利頭賊の本性を見付けられて終つた、如何程隠しても鋭い機鋒は何處かで其の尖頭を露はすものである、」泉亦一邊に去つて臥す。南泉和尚僧の様子を見て驚くかと思ひの外、黙つて自分も僧の傍に臥た、臨機應變の巧妙なことは遺がに馬祖門下の俊髦である、柔に逢うては剛、剛

に逢うては柔、宛轉滑脫の妙用頗る手に入つたものである。即ち南泉は僧が迷悟是非の諸道具を一切打破したのに對して一面贊成の意を表すると共に更に一段と僧の手許を探られたのである。「寶劍董卓を刺さんと欲す」董卓は後漢の末に出でた暴臣で、幼帝を挾んで權を專にした爲に呂布といふ豪傑に討たれた、南泉が僧の臥したのを見て歸つて一邊に臥したのは呂布が寶劍を以つて董卓を打たんとした様なものである。「僧便ち起き去る」南泉が傍へ來て横になつたので僧は早速起きて行つて終つた。南泉和尚の御贊成は有難いが拙僧はその様な甘い手には乗りませぬ、向上の樂地亦我が住處にあらずといふ見識である、此の僧却々技倆を具へた恰悌の漢であつた、「董卓鏡に依つて危難を免かる、」僧が轉身の一路を開き得たのは恰も鏡に刀影の映るを見て董卓か一度難を避けた様なもので一度は難を免れ得たけれども畢竟南泉の爲に勘破せられたのである。「泉住して後曰く、我れ往○前○住○庵○の○時○箇○の○刹○利○の○道○者○あり○て○來○る、直○に○如○今○に○至○つ○て○見○え○す」南泉和尚其の後地陽に住山してから坐下の大家に向つて嘆息して言はれた、衲が昔庵に住んで辨道して居つた頃、一人の恰悌の漢が來て頗る靈妙な作略を示して行つたことがあつたか、あの様な道者には其後逢つたことが無いと口を極めて賞讃せられた「臍を噬へども及ばず」南泉和尚口先では大層賞讃せられる様であるが、

其の實喰逃げされた上に勝手道具をスツカリ壊されて終つて内心後悔しながらのテレ隠しでござらう、今頃になつて何と言つて見た處で後の祭さ、何故アノ時僧を引捕へて贓品をスツカリ奪ひ取らなかつたかと風外老人がこれも日先で咎めて内心賛成して居る、此の則は始め僧が飯を取つて道具を打ちこわして臥た所は直ちに毘盧の頂額を踏んで行くといふ作略で、此の境界は佛眼に覗れども見えざる處である、南泉が一邊に去つて臥したのは僧の向上の樂寢を肯ひながら、尙ほ若し其處に住着して居りはせぬかと試して見たのである、此に於いて若し浮かりして居れば此の僧忽ち南泉の三十棒を免れなかつたが、起き上つて巧に轉身の一路を開いたから後に南泉の賞讃を博し得たのである。

玄樓曰、仍就牀而臥、方是探竿影草、又去一邊而臥、可謂騎賊馬、追賊、僧便起去、這箇一機就中最樞要、南泉至住山日、追念不能休者、只是在於這裏、且道這箇一機因什麼、恁麼奇特止止不須說、不是神仙客、徒勞語、洞中言猶在耳

【和訓】玄樓曰く、仍つて牀に就いて臥す、方には是れ探竿影草、又た一邊に去つて臥す謂つべし賊馬に騎つて賊を追ふと、僧便ち起き去る、這箇の一機中に就いて最も樞要、南泉住山の日に至るまで追念して休むる能はざる者は、只だ是れ這裏に在り、且く道へ這箇の一機介麼に因てか恁麼に奇特なる、止みね止みぬ、説く可からず、是れ神仙の客にあらずんば徒らに洞中を語るに勞せん。言猶ほ耳に在り。

【評唱】『仍つて牀に就いて臥す、方には是れ探竿影草』僧が飯を喫し家具を壊つて牀に上つて臥したのは、蓋し南泉の脚下を點檢せんとする探り棒隠れ竅である、『又一邊に去つて臥す、謂つべし賊馬に騎つて賊を追ふと』南泉が僧の様子を見て自分も片隅へ行つて臥したのは僧が南泉の脚下を探らんとした道具を奪つて反對に其の手許を點檢したのである、『僧便ち起き去る、這箇の一機、中に就いて最も樞要』僧が起き上つて去つたといふ作略は、此の一場の葛藤の中で最も肝要な處である、南泉の爲に攻道具を奪はれて終つた場合であるから、何か一つ出身の手段を講ぜねば永劫に自由は得られぬ、牀に上つて臥したのは向上の端的を示したのであり、起つて去つたのは向上の樂所にも

住着せず、自由無碍の活作略あるを示したのであつて、此の作略こそ佛眼にも見えぬ魔外も窺ふこと能はざるものである、『南泉住山の日に至つて追念して休むる能はざるものは只是れ這裏に在り』南泉が後日地陽に住山してから、大衆に向つて昔伶俐の漢あり云々というて賞讃措く能はざりし所以は實に此の一事にある。禪は住着を最も忌む。長安樂しと雖も久居すべからず、向上の佛境界も之に執着すれば萬劫の繫驢橛となるのであるから、僧が起つて去つたのを南泉が追念して休むる能はざるのである、『且らく道へ這箇の一機、什麼に因つてか慙慙に奇特なる』何は兎もあれ僧便起去の一機が、どうして其の様に大切なのであらうか、前にもいふた轉身の作略であるからではあるがさればとて又轉身といふことばかりを有難がつて、何でも泥棒が警察の網をくいる様に、彼方へぬけ此方へ抜けることが佛法の樞要であると思つてはならぬ、『止ね止ね説くべからず』それでは全體どういふ譯で奇特であるか、斯であらうか彼であらうかと思量分別をして見たり、兎や角と理窟を竝べて見た處で何の役に立つものでもない、『是れ神仙の客にあらざれば徒に洞中を語るに勞せん』仙人の住む洞中の様子は仙人でなければ解るものではない、俗界のものが種々と想像して見た處で所詮旨の垣のぞきである、這箇の一機は唯佛與佛乃能究盡である、知らんと要せば須らく實參實究

して始めて得べしである、「言猶ほ耳に在り」風外老人は玄機和尚から常々以上の様な、垂誠を受け居られたものと見えて、今此の評唱を讀んで玄機和尚平生の垂誠が思ひ出される、和尚の聲が耳の底に残つて居る様な氣がすると著語せられたのである。

頌曰、臥龍胸次三分計神機睡虎眼邊百步威殺氣請見作家相見處天

伏理能豹陰雲擾擾卒風飛不妨驚天動地地

【和訓】頌に曰く、臥龍の胸次三分の計神機睡虎の眼邊百歩の威殺氣請ふ見よ作家相見の處理能く豹陰雲擾擾として卒風飛ぶ。妨けず天を驚かし地を動かし

【頌】『臥龍が胸次三分の計』諸葛孔明は後漢が亡びて天下甚しく亂れた時に、世を避けて山野に隠れて居つたが、有爲の材であつたから時人之を臥龍と呼んだ、後に劉備が三度其の廬を訪うて其の力を借さんこと請ふたので漸く立つて蜀漢の爲に力を盡したが、出廬以前に己に太下が三分せられて三國時代が現出することを知つて居つた、今僧が家事を打破して牀上に臥して居つた様子は恰とそれに比すべきである、「神機妙算」僧の方寸の中には一場の法戰に就いての作戰計劃がチャンと出

来て居たのである、「睡虎眼邊百歩の威」この句も又僧の力倆を讚嘆したのである、眼中佛祖なき僧の見識は、實に威風凜凜たるものであつて、虎は睡つても百歩の中に群獸を近づけぬ威力があると云ふが、僧の威風には追がの南泉和尚も寄り付くことが出来ぬので、片隅に小さくなつて臥した、併し南泉には南泉の伎倆があつて一步も僧に譲らぬ場合もあるけれども、此場では僧を主位に立てて頷したのであるから徹頭徹尾僧に花を持たせたのである、「殺氣天を衝く」其の物凄いは身の手もよだつばかりであると風外老人も相槌を打つた、「請ふ見よ作家相見の處」サア參學の諸人者、よく／＼作家の漢の出會の様子を注意せられよ、最も注意を要するのは僧が起つて去つた所の所謂這箇の一機である、金石相搏つて火花を散すが如きは兩箇の作家が相見の場合で、殊に南泉が一邊に去つて臥し、僧が起き去つた端的である、「狸能く豹を伏す」狸は僧、豹は南泉である、狡猾にして敏捷な僧は巧に南泉を降伏させた、「陰雲擾々として卒風飛ぶ」擾々は亂れ飛ぶ様子、兩箇の作家が互に祕術を盡して機略を闘はす有様は、恰ど曇雲が簇り起つて亂れ飛ぶ處へ急に暴風が起つて天地晦暝物情騒然たるが如くである、「妨けず天を驚かし地を動かすことを」斯様な大活劇を演出するものも畢竟一人々出身の路」あるが爲である、南泉や僧ばかりの專有物ではない。

第六十三則 藥山陸座の話

藥山儼禪師久不陞座從朝至暮一日院主請曰、大衆久思和尚示

誨不知底如山曰、打鐘著錦上花主聲鐘衆集漢塊山便歸方丈不是怎麼則爭

主隨後曰、和尚既許爲衆說法爲什麼一言不施這擔板漢費山

曰、經有經師論有論師又爭恠得老僧漏逗

【和訓】藥山儼禪師久しく陸座せず朝より暮に至り一日院主請じて曰く、大衆久しく和尚

の示誨を思ふ、如く粟に似たり山曰く、打鐘著、錦上に花主鐘を聲らす衆集る、塊を遣山便ち

歸方丈善知識と稱するを得ん主後に隨つて曰く、和尚既に衆の爲めに說法せんことを許す

什麼として一言も施さざる、この擔板漢、多少の擔板を費やす山曰く、經に經師有り論に論師有り、又た爭

【本則】『藥山儼禪師久しく陞座せず』藥山惟儼禪師は青原下第二世の祖、石頭希遷禪師の法嗣で澧州藥山に住して盛に化門を張つた人である。唐の文宗太和八年に八十四歳を以つて遷化せられた、藥山和尚が或時久しく說法せられなかつたことがあつた、陞座は說法の座に陞ること、「朝より暮に至り、暮より朝に至る」朝から晩まで寝ても覺めても說法の爲通してあるから改めて說法の座へ陞る必要はない、「一日院主請して曰く、大衆久しく和尚の示悔を思ふ」院主は今日でいふ鑑寺とか鑑院とかいふ役で、寺務一切を處理するものである、或日藥山の院主が山主の惟儼和尚に向つて、和尚は久しく垂誠をして下さらぬが、一同のものは大い希望して居りますから是非今日は御願ひ致したいと請ふた、「知らざる底麻の如く粟に似たり」和尚は日用光中説きづめてあるのにそれを知らぬ輩が麻の如く粟の如く頗る澤山集つて居るワイ、藥山の時代でさへさうであつたといふから今日無眼子の漢や無道心の輩の多いも無理はない、「山曰く、打鐘著」藥山和尚はそれでは今日說法をするから鐘を打つて大衆を集めなさいといはれた、言中に院主を試みる氣合があるけれども、此の院主餘り恰憫の漢でなかつたと見えて一向氣が付かぬ様子である、「錦上に花を鋪く毎日現身說法をして居る上に、又改めて陞座せられるのは實に錦の上に花をまいた様ちや、結構なことぢやと擲擲し



放出藥山月
團清光萬
里絕遮欄

た「主鐘を聲す、衆集る」院主はいはれるま、に鐘を鳴らして、大衆を集めた、塊を追ふの漢」狂
 狗塊を追ひ、獅子人を追ふといふ語があるが、薬山が鐘を鳴せといふのは、深い意旨があつてのこ
 とであつたけれども、此の院主は只言葉について廻つて薬山の眞意を會することが出来なかつた、
 「山使ち歸方丈」大衆が集つたら大いに説法せられるかと思ふとさうではなくて其儘サツサと方丈に
 歸つて終はれた、其の歸方丈の當處に八萬四千の法門が事細かに説かれてある、參學のものは此
 の大説法を聞きのがしてはならぬ、「若し是れ恁麼ならずんば則ち争でか善知識と稱することを得ん」
 道がに薬山弘道大師の作略は巧い、それでこそ善知識の尊稱を上ることが出来る、風外老人も讚
 嘆せられる、「主後に随つて曰く、和尚既に衆の爲に説法せんことを許す、什麼としてか一言を施さ
 ざる」院主は到底薬山の眞意は解らぬ、薬山が説法もせずに歸方丈して終つたので大いに驚いて後
 から方丈へついで行つて、貴僧は大衆に説法してやると仰言つたから大衆が集つて居りますのに何
 故説法して下さらぬかと顔色を變へて詰めよつた、此の院主何處までも塊を追ふの漢であるワイ、
 「この擔板漢多少の鹽醬をか費す」全體此の院主は幾つになるのか、い、年をしていつまでも一方
 向の擔板漢でも困るではないかと風外老人甚だ不憫に思はれたものと見える、「山曰く、經に經師あ

論りに論師あり、又争でか老僧を怪み得ん」薬山は院主が餘り無眼子であるから遂に止むを得ず一
 言挖泥帶水に涉られた、經を講義するのは經師の役ぢや、論部を解釋するには論師といふがある、
 おれは佛祖正傳の法を直下承當させるが爲に衆を領じて居る、何も老僧が説法せぬからとて不思議
 なことはない筈ぢや、餅は餅屋、砂糖は砂糖屋、それ／＼専門がある、佛法的々の大意ならば拙僧
 御手のものであるが語を逐ひ解を尋ぬる輩には到底之を會得し得る底の分はあるまいといふ、「遍還
 少からず」薬山和尚頗る御得意の様であるが此の風外の目から見るとぬけ穴だらけぢやと抑へた、
 遍還は洩れ滯るといふ意味、これも例の句抑下の意卓上である。

玄樓曰、薬山老漢龍頭蛇尾、若是蓮藏海待、他道爲什麼一言
 也不施、唯是和聲便打、何故如此、黄金自有黄金價、終不和
 沙賣與人。已足拖泥滯水
 一説ニ甚黄金。

【和訓】玄樓曰く、薬山老漢龍頭蛇尾、若し是れ蓮藏海ならば、他の什麼としてか一言
 も也た施さざると道ふを待て、唯だ是れ聲に和して便ち打たん、何が故ぞ此の如くなる

黄金は自ら黄金の價有り、終に沙に和して人に賣與せず。已に是れ拖泥帶水甚ん

【評唱】「藥山老漢龍頭蛇尾」藥山和尚が説法せずして方丈に歸つた勢はすばらしいものであつたが院主に什麼として一言も施さざるといはれて、經に經師あり論に論師あり争でか老僧を怪み得んと

いふたのは、可措龍頭を蛇尾にしてしまつたのである。「若し是れ蓮藏海ならば他の什麼としてか一言も施さざると道ふを待つて、唯是れ聲に和して便ち打たん」俺ならば斯様な場合に藥山の様な手ぬるい事をしては居らぬ、院主の言下に於いて三十棒を亂下してくれやう、拖泥帶水、爲人落草といふことも結構ではあるが、佛向上の端的を會得せしめんが爲には思ひ切つた荒療治をして一切の妄想の根を斷ち切らねばならぬ、禪門に拂拳棒喝を用ふるは之が爲である。「何が故ぞ此の如くなる黄金は自ら黄金の價あり、終に沙に和して人に賣與せず」蓮藏海ならば聲に和して便ち打たんといふのは、何故であるかといふに、佛法の極意はどこまでも佛法の極意として傳ふれば可い、何も沙を混ぜ水を混じて口に合ふ様にする必要はない、和泥合水せねば生一本の佛法が得られぬといふのは未だ修行が足らぬのであるから今一層實參實究して暮直に佛祖正傳の大法を承當する様に努めしめるが可い、黄金には黄金の價があるから、何も沙を混ぜて強ひて人に賣り付ける必要はないとい

ふのである、「已に是れ挖泥帶水、甚の黄金とか説かん」玄機和尚が斯様に申さるゝも已に挖泥帶水ではないか、公案を集めて評唱したり、頌を作つたりするのも兒を憐れんで自らの醜きを忘るるものであつて、今更黄金には黄金の價があるから砂を混ぜて人に賣り付けるには及ばぬ等といはれた譯ではないではないか、それこそ自家撞着といふものであると、例によつて風外老人遠慮なく師匠を抑へ付けられた。

頌曰、放出藥山月一團、無欠清光萬里絕遮欄、出頭光裏、幾人錯住

覆盆下可暗識、嗟取始得此慇懃認指看若能認得月頭

【和訓】頌に曰く、放出藥山の月一團、無欠清光萬里遮欄を絶す、光影裏を出頭す、幾人か錯つて住す覆盆の下、暗中に識取して、此の慇懃に指を認めて看ることを嗟す。若し能く月頭めて眞指を見ん。

【頌】「放出藥山の月一團」藥山は曾て東山に登つて明月を仰ぎ、呵々大笑した、其の聲遼陽十里に聞えたといふ、此の句はそのことの意味を含んで頌したので、藥山が歸方丈したのは實に一團の明

月を碧空に放け出した様なものである、仲秋三五の月は「無欠無餘」にして一點の陰翳もない如く、藥山の作略は佛法の丸出し眞如の全體露現である、「清光萬里遮欄を絶す」明月の光は皓々として大千世界に照り渡りて片雲纖塵も之を遮るものはない、佛法とか禪道とか、迷とか悟とかいふ様な閑言句も、修行とか證果とか、煩惱とか菩提とかいふ様な思量分別も、此の清光を遮ることは出来ぬ、一切處を照破して細には無間に入り大には方處を絶して居る、「光影裏を出頭する時亦作麼生」併しながら其の清光影裏に我を忘れて夜更しするものも又眞に藥山の月を賞する所以ではない、清光影裏を出頭して始めて眞に藥山の放出した明月を仰ぐことが出来るのであるが、抑も其の出頭底の様子は如何、これ參禪學道の人の知らんとする處であり、又知らねばならぬ所である、「幾人が錯つて住す覆盆の下」藥山の月は大千世界を照して餘す處がないが、覆盆の下に居る處の院主を始め一山の大眾は之を仰ぐことが出来ぬ、歸方丈の當處に於いて藥山の佛法を會取する機用が無いから止むを得ず藥山は經に經師あり等と砂に和して賣與せられたのである、「此の慇懃に指を認めて看ることを嗟す」嗟すは嘆くこと、修多羅の教は指を以つて月を指すが如しとある、如來四十九年の説法は畢竟月を示すの指であるといふ意味であるが、今藥山の歸方丈の垂示も又之に外ならぬ、座下の

大眾は藥山歸方丈の眞意を悟らずして歸方丈といふ事實にばかり執着して説法がない説法が無いと騒いで居る、實に困つたものぢやといふ、「若し能く月頭を認得せば始めて眞指を見ん」藥山の眞意を會したならば歸方丈の端的も又自然に了解せられるであらう、要は直下承當にある。

第六十四則 鏡清放棒の話

鏡清忞禪師問僧曰、近離甚處且要見僧曰、三峰一步即得也清曰、夏在甚處寶劍出篋曰、五峰三步卻清曰、汝出腰亦作一叢林入一叢林放過

【和訓】 鐘清忞禪師僧に問うて曰く、近離甚の處ぞ、且らく脚下を僧曰く、三峰一歩は即清曰く、夏甚の處にか在る、寶劍篋を出づ曰く、五峰、三步卻つ清曰く、汝に三十棒を放す脚跟を斬却僧曰く、某甲過甚の處にか在る、腰も亦た段となり了れり清曰く、汝が一叢林を出で、一叢林に入が爲めなり。一著を放過す

【本則】 『鏡清忞禪師僧に問うて曰く、近離甚の處ぞ』鏡清道忞禪師は青原下七世雲峰義存禪師の法嗣で、玄沙疎山、太原の芋上座等といふ人達と同時代の人である、或時僧に向つて近頃まで何處に



第六十四則 鏡清放棒の話

居つたかと問ふた、これは初めて鏡清に參した僧であつたと見える、師家が初相見の僧に對する時は大抵斯様な問を發する、從來修業して居つた場所を問ふに事寄せて僧の力倆境界を探るのである、「且く脚下を見んと要す」先づ脚下を點檢しやうとするのであらう、師家として當然の處置である、風外老人も贊成せられた、「僧曰く、三峰」此の僧多年諸方の叢林を徧參した喰詰めものと見えて却々惡ずれがして居る、何處とも定つた處をいはずに三峰と答へたのは元來所住なき自由無碍の境界にあることを意味するのである、「一步は即ち得たり」第一歩は成效した、却々巧な挨拶であるが後が續くかな、「清曰く、夏甚の處にかある」それでは今年の夏安居には何處に居つたかと第二問を發した、前箭は尚ほ軽く後箭は深しであるから却々油斷がならぬ、僧は所住なき自由の境界にあることを答へたが、尚ほ脚下に線がありはせぬかと再び勘辨したのである、「寶劍篋を出づ」愈々奥の手を出したぞ、浮乎して笠の臺をはねられぬ用心が肝要ちやと警戒した、「曰く、五峰」前には三峰と答へて今度は五峰と應じた、これも又瓢箪餘の挨拶である、行雲流水に身を任せて、或は三峰に行き或は五峯に還る、悠々として所住なき境界であるから佛眼も覷不見、魔外も窺不能であるといふ、「三步却つて得ず」第一歩は可かつたが第三歩は失敗ぢや、「自由無碍の境界に住著して得々と

して居る様なことでは眞に脚下線斷へて百自由といふ無罣礙の境界とは許されぬぞ、風外老人は抑下せられた、「清曰く、汝に三十棒を放す」今年の夏安居には何處に居つたかと問ふたのに五峰ぢや等と答へる様ではお前も大飯ばかり喰つて諸方の叢林に厄介をかけたヤクザ坊主に過ぎぬ、正に三十棒を喫らはせる必要がある、放すは與へるといふ意の語「脚跟を斬却し了れり」鏡清和尚秘藏の寶劍を振つて僧の脚下の紅絲線を斬り拂はれた、實に鮮かな手ぎはであると賞讃した、「僧曰く、某甲過甚の處にか在る」拙僧は三十棒を喫する様な過はないつもりであります、何處に其の様な罪過がありますかと反噬して來た、三峰だの五峰だのというて居る間は却々融通の利く男の様であつたが、だんく問ひ詰められて到頭尻尾を出して終つた、セメて此處で轉身の作略を示してくれりと可かつたが惜いことである、「腰も兩段と作り了れり」寶劍に斬り拂はれて腰から眞二つになつて終つたと風外老人も哀惜せられる、「清曰く、汝が一叢林を出て、一叢林に入るが爲なり」三峰を出で、五峰に入り、迷を離れて悟に住著したからである、向上に留まるも又これ死漢である、「一著を放過す」鏡清可は即ち可なれども可惜乎一著を缺いたと風外老人は鏡清が言端の跡を拂つて置かれた。

玄樓曰、此僧眞箇有過也否、若謂出一叢林入一叢林是過、

譬如一片雲朝謝天臺暮倚南嶽這裏是什麼所在以爲過若復謂無過鏡清恁麼道意作麼生不見道虎斑易見人斑難見

幸有箇照鏡

【和訓】玄樓曰く、此の僧眞箇に過有りや也た否や、若し一叢林を出で、一叢林に入る是れ過なりと謂はゞ、譬へば一片雲の朝に天臺を謝し暮に南嶽に倚るが如し、這裏是れ什麼の所在ぞ以つて過と爲す、若し復た過無しと謂はゞ、鏡清恁麼に道ふ意作麼生、道ふことを見ずや虎斑は見易く人斑は見難しと。幸に箇の照鏡有り。

【本則】『玄樓曰く、此の僧眞箇に過有りやまた無しや』鏡清は汝に三十棒を放すといはれたが、全體此の僧は眞箇に罪があるであらうか、三峰といひ五峰と答へたのはどうして罪になるのであらうかと、先づ參學の者に向つて穿鑿せられた、『若し一叢林を出で、一叢林に入る、是れ過なりと謂はゞ』或は三峰に行き或は五峰に登りて叢林を徧歴するのが悪いといふならば恰どそれは、『譬へば一

片の雲の朝に天臺を謝し暮に南嶽に倚るが如し』白雲が風に任せて朝には天臺山の頂にかゝり暮には南嶽の峰にかくるゝのが氣に入らぬといふ様なものである、吹く風も無心、飛ぶ雲も無心であるのに、それを過とか罪とかいふのは無心のものに對して愛憎の人情を以つて是非の揀擇をするのである、畢竟鏡清和尚が風なきに波を起したのに過ぎぬ、天台は支那浙江省にあつて智者大師の爲に隋の煬帝が國清寺を建てた處である、南嶽は湖北省にあつて初め惠思禪師之に住し、後六祖の法嗣にして南嶽系の始祖たる懷讓禪師が宗風を擧揚したので有名になつた、禪門に朝には天台に往き暮には南嶽に還るといふ熟語があるから、それを此處に應用したのである、『這箇是れ什麼の所在ぞ以つて過となす』それなれば過は畢竟何處にあるのであらうかと再び學人に參究を促して置いて更に『若し過無しと謂はゞ鏡清恁麼に道ふ意作麼生』若し過が無いとすれば鏡清和尚は何故三十棒を放すといはれたかと半面から問はれた、過の有無を離れ、僧の去來出入を絶して本分の端的を道破して見やうならば、『道ふことを見ずや虎斑は見易く人斑は見難しと』俗にいふ通り虎の斑紋は見易いが人間の斑紋は見難い、これが有無を離れた過の眞相であるといふ、虎は百歩の中へは近づけぬといふ威力を持つて居るものであるから、其の毛色も見分け難い様ではあるが、それでも全く見る

ことが出来ぬといふ譯ではない、然るに人の毛色は如何に平生接近して居るものでも肉眼や知見解會では見分けることが出来ぬ、所謂心意識の運轉を停め念想觀の識量を止めて始めて見得る、鏡清が三十棒を放すといふた端的は實に思量分別を以つては會得することは出来ぬ、過ありといふにもあらず、過なしといふにもあらず、有にあらず無にあらず、非有にあらず非無にあらず、所謂四句を離れ百非を絶したる端的が僧と鏡清との問答往徠の間に示されてある、此の公案に參するものは宜しく其の誦詠を看取すべきである、「幸に箇の照魔鏡あり」幸ひ玄樓和尚が評唱を下したり頌を付したりして參究に便宜を與へられた、これ等は好箇の照魔鏡であるから、之に照して以つて本分の端的に相見するが可いと、風外老人が學人に對して親切に指導せられた。

頌曰、遮莫叢林來去忙勿動著動、罪科未分明、必此相當實罰要、作家自有分明

單傳棒了也、敲出衲僧一肚腸、狼藉不少、卻是和尙腸

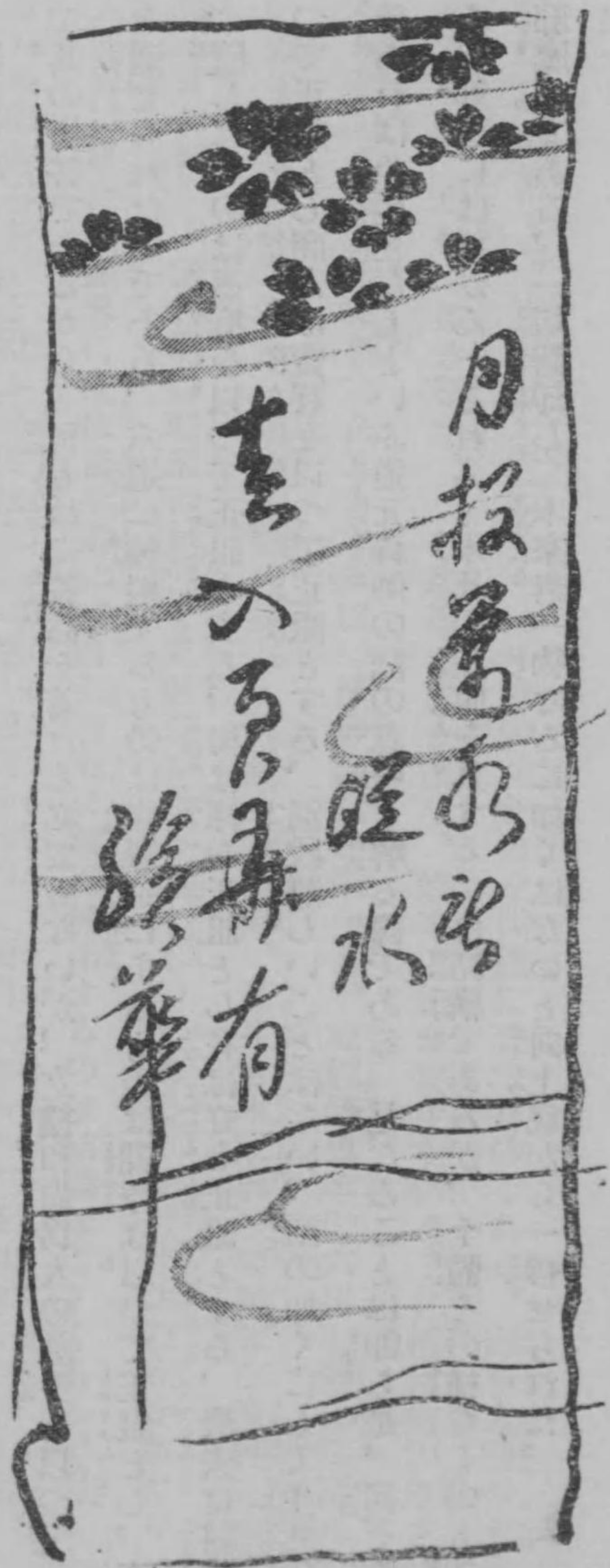
【和訓】頌に曰く、遮莫叢林來去忙はしきを、動著すると勿れ動、罪科未だ必ずしも此に相當らず、賞罰分明なら作家自ら單傳の棒有り、了也、敲き出だす衲僧一肚の腸、狼藉少からず、卻て和尙の腸

【頌】『遮莫叢林來去忙はしきことを』雪蜂和尚は三到投子九至洞山といつて幾度も投子や洞山を訪うて修行せられ、朝には天臺に往き暮は南嶽に還つて南船北馬席温かなるに違がないのは修行底の衲僧の常である、一叢林を出で、一叢林に入るといふがそれは如何程去來出入しやうと別段に過はない、坐つて居るばかりは佛法の本意はないから手忙脚亂甚だ結構である、動着すること勿れ、動着すれば則ち三十棒、サア玄樓和尚が此の様なことをいふたからとてそれでは去來が佛法であるか、救世軍が太鼓を叩いて怒鳴つたり、天理教が笛を吹いて躍つたりするのが禪の意旨に契つて居るのか等と妄想分別してはならぬぞ、些かでも分別に涉れば忽ち本分を失却する、『罪科未だ必ずしも此に相當らず』鏡清は一叢林を出で、一叢林に入るのが過ちやといふ様に申されたが、去來の忙しいのが何も罪過といふ譯ではない、鏡清の語は此の場合當つて居らぬ、然らば罪過は何處に落ち着くのか、一向罪過の落ち着き場が分らぬ、従つて鏡清の眞意が容易に摸索が出来ぬことになる、賊となる人舌頭正しからずといふ語があるが、鏡清の口と心とは全く裏腹であるワイ、賞罰分明ならんことを要す、善惡の標準が不分明であつたり、賞罰の規定が嚴重でなくては、社會の秩序を維持することが出来ぬ、迷悟の邊量が明でなくては佛道修行の上に甚だ不都合である、『作家自ら單

傳の棒あり』正しく學人を提擲し、本分の那人を作る宗師家には、各自三世の諸佛も傳へず歴代の祖師も嗣がぬ處の單傳本具の棒がある、これ所謂本來の面目、箇々圓成の佛性であつて、之は必しも作家のみには限らず、一切衆生が悉く具有する所のものである、「拗折し了れり」そんなものは拙僧は疾に拗ち折つて終つたと風外老人は學人が一物珍重の弊に墮ちんことを懼れてかく一撈せられた、『敲き出す衲僧一肚の腸』作家たるものは單傳の棒を以つて衲僧の肚の中から腸を敲き出して衲僧が心事を了畢したか心事未了であるかを點檢する、要するに此の頌全體の意味は叢林行脚の僧は出入去來常なきものであるけれども、それを以つて罪科の有無を論ずる譯には行かぬ、作家の漢ともいはれる人は本具の棒を以つて學人の腸を露出せしめて其の龍蛇縮素を辨別する、我が鏡清和尚の如きは其の好適例であるといふのである、「狼藉少からず」亂暴なことをせられた、鏡清の手許は大分狂つて居る、「却つて是れ和尚の腸」却つて和尚自身の腸を人に見られて終つた、拙いことをしたものと抑へた。

欠

欠



ち愚痴。是なることは即ち是、何ぞ暗却し去るの好きには如かん。

【評唱】『玄樓抄語の下に於いて答へて曰く、修羅に在りては則ち鬪諍、畜生に在りては則ち愚痴』本則は乾峰和尚の間であるから、之に對して玄樓和尚が自ら答話を着けられた、乾峰の語は問にして其の儘答であるから、何も故に答話を着ける必要もないが、玄樓和尚爲人の慈手を以つて一線路を通ぜられたのである、六道に輪廻するものは修羅道にあるものは鬪諍は以つて正眼とし、畜生道に墮したものは愚痴を以つて正眼とする、柳は緑を正眼とし花は紅を正眼とする、農夫は耕作を以つて正眼とし商人は賣買を以つて正眼とする、別段難しいことはない、斯の如くにして生死の中に佛あれば生生死なしといふ道元禪師の語の意味も解る譯である「是なることは即ち是、何ぞ暗却するの好きには如かん」それ〴〵本具の正眼を具するのは結構であるが、全體その様なものも却つて邪魔物である、一切暗却して本來無一物なるに如くはないと向上底から一撈せられた。

頌曰、輪轉四生六道家、如遊園觀〇不妨
將斯眼目頂門加、日用都如井
投萬水無蹤水、一在猿猴探得
春入百華有驗華、可黃鳥始得

【和訓】頌に曰く、輪轉す四生六道の家、如遊園觀〇妨げず
斯の眼目を將つて頂門に加ふ、
日用は都て井の驢月は萬水に投じて水に蹤なく、猿猴の探り得るに一任す
春は百華に入つて華に驗有り、
黃鳥にして始めて得べし。

【頌】『輪轉す四生六道の家』四生とは牛物の生れ方を四種に分つたのである、即ち人間や犬や猿の如き胎生、鳥類の如き卵生、うじ蟲等の如き濕生、蝶等の如き化生をいふ、玄樓和尚の申された通り輪廻其の儘が本家郷であるとすれば、胎卵濕化の四生も、地獄餓鬼等の六道も變化に富んだ面白い旅の様なものである、「遊園の觀の如し」修羅も本家郷、畜生も本家郷、如何なる境界も本分の田地とすれば、六道輪廻は庭園の景色を見廻つて居る様なものである、「妨げず自在を得たり」或は人間界に或は菩薩界に或は畜生道に、自由自在に輪廻轉生するのは結構なことである、何もそれを迷ちやの苦ちやのと厭ふ必要はない、「斯の眼目を將つて頂門に加ふ」乾峰和尚は什麼の眼目を具すと申されたが、人々斯の一隻眼を頂門に具して、轉生する、卵生となつても濕生となつても、地獄に行つても餓鬼に生れても、乃至は學者になつても實業家になつても、一以つて之を貫く處の佛性

とも至誠とも眞理ともいふ斯の眼目があれば、生る、處皆佛土ならざるはなく、行く處樂天地ならざるはない、「日川は都て井の驢を視るが如し」日川光中の運轉轉動は任運無作で、井の驢を見るが如く驢の井を見るが如しである、井も無心、驢も無心、無心と無心と相對して中に愛憎恩怨の情はない、人々眼目を具すと雖も其の働は無心であつて、境に對して憂喜苦樂の情は生ぜぬ、「瞎」併し其の様な眼目も實は無きに如かずである、思ひ切つて潰して終へといふ、「月は萬水に投じて水に蹤なく」これは任運無作なる本來の面目の活動を形容したのである、皓々たる中秋の月影は、或は山間の溪流に映じ、或は森々たる大海に映じて、物に應じて影を惜まぬが、而かも水に蹤を残さず光に増減はない、映す所の水も無心映さる、所の月も無心である、本來の面目も又斯の如く、或は地獄に生じ或は餓鬼に生じて限りなく轉々するけれども、人にも境にも少しも跡方はない、併し乍ら「春は百華に入つて華に驗あり」で、春來れば梅櫻桃李色とり／＼に咲き出で、己がじ、の装を凝し、百華皆春の來れる驗を顯す、春が花を咲かせやうと思ふでもなく、花が故らに咲かうと思ふでもない、所謂無心の徠來であるけれども、而かも時を違へず形を謬らぬのは實に靈妙不可思議な眞如法性の活用である、第三句の著語「猿猴の探り得るに一任す」手長猿が水中の月影を捉へやうと

するが却々捉まらぬ、猿猴どころか三世の諸佛も歴代の祖師も摸索不著である、摸索が出来れば摸索して見るが可いと風外老人が突放した、第四句の著語「黃鳥にして始めて得べし」百華咲き競ふた所で鶯が妙音を嘯する、其の時こそ任運自然に賑かな陽春三月の光景が現出せられるのである、百華に鶯を添へて春景色が完成する如く、乾峰和尚の示衆に立樓和尚の頌があつて一段の公案が始めて圓成するのである、

第六十八則 雲門三日の話

雲門偃禪師示衆曰、三日不相見、不得作舊時看、作麼生和聲打○

出息 自代曰、千亦是舊時顏

【和訓】 雲門偃禪師衆に示して曰く、三日相見ずんば舊時の看を作すことを得ざれと作麼生、聲に和して便ち打みたりて曰く、千。亦た是れ舊時の顔

【本則】 『雲門偃禪師衆に示して曰く、三日相見ずんば舊時の看を作すことを得ざれと、作麼生』雲門文偃禪師のことは第二十一則でも述べて置いた通り、青原下六世雪峰義存禪師の法嗣である、祖師の傳記を述べる處で青原下南嶽下といふことが屢出するが、これは前にも述べてあつたかも知れぬが茲で一應説明して置かう、禪宗は達磨大師が始めて東土に傳へられたもので、大師を以つて震旦の初祖、即ち支那に於ける禪宗の第一祖とする、それから第六祖の大鑑慧能禪師に到つて南嶽慧讓と青原行思との二神足があり、兩者の系統がいつれ劣らず盛へて、五家七宗の中でも、臨濟宗、潯

仰宗、黃龍派、揚岐派等は南嶽系から出て、雲門宗、法眼宗、曹洞宗等は青原系から出て居る、而して南嶽系の祖師を南嶽下何世と數へ、青原系の祖師を青原下何世と數へるのである、サテ雲門和尚が或時座下の大衆の爲に垂誠せられた、示衆とあるがこゝでは大衆に對して一つの問題を提起せられたのである、三日相見ざれば舊時の觀をなすことを得ざれといふ語の意旨如何といふ問端であるが、萬有は念々刻々の頃も變遷して止む時はない、世間を譯して遷流隔別の義といふ通り、吾等の周圍のものとして變化せぬものはない、日々是れ好日といふが、その一日一日が新しい相を以つて萬有を發現して來るのであつて、支那の古い鼎の銘にも日に新なり日々に新なり云々といふ語が鏤めてあるといふ、一日一日どころか一息一息の間にも新陳代謝の止む時はない、雲門は大衆に向つて其の變遷常なき有様を端的に、ありのまゝにこゝへ持ち出して示めせと言はれたのである、「聲に和して便ち打たん」雲門和尚ともあらうものが三日だの舊時だのと無限の時間に限界を設けて種々と妄想の種を蒔くとは不都合千萬である、山僧當時雲門の傍にあらば聲に應じて痛棒を喫せしめたであらう、「出息入息」出た息が引込まねば人間もそれでお終ひ、世の中は三日見ぬ間の櫻かなどころか一息見ぬ間の命である、「自代りて曰く、千」雲門座下の大衆は師家の問に對して一人も應

じ得るものが無い、皆聲の如く啞の如くであつたので、止むを得ず自ら後始末をせられる、千とは萬有變遷の有様をこの一語によつて言ひ顯はした事である、雲門がセンといつた聲を其の儘文字に當て、此の字を書いたまで、或は遷でもよし或は仙でも可い譯である、千日とか千種類とかいふ數量上の千でないことは勿論、全體文字の相を絶した萬有遷流の端的を道ふのであるから、文字を當て嵌めるのも已に雲門の意旨に契つては居らぬ、昨日とか今日とか、今時とか那時とか、過去とか未來とかいふ時間上の制限を絶した、法界變遷の當相を如實に直指する底の作略であるから、千の字に就いて如何程考へても分別しても雲門の意旨を會することは不可能である、「亦是れ舊時の顔」さういふ雲門和尚の顔には別段變りはない、判り得還り來つて別事無し、元是れ眞壁の平四郎である、舊時の顔は即ち變遷に涉らぬ顔である、變遷がないのではなく變遷を超越して居るのである。

玄樓曰、雲門自賣自買、無得也無失、就中一箇千之字無有能著價者、雖然與麼、昔日恁麼今日不恁麼、何故如此、不見

道不得作舊時看早是著價了也

【和訓】玄樓曰く、雲門自ら賣り自ら買ふ、得も無く也た失も無し、中に就いて一箇の千之字も能く價を著くる者有ること無し、然も與麼なりと雖も昔日は恁麼今日は不恁麼、何か故ぞ此の如くなる、道ふことを見ずや舊時の看を作すことを得ざれと。早く是れ價を著けたれり。

【評唱】『雲門自ら賣り自ら買ふ』雲門和尚は自分で店を出して自分で買手になつてござる、三日相ひ見ずんば舊時の觀をなすことを得ざれといふ小間物店を開いて自分で千といふ價を付けて買つて出られた、『得も無く失もなし』自分で店を出して自分がお客になるのでは損もなく得もないのも道理である、學人を資益すること出來ぬ代りに學人の爲に自己の脚下を窺はれる惧もない、『中に就いて一箇の千の字も能く値を著くる者あること無し』雲門和尚が自分で賣買をせられたが、其の買手の場合と賣手の場合とに就いて見るに一箇の千の字即ち買手になつた時の作略は却々深々の意義があつて傍に居つた大衆達が價を就けることが出來ぬのみならず、三世の諸佛も歴代の祖師も摸索不着である、店を開いたのは放行して示したのであるが、自ら買つたのは把定して收めたのであるか

ら、放行の當處に於いても、擧の如く啞の如くであつたものならば、千の一字に把定した佛向上の端的に價を著くることの出来ぬのは當然である、然も與麼なりと雖も昔日は「慙麼今日是不慙麼」併し乍ら天下人皆値を着けることが出来ぬというて雲門ばかりに威張らせて置くにも足らぬ、此の玄樓が一番價を著けて見やうならば、雲門の千の字、昔はそれで立派に佛法的々の大意が買はれたであらうが物價騰貴の今日それでは賣手が相手にせぬ、「何が故ぞ此の如くなる、道ふことを見ずや舊時の看を作すことを得ざれ」と何故かとなれば雲門の賣り出した素物が舊時の看を作すことを得ざれといふのではないか、昔と今では時代が違ふ、物價は時々刻々騰貴して行く、萬有は念々不停流で常に變遷して停む時はないから、千といふ一語も法の本體に對する永久不變の價ではないというて雲門の答話を抑へたのである、雖然與麼から不得作舊時看までが玄樓和尚の値踏である、「早く是れ價を著け了れり」玄樓和尚見事値を着けられた、併し値を着け了つては最早住着して自由を缺くから此の著語には抑下の意味が籠つて居る。

頌曰、信手拈來一莖茅莫喚作三丈六金身比擬龍泉要撥亂唯是慙麼〇亂在甚處勿謂

故是兒戲述將謂鈍刀不斫骨觸著分明成兩段四

【和訓】 頌に曰く、手に信せ拈じ來る一莖茅喚んで丈六の金身と作すと莫れ龍泉に比擬して亂を撥はんと

要す、唯だ是れ慙麼〇亂謂ふこと勿かれ故と是れ兒戲の述ひ、將に謂へり鈍刀骨を斫らすと觸著すれば分

明に兩段と成る。四

【頌】 『手に信せ拈じ來る一莖茅』雲門和尚は手に信せて一莖の茅を採つて來たといつて先づ雲門和尚が店を開いて自ら顧客となつた一場の作略を頌出した、「喚んで丈六の金身と作すこと莫れ」古人は一莖草を拈じて丈六の金身と作すと言はれたが、此の一莖草は丈六の金身といふ様な一部分の小さいものではない、喚んで一切萬有と爲すも未だ當らずである、「龍泉に比擬して亂を撥はんと要す」龍泉とは楚王の作つた三劍の一である、三劍とは太阿、龍泉、工市で、いづれも名劍として知られて居る、雲門和尚は其の一莖茅を龍泉の名劍に擬し座を下の大衆が抱いて居る一切の妄想煩惱を切り撥はんとせられた、「唯是れ慙麼」只それ丈のことである、別段褒め立てる程のことでもなく感心する程のことでもない、「亂甚の處にか在る」撥ふべき亂が何處にある、大智禪師も元來大地に衆生

なしと申されたではないか、世尊は我と山河大地と同時成道と宣せられた、一切萬有が成道して居るのに何を亂といひ何を撥ふといふのか、「謂ふこと勿れ故是れ兒戲の述と」雲門の作略を一場の兒戲と貶して終へばそれまで、あるが、必しも一概につまらぬこと、泥團を弄するものと斷する譯にも行かぬ、兒戲の如くにして而かも大いに力がある、「將に謂へり鈍力骨を斫らずと」雲門の力はその様な名劍であつたとは知らなかつた、山僧は又鈍力でも骨等は斬れないと思つて居つたと風外老人は女樓の頰を擲擲した、「觸著すれば分明に兩段となる」雲門の作略は龍泉の名劍にも比すべきものであるから、少しでも觸れると忽ち喪身失命する、觸れるとは思量分別に涉ることである、雲門の意旨は斯であらうか彼であらうかと、少しでも計度妄想に涉れば、忽ち有とか無とか、是とか非とかの斷常の二見に墮する、兩段となるといふのは之に喩へたのである、「因」因とは元來力を出す時の掛聲であるが宗師家は學人を警策する時に發する、今風外老人は學人の妄想を斷破する爲に此の聲を發せられたのである。

第六十九則 尙書登樓の話

陳操尙書一日與諸官登樓次小賣見數僧行過一官人曰來者

總是行脚僧量人陳曰不是以威而治焉曰焉知不是違見斬矣陳曰待近來

與勘過也太斯須數僧到樓前浮雲陳驀召上座喚鹿僧皆舉頭望

如梅林陳謂衆官曰不信道錯錯〇傍

【和訓】 陳操尙書一日諸官と樓に登る次で、小賣數僧の行き過ぐるを見て一官人曰く、來る者は總に是れ行脚の僧、面を見て、陳曰く、不是、威を以て治む曰く、焉んぞ不是なることを知らん、勅に違ふは陳曰く、待て近づき來らば與に勘過せん、也太斯須に數僧樓前に到る、浮雲陳驀に上座と召ぶ、鹿を喚んで僧皆な頭を舉げて望む、梅林に驚を陳衆官に謂て曰く、道ふことを信ぜずや。錯錯〇傍若無人

【本則】『陳操尙書一日諸官と樓に登る次で、陳操尙書陳操居士は斐休李翺等と同時代の人で、睦州の刺史となつて居つた時、州の龍興寺陳尊者に參じ、又紀興寺の道明禪師に謁して這箇の一大事を究明した、尙書は官名である、居士は常に僧を見ると先づ齋を供し錢三百を嚙して厚く待遇した、或日大勢の官吏と共に樓閣の上に登つた、少賣弄此の俗物が又下つ端をつれて行つて佛法の小賣でもするつもりであらう、大法を丸出しにして賣れば可いがその様な小利益を食つて何にするつもりぢやと先づ折へた、數僧の行き過ぐるを見て一官人曰く、來る者は總て是れ行脚の僧、時に樓閣の下を二三人の僧が通り過ぎたのを見て、一人の官吏があれは行脚僧であるといふた、言中に響がある、只口から出まかせに言つたのではない、面を見て人を量る、行脚僧といふことかどうして解る顔や姿ばかりを見ては人の本性は見分けられるものではない、變遷常なき現象の表面ばかり見ては永久不變の本體は分らぬ、陳曰く、不是、イヤあれは行脚僧ではないと一官人の放行に反對して陳尙書は把住した、不是の二字を以つて諸官も數僧も樓閣も悉く包括して終つた、威を以つて治む、上官の威勢で押へ付けて終つた、所謂高壓手段を執つたのであるが、併し一同が服従するかナと危んだ著語である、曰く、焉んぞ不是なることを知らん、果せる哉、反噬して來た、英雄の下に弱

眼看東南
心在西北



卒そつなして、此この官吏くわんりも把定はぢやうの一遍ぺんを示しめされて満足まんぞくして居ゐる様な意氣いぎ地無ぢなしではない、平生へいぜい佛法ぶつぽうだの禪ぜん道だうだのといふことを聞きかせてあるから少し位すこゝの力ちから倆りやうは具ぐして居ゐる、不ふ是ぜとはどういふ理由りゆうで申まをさるかや咎とがめたのである、「救ちやくに違ちがふものは斬きらるる」陳ちん操そう尙書しやうしよは此この場合ばあひ主位しゆゐに立たつて居ゐるから一切さいそ其その命いのちに服ふくせねばならぬ、聊聊かでも違ちが背へいすれば忽たちまち喪身そうしん失命しつめいである、「陳ちん曰いく、待まちて、近ちかづづき來きらば與よに勘過かんくわせん」兎とに角近かくちかづいたら本官ほんくわんが一番いちばん勘過かんくわしてくれから見て居ゐなさいといふ、「也やた太ただ緩かん々々」近ちかづいたら勘過かんくわしてやる等なぞと甚はただ悠々ゆうゆうたることを云いつて居ゐる、何故なにゆゑ言下ごんかに接得せつとくしてやらぬのか、勘過かんくわすべきは樓下ろうかを行いく雲水うんすい僧そうではなく、左右さいうに居ゐる官人くわんじん達たちではないかと、これも咎とがめた意味いみである、「斯須しよにして數すう僧樓前そうろうぜんに到たうる」斯須しよはしばらくしてといふ程ほどの意い、兎角とかくして居ゐる間に數すう僧そうは陳尙書ちんしやうしよ等の居ゐる樓閣ろうかくの下したへ差さし掛かつて來きた「浮雲流水うふんりうすい」漂々へうくせん然ぜんとして雲うもの如ごとく水みづの如ごとく風かぜに任せ低ひくきに從したがつて轉てんじ去さる、陳尙書ちんしやうしよ等らが妄想まうそうの種たねとして居ゐるとは夢ゆめにも知らず任運じんうん無作むさくの歩あゆみを移うつして居ゐる、「陳ちん慈じに上座じやうざを召まぶ」陳尙書ちんしやうしよは上うへからイキナリ雲水うんすい達たちに向むかつて上座じやうざ々々々と呼よび掛かけた、「鹿しかを喚よんで馬うまとなす」僧そうを勝手かつてに上座じやうざ等らと喚よぶのは鹿しかを馬うまと喚よぶ様なものである、併しし乍なら鹿しかを馬うまと喚よぶ又また必かならずしも不可ふかではない、元來くわんらい馬うまといひ鹿しかといふも實じつの名なではなく、人間にんげんが勝手かつてに付つけた假名けいみであるからである、

「僧そう皆頭けいとうを擧あげて望ぞくむ」僧そう達たちは喚よべば應おこずる底ていの機川きせんを具ぐして居ゐつた、「梅林ばいりんに鶯うぐひすを聞きくが如ごとし」梅ばい林りんで鶯うぐひすを聞きけば何人なにびとも直たちに耳みみを傾かたむ、都會とくわいの眞中まんなかで狼おほほみの聲こゑを聞きくとは違ちがつて別べつに怪あやしむものはな、「陳ちん衆官しゆくわんに謂いつて曰いく、道だうふことを信しんせずや」陳尙書ちんしやうしよは得意とくいさうに一同どうを顧かへみて、どうだ本官ほんくわんがいふた通り行脚けんかく僧そうではないではないか、所謂いはゆる不ふ是ぜちやといふ眞理まことが解わかつたであらうといふ、僧そう達たちが上座じやうざと喚よばれて頭あたまを上げたのは正まに行脚けんかく僧そうである證據しやうこである、然しかるにそれを尙書しやうしよが道だうふことを信しんせずやといつて不ふ是ぜといふことを改あらためて主張しゆちやうしたのは一寸いちゆん解かいし兼ねかねる様やうであるけれども、要えさするに茲こゝでは行脚けんかく僧そうには用事ようじはない、目前まへの境きやうの爲ために心こゝろを奪うばはれて、行脚けんかく僧そうであるとか無いとかいふことを思量しりやう分別ぶんべつする官人くわんじん達たちを戒いましめたのである、不ふ是ぜといふのは能所のうしよを泯絶みんぜつする語ことばである、我われと行脚けんかく僧そうとを對立たいりつさせて考かんがへる凡夫ぼんぷの妄想まうそうの因いんを斷たげん爲ために不ふ是ぜと示しめされたのである、然しかるに官人くわんじん達たちはいづれも言下ごんかに意いを會あはせることが出来できなかつたので更さらに上座じやうざと召めしたり道だうふことを信しんせずや等なぞと抱泥だうい帶水たいすいせられたのである、風外ふうがい老人らうじんは「錯々さくさく」と陳尙書ちんしやうしよの作略さくりやくを貶へんし又また反對はんたいに「傍若無人ばうじやくむじん」巧たくみな作略さくりやくであると褒ほめた、抑揚おさくは褒貶ほうへん自在じざいである。

玄樓曰、喚則回首方是尋常事、那裏是陳操尙書勘破這僧處、
會麼、善竊者神鬼無測低聲

【和訓】玄樓曰く、喚へば則ち首を回らす、方には尋常の事、那裏か是れ陳操尙書遣の僧を勘破する處、會すや、善く竊む者は神鬼も測ること無し。低聲

【評唱】「喚べば則ち首を回らす、方には尋常の事」喚べば應ずる、叩けば響く、これ世間普通の事である、春來れば百花色を競ひ、秋來れば萬山錦を飾る、別段不思議なことでもなく深い理窟のあることでもない、「那裏か是れ陳操尙書這の僧を勘破する處」尋常茶飯事ではあるけれども天下人は之に對して常に疑着して居る、今陳操尙書は僧を勘破すると言つたが全體どの様に勘破せられたであらうか、陳尙書が天下人の妄想を打拂はんが爲にせられた拖泥帶水の作略を親しく會得し得るものがあるか「會す麼」と玄樓和尚は先づ座下に向つて回光返照せしめて置いて、「善く竊むものは神鬼も測ること無し」と示された、上手な泥棒は警察へでも忍び込む、實に神出鬼没の妙用を持つて居て凡見凡情には窺が付かぬと尙書の作略を讚嘆したのである、「低聲低聲」それも畢竟無用の閑

言句である、陳操の眞意と遠うして遠しであるお止めなされお止めなされと、玄樓の評唱を抑へた。

頌曰、陳操尙書當世權門。端的是賊不亦過譽乎。眼看東南英雄欺人。心腦後。

在西北宜哉人難。打草驚蛇獨犯。

【和訓】頌に曰く、陳操尙書、當世の權門。端的是れ賊亦た過譽ならざる乎。眼看東南英雄欺人を。心腦後。

【頌】「陳操尙書」此の頌は簡潔ではあるが、而かも寸鐵骨を刺すが如き趣がある、先づ第一句に陳

操尙書と一則の主人公を呼び掛けた、「當世の權門」當時に於ける俗間の大勢力家であるのみならず、禪門に於いても計を帷幄に回らし勝を千里の外に制するといふ大機用を具する人であつた、實に「有髮の羅漢」であつたと風外老人も盛に讚揚せられた、「端的是れ賊」陳尙書はテツキリ間違なく人の思量分別を一切奪ひ取る處の大賊である、大智禪師は釋尊のことを瞿曇の白拈賊と詠せられたが、禪門の立場から見れば衆生を濟度して其の煩惱妄想を打破する善知識は皆太平の奸賊である、此の奸賊の御蔭で衆生は妄想袋をスツカリ奪ひ取られて無一物の安樂を得るのである、「亦過譽にあらず

や」陳尙書と釋尊と同じ様にいふのはチト褒め過ぎではないか、「奴は婢を見て慙慙」玄樓和尚も陳操尙書と同道唱和底であるから大層氣が揃つて、恰ど召使同士が互に懇ろにする様に頗る可憐に褒め合はれる、「眼東南を看て」心西北に在り」陳操尙書は樓前を過ぐる數僧が行脚僧であるとか無いとかいふことを論じて居るが、實は其の様なことには用事はない、官人達をして妄想妄念を一切斷じ盡して所對の境の爲に心を動かされぬ様に種々と作略を用ひられたのである、或は不是といひ、或は上座と呼び、又は道ふことを信ぜずや等といふ、いづれも舌頭に骨なく、始より終まで全く鉢を露はさなかつた、斯様な作略を爲す間にスツカリ官人達の鼻孔を奪ひ取つて終つた、實に巧妙な掏兒である、眼看東南の著語「英雄人を欺く」兎角人に將たるものは權謀術數を用ひるものである、禪門の英雄に於いて殊に然りである、「腦後に顛骨を見る」これは頬骨の出張つたことをいふ、斯様な相の人は油斷が出来ぬと昔から傳へられて居る、陳尙書も其のお仲間である、心在西北の著語「宜なる哉人の觸犯し難きことや」道理で近づく人がないと、暗に官人達に伎倆の無かつたことを諷した、「草を打つて蛇を驚かす」玄樓和尚は又この様な公案を擔ぎ出して來るとは實に無鐵砲な鐵砲をやつたものぢやと抑へて結んだ。

第七十則 趙州住處の話

趙州諗禪師到雲居怪物出來居曰、老老大大何不求箇住處見義爲州曰、甚處是某甲住處見孔投居曰、山前有古寺基待賓有禮州曰、和尚何不自住見主愈恭居便休賓主交參又到茱萸勝遊自誇黃亦曰、老老大大何不求箇住處知而故犯州曰、甚處是某甲住處貫之以黃曰、老老大大住處也

不知主柄在手州曰、三十年弄馬騎、今日卻被驢撲殺活之作用、勝夫是大元帥

【和訓】趙州諗禪師雲居趙州諗禪師雲居に到る、怪物出來居曰、老老大大として何ぞ箇の住處を求めざる、義を見て爲に勇む州曰、甚の處か是れ某甲が住處、孔を見て概に投ず居曰、山前に古寺の基あり、賓を待する禮あり州曰、和尚何ぞ自ら住せざる、主を見て愈恭す居便ち休す賓主交參又茱萸勝遊自誇亦曰、老老大大として何ぞ箇の住處を求めざる、知つて故し州曰、甚の處か是れ某甲

が住處一以て之の莫曰く、老老大として住處も也た知らず、三十年馬騎を弄して今日卻つて驢に撲せらる。殺活の作用○勝夫は是れ大元帥

【本則】「趙州の論禪師雲居に到る」趙州從諗禪師は第十一則、第十九則、第四十七則等にも出て居る通り南嶽下三世南泉普願禪師の法嗣で、最も多くの公案を遺した大宗師家である、此の趙州和尚が會て青原下五世洞山良价禪師の法嗣雲居道膺禪師の處へ行つた、古への祖師はいづれも南船北馬到る處の宗師家を訪ふて箇の事の參究に努めたものである、「怪物出で來れり」サア向上とも向下とも迷とも悟とも名の付け様のない怪物が出て來たぞと先づ風外老人は當らず觸らずの挨拶をせられた「居曰く、老々大々として何ぞ箇の住處を求めざる」趙州和尚も可い歳をしてそこらあたりをブラ／＼して居ないで、好い加減に自己の安住所を求めたが好い、本家郷に安住したが可いと早速一棒を喫はした「義を見て爲すに勇む」雲居は流石に作家の漢である、來るものには山色の青きを見せしめることを忘れない、己の盡すべき義務を盡したといふものである、「州曰く、甚の處か是れ某甲が住處」趙州忽ち雲居の語脈裏に轉ぜられて住處だの某甲だのと第二念に涉つて居る、併し向上底からいへば斯様にもいはれるが趙州も多年參じ飽いた衲僧であるから只徒らに雲居の爲に引廻は



後州法戰
孔雄師

故是畫本
真傑出

されて居るの心はなく、住處とは全體何のことであるか、元來吾等には住するとか住せぬとかいふことは無い、金剛經にも應無所住而生其心とあるではないかと一段高い處から雲居に向つて逆襲したのである、「孔を見て振を投す」雲居が一寸と隙を見せたらスカさず概を打ち込んだ、頗る敏捷な作略であると讃めたのである、「居曰く、山前に古寺の基あり」お前はやつと住處を求めぬ氣になつたのか、それでは門前に古寺の跡があるから其處に庵でも建て、住むが可いと住處なき處に住處を示された、山前古寺の基は人々の安住すべき本家郷であるけれども、而かも住不住を超越した境界である、「賓を待すること禮あり」雲居和尚は來賓待遇の禮を心得た人であるから、趙州が住處を求めたらチャンとそれを指定せられた、所謂敲唱相應じたのである、「州曰く、和尚何ぞ自ら住せざる」その様な處があつたら貴僧御自身で住居せられたが可いではないかと更に逆襲を試みた、拙僧は本家郷等といふ處には用事はござらぬと向上の樂處にも留まらぬ意氣を示した、併し乍ら可惜乎趙州はまだ住處といふ語に捉はれて居る、「主を見て愈恭す」趙州も又禮を知つて居るから主人に遇ふては愈禮儀を厚うした、那人と那人の出會は互に腹の底の探り合であるから禮儀の厚いのが却つて薄氣味が悪い、「居便ち休す」雲居は趙州が應無所住而生其心の端的を道破したのに満足して其儘引込

んで終つた、剛に遇つて柔の作略を示したのである、「賓主交參」此の一場の商量、よく賓主互換の機用を現じて佛法の蘊奥を露堂々ならしめた、「又茶葉に到る」趙州は雲居をマンマと凹ませたつもりで得意になつて更に茶葉和尚の處へ出掛けた、茶葉はどういふ人であつたか傳記が詳かでないが、此の問答振を見るとこれ又作家の漢であつたに相違ない、「勝遊自ら誇る」勇士の武者修行の如く、到る處の道場で己の技倆を露はす、さぞかし愉快なことであらう、「莫亦曰く、老々大々として何ぞ箇の住處を求めざる」茶葉和尚も雲居と同じ様な挨拶をせられた、お前は長者の子でありながら其の様に他國を踏躡して歩いて居るとは氣の毒千萬なことである、何故一刻も早く本家郷を求めぬのかと誠めたのである、「知つて故に犯す」拙者はそれは承知して居るが乞食を三日すれば忘れられぬといふ通り好んで他國を踏躡して居るのですと趙州に代つて風外老人が一著を下された、「州曰く、甚の處が是れ某甲が住處」趙州も又雲居に對すると同様の態度を取つた、住處とは抑も何でござるか、念々不停流が世間の真相であるのに、何者が住し何者が住せしめるかといふ手酷しい逆襲である、「一以つて之を貫ぬく」趙州の態度は終始一貫して居ると其の應對振を賞讃した、「莫曰く、老々大々として住處もまた知らず」茶葉も又雲居と同じ武器を把つて趙州を攻めつけた、善い歳を

して自家の安住所も知らぬとは言語同断である、脚下を照顧して見よ、本家郷は遠い處にあるのではないぞと言はぬばかりの挨拶である、「主柄手に在り、茶英和尚は自ら主位に立つて來問を辨せられた、流石に不動着な確乎した處がある、州曰く、三十年馬騎を弄して今日却つて驢に撲せらる、これが趙州の轉身の一路である、茶英に逐ひ詰められて巧に一條の血路を開いたのである、三十年以來馬術の練習をして居つたが、今日は却つてつまらぬ驢の爲に蹴落された、残念至極なことであると、住とも不住とも言はぬ處に自由無碍の作略がある、「殺活の作用」驢馬が却々殺活自在の妙用を具して居るから油断はならぬ、併し此處では「勝夫は是れ大元帥」騎手が特技を有する大將軍であるから賓主交參が立派に行はれた。

玄樓曰、山前有古寺基、荆棘參天、老老大大住處也不知、門深似海、和尚何不自住、騎賊馬追賊、三十年弄馬騎、今日卻被驢撲、未嫌伎倆不如人、若是蓮藏海直下縛殺他脚跟、今日卻甚處是某甲住處、便答道勿隨他求、一不定 二不是

【和訓】玄樓曰く、山前に古寺の基あり、荆棘天に參はる、老老大大として住處も也た知らず、門深うして海に似たり、和尚何ぞ自ら住せざる、賊馬に騎つて賊を追ふ、三十年馬騎を弄す今日卻て驢に撲せらる、未だ嫌はず伎倆の人に如かざるを、若し是れ蓮藏海ならば直下に他の脚跟を縛殺せん賊過後后を張る甚の處か是れ某甲が住處、便ち答へて道はん他に隨つて求めること勿れ。一不定 二不是

【評唱】『山前に古寺の基あり、荆棘天に參はる』雲居和尚が趙州に對して最後に下された山前に古寺の基ありといふ一著は、明かに本家郷の所在を示したのである、併し乍ら玄樓の目から見れば此の本家郷は荆棘天に參はつて容易に脚を踏み込むことも出来ぬ、聊かでも思量分別や知見解會の閑妄想を扱さんでは山前の古寺中には一步も進むことは出来ぬ、『老々大々として住處も也た知らず、門深うして海に似たり』雲居和尚も茶英和尚も趙州の來問に對して最初に老々大々として云々と言はれたが、いづれも其の意旨は深々たる大海の如く其の底を窺ふことが出来ぬ、兩和尚の意旨を會せんと欲せば須らく實參實究して初めて得べしである、『和尚何ぞ自ら住せざる、賊馬に騎つて賊を』

追ふ趙州も又さるものであるから雲居和尚が住處を示された其の語を逆りに利用して和尚に迫つた、其の作略は實に敵の刀を奪つて敵を討つ様なもので、極めて敏捷な痛快なものであつたと今度は趙州を讃めた、「三十年馬騎を弄す今日却つて驢に撲せらる、未だ嫌はず技倆の人に如かざることを」女樓和尚は重ねて趙州を賞讃せられた、三十年馬騎を弄す云々といふたのは伎倆の人に如かざるを自白したのであるが、それは毫も耻づるには及ばぬ、人々箇々其の特色がある、騎馬に拙なものは歩兵になるが可し、電氣のことに經驗のあるものは電信隊に入るが可い、兎に角伎倆の人に如かぬことを正直に告白したのは頗る面白い、「若し是れ連藏海ならば直下に他の脚跟を縛殺せん」併し乍ら雲居も趙州も茶葉も共に住不住の處に執着して居つて眞に自由無碍の活作略を得たものとは許し難い、若し此の女樓ならばイキナリ對手の脚をふん縛つて身動きの出来ぬ様にしてくれたであらうと女樓和尚自ら主位に立つて三軍を指揮する態度を取られた、風外老人は一寸此處へ嘴を挿んで「賊過ぎて後弓を張る」女樓和尚その極に力まれてももう後の祭りや、疾の昔法戦は濟んで居ると擲擲した、「甚の處が是れ某甲が住處、便ち答へて道はん他に随つて求むること勿れと」趙州は雲居和尚等に某甲が住處は何處でござるかと思ねたが、自分の住み場所を他人に尋ねるといふことは無い、

人々一座の補陀山である、他の鼻を借りて鼻がす他の口を借りて喰はず、それ／＼自分の脚で歩き自分の手で働いて居る、即ち人々各自に己に本家郷に住んで居るから、今更他人に本家郷の所在を尋ねる必要はない、「一不定二不是」女樓和尚種々と拈弄せられたが要するに賊過後の張弓は何の役にも立たぬ、閑葛藤を何時までひねくり廻して却つて妄想を増長するばかりである、第一の著語も第二の著語も皆無用の閑家具であると風外老人は先師の作略を一括して抑へて終つた。

頌曰、此翁饜爍未曾衰何不與藥去○住處胡求休又嬉即今在甚處○追

賊正當騎賊馬達飯飯偽降端的豎降旗達茶一機泯跡鬼神訝不妨

地變態應時陵谷移佛眼亦故是叢林真傑出人人分上幾將法戰犯雄

師達佛殺佛達

【和訓】頌に曰く、此の翁饜爍未だ曾て衰へず、何ぞ藥を與へ去らざる○住處胡を求めん休して又た嬉しむことを、即今其の處にか在る○賊を追ふ正當賊馬に騎る、飯に逢うて降を僞る

端的降旗を豎つ、茶に逢うて一機跡を泯じて鬼神訝る、妨げず天を驚かし、變態時に應じて陵谷移る、佛眼も亦た觀れども見えず、故是れ叢林の眞傑出、人人分上曾て欠りず、幾くか法戰を將つて雄師を犯す。佛に逢ては福を殺す○嘆

【頌】『此の翁鏝鏝として未だ曾て衰へず』鏝鏝は老ひて益盛んなる様子をいふ、趙州は八十歳に至つて東西に行脚せられたといふことであるが、實にいつまでも衰へぬ叢林の豪傑僧であるわいと先づ讚嘆の一句を冒頭に置かれた、「何ぞ藥を與へ去らざる」鏝鏝たるのも又一の病である、迷が病ならば悟も又病であるから、悟の病に對しても又藥が必要である、「諸仁者平安なりや否や」趙州のことは暫く置き風外座下の諸人者迷悟いづれかの病に罹つて居りはせぬか、脚下照顧が肝要であるぞといふ警戒である、「住處胡ぞ求めん休して又嬉しむことを」趙州和尚は壯健な癖に住處を求めて安樂に骨休めをしやうとする様であるが、それは甚だ矛盾といふものぢや、一生不離叢林で、人々皆暫くも修行を休歇すべきでないのに、何故に住處を求め休することを冀ふのかと一應は咎めたが、眞意は本家郷を求めんとすることに賛成したのである、「即今甚の處にかある」人々脚跟下が已に黃金の地である、即今皆佛境界に住して居るではないか、然るに尙ほ雲居に行き茶英に行いて住處の

相談をした處で「什麼の了期があらん」何時になつても限はない、牛に騎つて牛を尋ねる様なものであると頌に調子を合せた著語である、「賊を逐ふ正當賊馬に騎る」甚の處か是れ某甲に住處といひ、又和尚何ぞ自ら住せざるといふたのは敵の武器を奪つて敵を討つといふ作略である、趙州は機に臨み類に應じて自由の作略を用ひる所謂英靈の漢であるから、雲居も茶英も却つてその手中に翻弄せられる、「飯に逢うては飯を喫す」柔に遇うては剛、剛に遇うては柔、時の宜しきに随つて取るべき手段を取る、趙州は實に恰悌の漢であると風外老人も同じく讚嘆せられる、「降を僞る端的降旗を豎つ」趙州が最後に三十年馬騎を弄して今日却つて驢に撲せらるといふたのは、茶英との太刀打ちに敗を取つて、降參の白旗を豎つたのであるけれども、其の實茶英を陥罪へ誘ひ込んで自らは巧に身を轉じた機用な働であつて、風外老人の所謂「茶に逢つては茶を喫するものといふべきである」「一機跡を泯じて鬼神訝り」「變態時に應じて陵谷移る」變幻出没應化自在の妙用は所謂沒蹤跡斷消息であつて、鬼神と雖も其の蹤跡を摸索することが出来ぬ、賊を追ふたり降旗を建てたり、或は陵を谷となし谷を陵として、佛眼も覷えず魔外も窺ふことが出来ぬ有様は、作家の宗師、恰悌の漢といふべき人達の境界であると、趙州雲居茶英の三人を引くるめて讚嘆したのである、「妨げず天を驚かし

地を動かすことを「實に驚天動地の大活動といふべきである、斯様な自由も本分に安住した人としては別段不思議なことではない、佛眼も亦戯れども見えず」電光の如く石火の如く、佛眼を以つても容易に見定めることが出来ぬ程に敏捷であると重ねて讃嘆する、「故是れ叢林眞傑出」趙州和尚は古叢林の禪僧中でも殊に傑出した大機大用を具した人であつて、雪竇和尚も常に老趙州老趙州といつて重んぜられた、趙州和尚は六十一歳で初めて發心し、苦修練行すること二十年、八十歳にして初めて趙州城東觀音院に住し、百二十歳にして遷化したといふ稀有の老古錮であつたから玄樓和尚も特に賞揚せられたのである、「人々分上會て缺かず」眞の傑出たるべき資質は趙州の専有ではない、人々分上のたかに備はつて居る、唯だ道元禪師の申された通り、修せざるには現はれず、詮せざるには得ること無しである、「幾か法戰を將つて雄師を犯す」趙州和尚は斯様に老いて益盛んなる人であるから、師を尋ね道を訪うて問答商量し、雲居茶英はいふまでもなく、三世の諸祖も歴代の祖師も悉く兜を軍門に脱いで降を請はしめる、問答商量とは師家と學人とが相對してすることばかりではない、飯に遇うては飯を喫し、茶に遇うては茶を喫する、皆これ問商量である、人々自己本具の老趙州は舉足下足平生常に雄師を犯して居る、「佛に逢うては佛を殺し祖に逢うては祖

を殺す」隨所に主となつて毫も他に譲らぬ、眞傑出の老趙州は此の際主中の主となつて居る、併しかく類するも畢竟一場の懺悔であるから閑言句に執着して妄想するなど「映」の一語を以つて上來言句の跡を拂つた。

第七十一則 雲門家風の話

雲門偃禪師、因僧問曰、如何是和尙家風入門須先看額 門曰、門外有

讀書人、報來誰元來是 個老先生

【和訓】 雲門偃禪師、因みに僧問うて曰く、如何なるか是れ和尚の家風、門に入らば須らく門曰く、門外に讀書の人あり、來ると報す。誰か知らん元來是れ個の老先生。

【本則】 「雲門偃禪師、因に僧問うて曰く、如何なるか是れ和尚の家風」 雲門文偃禪師のことは第六十一則にも第六十八則にもある通り雲峰養存の法嗣で雲門宗の始祖である、或僧が雲門和尚に向つて貴僧の家風は如何なる様子でありますかと問ふた、雲門宗の宗風に就いては後世の人が種々と説明をして居る、法眼の十規論には「韶陽は則ち函蓋截流云々」といふて居る、又天眼目には「衆流を截斷して凝議を容れず、凡聖路無く情解通せず云々」とある、隻手よく堤塘を決して一氣に奔流せしめる様に、一切の疑團を碎破して忽然大悟せしめるのが雲門の學人接化の手段である、今僧

が問ふたのは斯様な爲人接衆の仕振ではない、雲門日常の行住坐臥本地の風光を問ふたのである、門に入つては先づ額を見るべし師家に參じては先づ其の家風を知ることが肝要である、此の僧は人を訪ふ禮儀を心得たものであつたと見えて其の進退が法に叶つて居る、門曰く、門外に讀書の人あり來ると報す、僧が大上段に太刀を振りかぶつて眞向から雲門の素首を切り落さんと身構へたのを見て、雲門和尚は忽ち身を轉じて軽く其の脚下を横から拂つた趣である、貴僧の家風は如何でありますかといふ問に應じて、アレ／＼門外へもう夜學の連中が來た様ぢやと、取つても着かぬ挨拶をした、家風とも無家風とも、佛法とも禪道ともいはぬ所に大いに力がある、若し僧がドレ何處に等と聞耳を立てたりすれば忽ち蹉過して終ふ、所謂白雲萬里の隔を生ずるのである、併し讀書の人は門外にのみ來るのではない、人々脚跟下に讀書の人ありて常に面門に向つて出入して居るけれども、凡見當見を以ては見れども見えず暗昏々である、されば各自自家屋裡の讀書人に相見するところが肝要である、誰か知らん元來是れ箇の老先生なることを門外に居るのは夜學の學生ではない、立派な老先生である、人々悉くこれ一箇の老先生であつて、他に就いて學び他の力を假つて知るものではない、雲門の語に轉せられて他方見ばかりせず、回光返照して眞箇和尚の家風を會せねば

ならぬぞと誠めた著語である。

玄樓曰、雲門正恁麼家風、法堂上荒草恐棲毒蛇幸免來賓

【和訓】玄樓曰く、雲門正恁麼の家風、法堂上の荒草恐くは毒蛇を棲ましめん。幸に來賓の多きと

を免る。

【評唱】『雲門正恁麼の家風』雲門和尚は僧に家風を問はれて極めて高尚幽玄な家風を示されたが、

『法堂上の荒草、恐くは毒蛇を棲ましめん』期様に高い道理を示されては何人も近づくことが出来ぬ、それ故法堂上には妄想煩惱の雜草が茫茫と生へて、或は學人を生死流轉の道へ引張り込む所の毒蛇が棲んで居らぬとも限らぬ、門外に讀書の人あり、來ると報ずといふ一語は没蹤跡斷消息の境界で、計度分別を以つては到底窺ふことは出来ぬ、若し誤つて妄想すれば忽ち毒蛇の窟中に陥つて自由を失つて終ふであらうと玄樓和尚は通俗的に評唱せられた、幸に來賓の多きを免がる「荒草茫茫であるから幸ひ訪問客も無い、佛向上の道理を端的に示されたので、種々と思量分別を下すものも無いのは却つて好都合であつた、若し向下却來して爲人の作略を用ひる時は、彼カ斯卡と思量分別して

生死流轉の因を作るものが益々多くなつたことであらうと風外老人も又穩かな著語を下された。

頌曰、恠力亂神不敢談誰制汝○更門風兀爾似癡憨大尊比來這老

困無事莫謂是無事聊爲書生下換却人眼指南晴○

【和訓】頌に曰く、恠力亂神敢て談らず、誰か汝を制す○更に這門風兀爾として癡憨に似たり大尊比來這の老無事に困じて、謂ふと勿れ是れ無聊か書生の爲に指南を下す。人の眼睛を換

貴生却す○

【頌】「恠力亂神敢て談らず」孔子は恠力亂神を語らずと云うて世間の道德ばかりを説いて居つたが、儒道の輩も其の遺風を守つて日常生活上の規矩準繩に拘泥して居る、佛法の上からいふ時はこれ所謂第二第三の向下門であつて、人天の爲に止むを得ずして用ひる處の挖泥帶水の作略であるけれども、我が雲門老漢は屢々斯様な手段を用ひられる、此の頌は雲門の作略を儒家の學者の道學を説くに譬へて詠じたものである、「誰か汝を制す」恠力亂神を語るなど誰か制したものがあつたのか、佛法上には決して談つて悪いこともなく、又談ることを禁制するものも無い筈である、一寸玄樓の頌意を抑へた、「更に這の什麼の事を謀る」恠力亂神を語らぬとならば何事を相談するのか、雲門

和尚は法幢を樹て宗旨を立して、徒らに雲兄水弟に大飯を喰はせて置くばかりでもあるまい。「門風
 兀爾として癡惑に似たり」雲門和尚の家風は巖石の兀々として屹えた様で、極めて痴鈍な活氣の乏
 しいものである、五倫だの五常だのと卑近な道徳を説いて得々として居る、而かも其の態度は「大
 尊貴生」頗る尊大なものである、門外に讀書の人あつて來ると報ずといふ一語は瓢箪で餘を抑へる
 様な摸索不着底の答であるけれども、それでも女樓和尚は尚ほ第二第三の捻泥帶水であるとし、兀
 爾として癡惑に似た道學先生の倫理談に暨へて頌せられた。併し抑下した語の底には卓上の意味が
 含まれて居ることも見て取らねばならぬ。「比來這の老無事に困じて」聊か書生の爲に指南を下す」
 雲門和尚は兀爾として何の働もない木強漢の様であつたけれども、餘りの無聊に苦しんで學人が家
 風を問ふたのを幸に一線道を通じて示された、上下を對應して説明すれば兀爾似癡惑は向上の境界
 に安住する趣、爲書生下指南は向下却來の面目である、「謂ふこと莫れ是れ無事と、電捲き星飛ぶ」
 女樓和尚は雲門の境界を無事に困すと頌せられたが、どうして無事どころか常に電捲き星飛ぶ大活
 劇を演じて居る、「只見れば何の苦もなき水鳥の足にひまなき我思かな」である、「人の眼晴を換却
 す」書生の凡眼を豁開して聖眼となした、凡眼と聖眼とは是れ同か是れ別か「咄」妄想してはならぬぞ。

第七十二則 保壽背坐の話

趙州到保壽殺氣陰陰壽見來便背面而坐引敵千重地○州便展坐具偽走三

其備不亂 壽便起歸方丈伏兵皆起○江州收坐具便下去逆不能勝則退而堅守

【和訓】 趙州保壽に到る殺氣陰陰 壽來るを見て便ち背面して坐す、敵を千重の地に引しつて坐す、
 を展ぶ、偽つて走ること三十里○其の備へ亂れず 壽便ち起つて方丈に歸る、伏兵皆起る○江上晩 州坐具を收めて便ち
 下り去る。進んで勝つ能はざるときんば則ち退いて堅く守る○流人一獲を被り得て歸る

【本則】 『趙州保壽に到る』これも趙州が行脚時代の出來事である、保壽は當時の作家であつたが、
 殺佛殺祖の勇ある趙州は如何なる雄師をも假措することなく敢て犯した、「殺氣陰陰」戰機正に熟し
 て三軍肅然たるが如き有様である、「壽來るを見て便ち背面して坐す」此の一則是凡て無言の作略で
 あつて、趙州と保壽とが互に虚實を盡して禪機を戦はしたのである、保壽は趙州の來るのを見ると
 早速クルリと背を向けて坐禪をした、佛法とか禪道とかの話仕掛けられぬ中に無言無説無示無聞

の端的を身振で現したのである、「敵を重地に引く」計略を以つて敵を重圍の中に引きよせた、背面して坐する所に何か深い意味があるのであらう等と聊かでも分別に涉れば即ち陥穽に墮ちるぞ、「落日塔影長し」、併し乍ら兎に角保壽の作略には深長な意味がある、谷深ければ杓柄長く、日低ければ塔影も長い道理で、來問の伎倆に應じて應答の作略にも相違がある、保壽は豫て趙州の恰懶の漢なることを知つて居つたので其の姿を見ると直ちに向上の作略を示したのである、「州便ち坐具を展ぶ」趙州もさるもの、保壽の態度を見ると早速坐具を展べて禮拜の川意をした、展坐具三拜は參師問法の禮儀であるから、趙州は思量分別に涉らず、己の爲すべきことを爲したのであるが、實は互に脚下の睨み合で一點の際も無い、「僞つて走ること三十里」那人と那人の出會であるから掛引が激しい、保壽の背面而坐に會つて忽ち勘破せられたと見せかけたが、其の展坐具にも大いに意味がある、浮乎後を逐ふと辛い目を見るぞ、「其の備亂れず」進軍退却一絲亂れざる用兵振は追がに七百甲子の老趙州であると、風外老人は趙州の作略を讚嘆したり學人を警戒したり、中々忙しいことである、「壽便ち起つて方丈に歸る」保壽和尚はスツと立つて方丈に歸つた、趙州が大手から攻め寄せて一ともみに揉み潰さうとしたのを、搦手から巧に外して終つた所は、これ又戰場往徠の古武者でな

壽公方有轉身
術閑卻趙州
陷虎機



ければ出来ぬ藝當である、歸方丈は實に巧妙な轉身の作略であつた。「伏兵皆起る」果して伏兵が起つた、歸雁行を亂るに氣が着かぬと飛んだ目に遇ふ所であつた。「江上晚來畫くに堪へたる處」保壽の作略は江上の夕景色に似て極めて鮮かなものであると風景に擬して讚嘆せられた。「州坐具を收めて便ち下り去る」趙州は坐具を收めて辭し去つた、一出一入、一進一退、響の聲に應ずるが如く、影の形に隨ふが如く、兩人の作略は敲唱相應じて少しも抜け目がない。「進んで勝つこと能はざれば退いて堅く守る」進むも退くも時の宜しきに契つて居る。「漁人一蓑を被し得て歸る」趙州といふ漁士は雨に遇つて蓑を着て歸つた、任運無作、毫も妄想分別を容れぬ往徠は實に風流なものであると風外老人又風韻ある文字を假つて著語せられた、一則の要領をいつて見れば、保壽が背面而坐で佛法的の意旨を示すと、趙州が展坐具で合點々々をする、そこで保壽が歸方丈して公案の圓成したことを告げ、趙州が收坐具して爲作造作の蹤跡を拂つて後始末をしたのである。

玄樓曰、趙州之展坐具、保壽之歸方丈、具道是甚道理、諸仁者
 卻會麼、山僧敢道不是趙州不可得診候保壽死活、不是保

壽焉能識破趙州賊意、要知作家相見事、直須具這般大眼
 目始得 太平談柄

【和訓】玄樓曰く、趙州の展坐具、保壽の歸方丈、且らく道へ是れ甚んの道理ぞ、諸仁者卻つて會すや、山僧敢て道ふ是れ趙州にあらずんば保壽の死活を診候することを得可らず、是れ保壽にあらずんば焉んぞ能く趙州の賊意を識破せん、作家相見の事を知らんと要せば、直に須らく這般の大眼目を具して始めて得ん。 太平の談柄。

【評唱】「趙州の展坐具、保壽の歸方丈、且らく道へ是れ甚の道理ぞ」趙州の展坐具にも、保壽の歸方丈にも深々微妙の道理が籠つて居る、兩者共に他の脚下を點驗せんとする探竿影草であるから、浮乎之に觸れる時は忽ち喪身失命を免がれることは出来ぬ、「諸人者却つて會す麼」サア參學の諸大徳、趙州や保壽の意旨を何と會得が出来たか、會したと思つた時は已に本分を失却して居る、會といふも不會といふも已に一物珍重の弊に墮するのであるが、さればとて這般の消息全く道破することが出来ぬ譯のものでもない、風外老人が本則に「江上晚來畫くに堪へたる處、漁人一蓑を被し得

て歸る」と著語したのは其の一例である、立樓和尚も又自己の力倆を以つて次に這般の道理に對して一線道を通せられた、「山僧敢へて道ふ、是れ趙州にあらすんば保壽の死活を診候することを得べからず、是れ保壽にあらすんば焉んぞ能く趙州の賊意を識破せん」これが立樓和尚の見處である、趙州と保壽とは證契即通の間柄であつて、趙州にして初めて能く保壽の死活を知ることが出来、保壽にして初めて能く趙州の腹の底を看破することが出来るのである、兩面の明鏡相對して中に影像なきが如く、趙州と保壽との間には一絲毫を容るべき餘地も無い、這箇一雙の英靈の境界は、函蓋合し箭鋒柱ふとでもいふべきである、「作家相見の事を知らんと要せば、直に須く這般の大眼目を具して始めて得べし」作家の漢、大悟底の那人同士が相見する場合は眞相を知り、佛境界の往來の様子を識らんと慾せば、趙州や保壽の如き互に他の脚下を看破し腹の底を見透す様な大眼目を具すべきである、然すんば他の言句作略に轉ぜられて永劫に本家郷に安住することは出来ぬ、「太平の談柄」趙州や保壽は互に禪機を闘はし眞劍勝負をして居るが立樓和尚は香氣さうに相見の事だの大眼目だのと空見識を並べてござる、太平樂なものぢやと風外老人は擲論した。

頌曰、一局窓前論死活黑石與黑石相闘深謀密策共相圍非別人所見壽公方有

轉身術錯指閑卻趙州陷虎機還知那一手

【和訓】頌に曰く、一局窓前死活を論じて、黒石と黒石と相圍む、深謀密策共に相圍む、別人の所見壽公方に轉身の術有り錯指閑卻す趙州陷虎の機還知那一手

【頌】「一局窓前死活を論じて、碁を圍むことに因んだ語を以つて頌したのである、窓前の明い處で趙州と保壽との兩碁客が鳥鷲を闘はして互に死活を争つて居る、いづれも作家の漢同士の出會であるから却々勝負が決せぬ、恰と黒石と黒石と相圍むるが如くである、黒漆の崑崙夜裡に走るといふ様な譯で、殆ど敵身力のけじめも付かぬ、「深謀密策共に相圍む」各人上手の勝負であるから一石でも無駄には打たぬ、或は敵を重地に引き、或は瀉つて三十里を走り、進んで勝つ能はずんば退いて堅く守るといふ様に、神出鬼没縦横自在に策略を用ひて相圍んで居る、背面而坐と打てば展坐具と遁け、歸方丈と延びれば收坐具と切るといふ鹽梅に祕術を盡して戦ふ様子は實に風外老人が著語せられた通り「別人の所見にあらす」である、唯佛與佛乃能究盡といふ語があるが那人同士の問答

往徠の真相は全く餘人所見である、「壽公方に轉身の術あり」一人つゝに就いて特に見立つた點をいへば、保壽和尚は巧に趙州の圍を切り開いて石を生かした、所謂轉身の妙用を現はした、敵の重圍に陥りながら出身の血路を開いた所は實に作家の漢たるに恥ぢぬ、「錯つて指註す」かやうに玄樓和尚は説明をせられたが可憐平的を外れて居る、要らぬ註釋を如へて却つて自分の不見識を曝露せられた、「閑却す趙州陷虎の機」趙州和尚は又陷虎の機を設けて保壽を陥れやうとした、其の作略は頗る巧妙なものであるが、保壽和尚はそれに引か、らなかつた、閑却して折角の陷穽を役に立たなかつたのは保壽の働であるといふ、頭の文字の上からいへば主として保壽を賞揚して居る様であるけれども、玄樓の眞意は一に甲乙を付けず、各自特色のある趣を示したのである、「還つて那の一手を引るや」サテ諸人者、其の勝敗を決する大切な一手を知つて居るか、神謀鬼策を如何に巧に應用しても決勝の一手を誤れば萬事休である、那一手とは作廢生、これ學人の參究を要する處である、例に依つて風外老人は著語を以つて回光返照を慇懃して結ばれた。

第七十三則 雪峯喝出の話

雪峯存禪師、因有僧禮拜可作仁 峰打五棒現成 僧曰、過在甚處

不知恩漢 峰又打五棒喝出叮嚀

【和訓】 雪峯存禪師、因に僧有りて禮拜す、可作仁 峰打つこと五棒、現成 僧曰く、過甚の處にか在る、恩を知らざるの漢 峰又た打つこと五棒喝出す叮嚀は徳を損ず。

【本則】 「雪峯存禪師、因に僧ありて禮拜す」雪峯義存禪師のことは第二十三則第二十六則等にも見えて居る通り青原下四世徳山宣鑑禪師の法嗣で、唐の感通年中雪峯山に院を創して雲水を接得し、座下常に一千五百の參學が棲つたといふ、就中、雲門、玄沙、長慶、保福等は鐵中の錚々たるものである、或時一僧が雪峯和尚の前へ来て禮拜した、其眼の衲僧ならば此の禮拜に大に意義があるから、雪峯老漢と雖も却々油斷のならぬ處であるけれども、此の僧別に深い金があつた譯ではなく、只朝晩の挨拶をしたに過ぎぬと見えて、雪峯の爲に五棒を喫せしめられてから急に驚いて過甚の處

にある等と間の抜けた挨拶をして居るのである、「可作仁可知禮」支那では小供に、上大人、丘乙己、化三千、七十子、彌小生、八九子、可作仁可知禮といふことを教へる、上大人は上古の大聖人、丘乙己は孔子一人のこと、化三千は門徒三千人を教化すること、七十子は達者七十人のこと、彌少生八九子は彌等小童八九人といふこと、可作仁可知禮とは上記のものはいづれも仁義禮智信を知り、仁義禮智信を行ふべきものであるといふ意味、今僧が師家に遇つて禮拜したるは即ち禮を知り禮を行つたのである、「峰打つこと五棒」雪峰和尚は僧の禮拜を見ると直ちに五棒を喫せしめた、五棒を五行、五徳、五位等の數目に當て、理窟をこぢ付ける人があるが雲峰は此の際決して其の様な思量分別を用ひられたのではない、勢に乗じて五つ六つ引つばたいたのである、これ畢竟僧をして心眼を開發せしめんとする爲人である、「現成公案」打つ手許に於いて公案が現成した、作家の漢は擧手投足如何なる場合に於いても公案を現成せしめるものである、「僧曰く、過甚の處に在る」僧は痛棒を受けて漸く共に歸つて、私は師に對する禮を行つたのにどういふ譯で打たれるか、私に如何なる罪がありますかと問ふた、臨濟和尚は始め黃檗和尚に六十棒を下されて大愚和尚に某甲過什麼の處にかあるといつて尋ねられた、黃檗の六十棒は臨濟をして這箇に相見せしめやうといふ大悲悲の



發露であるけれども臨濟はまだそれが分らぬ、打れるのは何時でも打たれるものに過があるからであると思つて居る、今雪峰の五棒を喫した僧も、雪峰の意旨が分らぬと見えて臨濟と同じ様な問を發した、併し臨濟は臨濟の力を以つて問ひ此僧は此僧の力を以つて問ふて居るから、語は同じでも大に異つた様子がある、「恩を知らざるの漢、親切な痛棒を頂戴しながら如何にも不平らしいことをいふ、まだ自分の事に相見が出来ぬとは實に師の恩に酬ひざるものといふべきである、「峰又打つこと五棒して喝し出す」過があるのな役にも立たぬ妄想を抱いて居るから、雪峰は更に五つ六つ叩いて逐ひ出して終つた、妄想妄念を根こそぎ拂ひ去らうといふ徹悟の慈悲である、所謂前箭は尚ほ軽く後箭は深しといふ作略を用ひた、「叮嚀は徳を損ず」二度目の五棒はなくながなであつた、餘り叮嚀過ると却つて輕卒になると抑へた。

玄樓曰、雪峰末後一喝漏逗不少見孔

【和訓】玄樓曰く、雪峰末後の一喝漏逗少からず。孔を見て概を著く。

【評唱】「雪峰末後の一喝、漏逗少からず」雪峰和尚五棒を再度までも拈川せられたのは結構である

が末後に一喝を加へられたのは餘計なことであつた、講釋が過ぎて却つて難しくなつて終つた、漏逗はモルトバコホルで、缺點の多いことを漏逗少からずといふ、又天寶遺事といふ書物に「明皇蜀に幸す、黃幡綽に問うて曰く、車上の鈴聲頗る人の言語に似る、綽對へて曰く、三郎郎當三郎郎當といふに似たり」とあつて註に三郎は明皇の名、郎當は琅瑤に作るとある、要するに郎當は不明不整等の意味である、「孔を見て概を著く」玄樓和尚好い處へ概を打ち込まれた、これがないと折角の公案が何處やら隙間があつてグラ／＼する、此の評唱でチャンときまりが付いた、方木圓竅に入らずであるから、若し玄樓和尚が無暗に概を打ち込んだならばシツクリとは行かなかつたであらうが、孔を見てそれ相應の概を打ち込んだから丁度都合よくはまつたのである。

頌曰、赤心傾盡老婆禪求人太切 何事慇懃猶刻下坡不走 舩快便難逢 因憶昔年

臨濟照引兒 太愚助下築三三拳 勿守 株待

【和訓】頌に曰く、赤心傾け盡す老婆禪人を求ること 何事ぞ慇懃に猶ほ舩を刻む、坡を下つれば快便な 因つて憶ふ昔年臨濟の照引兒 太愚助下三拳を築く。株を守て免を待つと勿れ。

【頌】『赤心傾け盡す老婆禪』雪峰和尚は赤心を披瀝して僧の爲に挖泥帶水せられた、一度ならず二度までも棒を拈じて、僧をして佛知見を開發せしめんとせられたのは實に老婆心甚だ切なるものといふべきである、老婆禪とは叮嚀親切な禪風をいひ、赤心とは餘念なき誠心をいふ、人を求むることと太だ切なり、雪峰和尚は明眼を具する人を求める心太だ切實であるから、かく種々と手段を盡して爲人接衆をせられるのである、『何事ぞ慙慙に猶は舂を刻む』それにしても餘り叮嚀過ぎるではないか、何故あの様に舂を刻む様な愚なことをせられるのかと疑問を起して次の二句で之を解決する句勢である、慙慙は叮嚀懇切な様子、舂を刻むといふは、昔或人が船に乗つて川を下る時、過つて劍を水中に落した、其の人は如何にも心得顔に、ナニ此處に印をして置けば劍を探すのは造作ないことだというて劍を落した舂の位置を削つて置いて、岸へついでから船頭其の位置の水中を探らせたが、素より船は舂を落した處に止まつて居る筈はないから遂に徒勞に終つたといふ、今雪峰が僧を接得する手段は恰も舂を刻んで劍を求むる様なもので、元來學人を轉迷開悟せしむるには單刀直入的でなくてはならぬのに、斯様な迂遠な挖泥帶水では到底其の目的を達することは出来ぬ、されば風外老人も『坡を下つて走らざれば快便逢ひ難し』と著語せられた、坡は堤である、快速な便

船に乗り込まうと思へばグヅグとして居ないで堤を下して走らなければ駄目ぢや、捷徑を急ぐに限る、因つて憶ふ昔年臨濟の照』それに就いて憶ひ起すことであるが夫の臨濟和尚は黃檗の爲に三頓の棒を蒙つて其の場で三拳を築いて之に應ずべきであつたのに『太愚肋下三拳を築く』太愚の爲に指示せられて、其の言下で始めて三拳を酬ゆることを會得した、臨濟の如き大宗師家でさへ、其の修行時に於いては斯様に迂遠であつた、されば雪峰座下の某僧の如きは雪峰が再度の痛棒を喫するにあらずんば大事を了畢することが出来なかつたのである、因憶云々の著語「癩兒伴を引く」雪峰も僧も臨濟も黃檗も、いづれも皆同病相憐れむお仲間である、玄樓和尚も大方それに漏れぬ一人であらう、兎角癩病坊は仲間を作りたがるものである、太愚肋下云々の著語「株を守つて兎を待つことと莫れ」昔愚かな農夫があつて、兎が島を走つて隅ま木の株に衝き當つて斃れたのを獲て、其の後毎日同じ株の傍へ行つて兎の斃れるのを待つたといふが、臨濟が太愚の言下に悟つたと聞いて僧も又雪峰の痛棒によつて悟ると思ふのは愚かなことであると抑へた。

第七十四則 瀉山選主の話

瀉山祐禪師在百丈爲典座時團圍百丈因司馬頭陀尋得大瀉
 山地選人主之何人不丈曰老僧住得否小賣陀曰彼是肉山和尚
 是骨人若居之只安五百衆勿畫彼可安千衆唯是千丈曰吾衆
 中莫有人住得否唯不其人〇陀曰觀典座可住得約卜作丈乃喚
 典座來說與轉他時首座聞得曰當某甲去彼何人也不知丈乃
 集衆曰下語出格者得權衡於遂拈淨瓶置地設問曰不得喚
 作淨瓶喚作甚麼眼光首座曰不可喚作木楔也好人天丈復問
 典座座乃踢倒淨瓶而去尋常丈笑曰首座輸卻典座也正眼因命

典座往住山後果安千衆豈唯千衆三世諸佛

【和訓】瀉山祐禪師百丈在りて典座と爲る時、團圍拈す百丈因みに司馬頭陀大瀉山の地
 を尋ね得て人を選びて之に主たらしめんとす、何人か住せ、丈曰く、老僧住し得んや否や、
 小賣 陀曰く、彼は是れ肉山、和尚は是れ骨人なり、若し之に居たまは、只だ五百衆を安
 ぜん、人を畫く彼は千衆を安す可し、唯だ是れ千衆 丈曰く、吾が衆中に人の住し得るもの有
 ること莫きや否や、唯だ其の人にあらす〇 陀曰く、典座を觀るに住し得べし、約卜虛聲 丈乃
 ち典座を喚び來らしめ説與す他に隨時に首座聞き得て曰く、當に某甲去る可し、彼れ何
 人ぞや、分を知らざるの漢 丈乃ち衆を集めて曰く、下語出格の者得てん、佛祖に權衡たり遂に淨瓶を拈じ
 て地に置いて問を設けて曰く、喚んで淨瓶と作すことを得ず喚んで甚麼とか作さん、眼
 人を 首座曰く、喚んで本概と作す可からず、好し人天 丈復た典座に問ふ座乃ち淨瓶を踢倒
 して去る、尋常の 丈笑つて曰く、首座典座に輸卻せり、正眼私 因て典座に命じて往いて住

山せしむ、後果たして千衆を安ず。豈唯だ千衆のみならんや三世の諸佛も亦た他の園續を出てす。

【本則】『瀉山の祐禪師百丈に在りて典座と爲る』瀉山靈祐禪師のことは第二十七則第三十一則にも一應述べて置いた筈であるが、五家七宗の瀉仰宗の祖で百丈懷海禪師の法を嗣ぎ、瀉山に住して接化利生すること多年、仰山、香巖、等の俊髦を其門下から出して居る、唐の宣宗大中七年八十三歳を以つて寂し、太圓禪師と謚せられた、此の瀉山和尚が百丈禪師の下に在つて典座の役に當つて居つたことがあつた、典座は叢林にあつて大衆の食事を司る役で、極めて實頭のものにあらずんば任ぜられぬ、殊に百丈山は規律嚴正な大叢林であつたから此處の典座に當つた所を見ると如何に瀉山和尚が眞實な修行者であつたかが察せられる、「團圓掬するが如し」師匠の下で弟子が典座をして居る誠に師弟の間柄の親密なことである、「百丈因に司馬頭陀大瀉山の地を尋ね得て人を選んで之に主たらしめんとす」司馬頭陀とは傳燈九の註に「司馬頭陀は參禪の外、人倫の鑑を繕み兼ねて地理を窮む、諸方に院を鞫む云々」とある、頭陀は料櫛と譯し諸の煩惱を料櫛し諸の執着を離る、との義であるから、畢竟司馬某といふ佛法歸依者である、此の人が大瀉山に地を相して寺を建て、之に住持たるべき人を求めた、百丈山には澤山な雲衲履袂が集つて居るから、其の中には適當な人物があ

るかも知れぬといふので物色しにやつて来た、雲水の人物鑑定をしやうといふ程であるから司馬頭陀も一雙眼を具したものに相違ない、「何人か住せざるの人」別に鑑定する必要はない、人々個々圓成であるから、いづれも皆住し得る底の資格を具へて居ると、風外老人は放行の方面から著語せられた、「丈曰く、老僧住し得んや否や」衲が行つて住しやうかと百丈和尚は自分で推薦せられた、此處に一箇の住し得る底があるぞといふ見識である、「少賣弄」百丈和尚は佛法の小商を初められた様であるが大した利益はあるまいと擲論した、「陀曰く、彼は是れ肉山、和尚は是れ骨人なり、若し之に居たまは只五百衆を安んぜん」司馬頭陀は百丈和尚の自己推薦を聞いて、大瀉山は頗る寺祿の豊富な肉山であるが、和尚は瘦せた仙骨稜々たる、いづれかといへば貧相に見える方の人であるから彼處の住持としては不適當である、集まる雲衲も五百を超えることはあるまい、人境不相應であるといつて百丈和尚を排斥した、所謂佛を呵し祖を罵るといふ作略である、「人を書くこと勿れ」無暗に人を是非することは良くないと風外老人は一寸頭陀を抑へた、「彼は千衆を安んずべし」元來彼の大瀉山は千人以上の雲衲を置くことの出来る所である、只千人を容る、と容れざるとは住持人の徳に依る、「唯だ是れ千衆のみならんや」千人どころか萬億那由他劫を容る、ことが出来る、芥子

に須彌を容れるとさへいふではないかと評する、「丈曰く、吾が衆中に人の住し得るもの有ること莫しや」それは吾が座下の大衆の中に其處の住持たるべき人物があるかと一步を譲つて頭陀の點檢に任せる、「誰か其の人にあらざる」典座に限つたことではない、誰でも皆其の人である、「眼什麼の處にか在る」ありや莫しやといふ處を見ると百丈和尚にはそれが解らぬらしい、全體目は何處に著いて居るのかと擲擲する、「陀曰く、典座を觀るに住し得べし」頭陀は典座和尚の優れた人物に眼を著けて、あの和尚ならば大瀉山に住して千人の衆を領することが出来やうといふ、「杓ト虚聲を作す」杓子の柄の鳴る様な無意義なことを言つて何の役に立つかと抑へた、「丈乃ち典座を喚び來らしめて説與す」百丈和尚は典座の靈祐和尚を喚びよせて大瀉山の住持になることを勧めた、「他に隨つて轉ず」百丈和尚は浮乎頭陀の口先に誤魔訛されて典座を召寄せたが、何も典座ばかりが瀉山の適任者でもあるまい、「時に首座聞き得て曰く、當に某甲が去るべし彼何人ぞや」其の時一山大衆の首座位に居つた僧が不平で堪らぬ所から、典座抑も何の力がある、請待あれば順席としても此の首座が應すべきであると唱へた、何處の僧堂でもありさうなことであるが力も無い癖に他の立身を嫉むのは實に苦々しいものである、されば風外老人も「分を知らざるの漢」と著語せられた、「丈乃ち衆を

集めて曰く、下語出格の者得てん」それではといふので、百丈和尚は衆を集めて、我が提出した問題に對して一轉語を下して、それが格式を絶し本分の事に契つたものが大瀉山に行くことにしやうと言つた、これでは不公平もあるまい、「佛祖に權衡たり」百丈和尚は實に佛々祖々の境界力倆をも量り得る處の大度量衡であると讃揚した、「遂に淨瓶を拈じて地に置いて問を設けて曰く、喚んで淨瓶と作すことを得ず、喚んで甚麼とか作さん」これが試験問題である、百丈和尚は師家等が清淨な水を容れて手を淨めたり時には渴を醫する爲に用ひる淨瓶を一旦取り上げてから又地に置き、大衆に告げられた、淨瓶といふも假の名である、若し之を淨瓶と呼ぶべししたら又何と喚んだものであらうか、サア諸人者何とでも適當な眞實の名を言つて見よ、道ひ得るものは大瀉山に住持たることが出来るかと宣告せられた、「眼光人を射る」百丈和尚は斯様に問端を提起して置いてチツと大衆の脚下を睨んで居る、却々油斷も隙もあつたものではない、「首座曰く、喚んで木楔と作すべからず」先づ首座が所解を呈した、他の大衆は聲の如く啞の如くであつたが流石に吾こそ大瀉山の住持となることが出来るかと自負して居る程の人物であるから、差し措かず所解を呈した、木楔は木履のことである、淨瓶は何處までも淨瓶であるから之を木履と呼ぶことは出来ぬ、山は山、河は河、それく